



# 姫君と藩主

(一)

---

城下町の茶屋に、珍しい容姿をした看板娘がいる。

少年がそんな噂を耳にしたのは、本当に偶然のことだった。

怠けているのがばれないように、木の上でぼんやりと風を感じていたとき、足もとを通りがかった兵士たちが話していたのだ。

(珍しい容姿、か……一体どんな娘なのだろう?)

咄嗟に思い浮かべられなかった少年は、俄然興味を惹かれた。美しい娘や美しくない娘なら見たことはあったが、『珍しい娘』など見たことがない。

見てみたいと、思った。

(一一行ってみるか)

少年は元来、好奇心旺盛な子どもだった。そして、住処を抜け出すことに長けていた。

顔だけは見られないよう、円錐形の笠を目深にかぶって走り抜け、あっという間に茶屋の前。

ぜいぜいと肩で息をしながら見やると、その茶屋はこぢんまりとした佇まいながらも、なかは客でいっぱいのような様子だった。かなり繁盛しているらしい。

(もしかして、例の看板娘のせいかな?)

それほど魅力的なのだろうか、いやが上にも期待が高まる。

ごくりとつばを呑みこんだ少年は、一步一步踏みしめるように茶屋へと近づいていった。

戸口まで来ると、身長がまだ低いため暖簾をあげる必要もなくなかが見えた。やはり座る場所はないようだ。そして、働いている娘たちは、さして他の茶屋と違いなく見えた。

少年はがっくりと肩を落としてから、外にあるまっ赤な布の敷かれた床机に腰かける。傍には大きな番傘が開いた状態で固定されており、おかげで日陰になっていて少し涼しかった。

(所詮は噂か……)

お茶を一杯もらったら、すぐに帰ろう。

思った以上に落胆している自分を感じながらそう考えた——そのときだった。

「いらっしゃいませー！」

「……っ!?’

思いがけない方向から声をかけられ、少年の肩はびくりと大きく震える。

(なぜ『こちら』から?)

てっきり戸口のほうから注文を取りにくると思っていたのに、声が聞こえたのはまったく逆のほうだったのだ。しかも、急いで振り返って見ると——

(あ……!)

その人物こそが、自分の探していた相手なのだと、すぐにわかった。

太陽の光を浴びて、きらきらと輝く金色の髪。そして、透きとおるような碧色をたたえた瞳。

どちらも、少年の知るすべての娘は持たない色だった。他の者たちはみんな、まっ黒な髪とまっ黒な瞳を持っていたからだ。

その不思議な美しさに、少年は取り繕うことさえ忘れて、見入ってしまう。

(こんな色を持つ人が、いるのか)

髪が緩やかに波打っているせいか、光を拡散しているようにも見えた。碧い瞳は、まるで宝石。それらの色合いがまた、桜色の麻着物と黄色い細帯によく似合っていた。

まさに看板娘だ――と納得する少年の目の前で、彼女は深々と頭をさげる。

「あの……すみませんっ、驚かせてしまって」

少年が散々向けていた不躰な視線など、まるで気にしていない様子だった。おそらく、じろじろと見られることに慣れているのだろう。

むしろ少年のほうが、失礼だった自分の反応に気づき、さっと頬を赤らめた。

「こ、こちらこそ申しわけない！」

一言そう謝ってから、なんとか会話を続けようと試みる。

「い、今、あなたはどこから出てきたのですか？」

必死の思いでそれだけ告げると、彼女は小さく笑った。手にした黒い盆で口もとを隠して、

「いいんですよ、お客さんはそのように丁寧な言葉遣いでなくて。ましてあなたは、まだ子どもなんですから」

そう言われて、少年の顔はますます赤く――熱くなる。

「き、きみだってまだ子どもじゃないかっ！」

自分と同じくらいの年齢に見えたから、少年はそう反論した。

しかし彼女は、あっさりと躲す。

「わたしはおもてなしをする側ですから、いいんです！ 今、裏口からまわってきたんですよ。お店のなかはお客さんがいっぱい、通路を通るのも大変ですから」

少年が見たときも確かに、店のなかにはそれほどの客がいた。

そこで少年は、気になっていたことを素直に尋ねてみる。

「みんな、きみを見にきているのか？」

すると彼女は、一度大きく目を見開いたあと、すうと細めて答えた。

「そう……なのかもしれません」

「では、なかになくていいのか？」

なおも尋ねる少年に、

「髪を引っ張られたりするの、やっぱり嫌ですから」

答えた彼女は、にっこりと笑いかける。

「……っ」

それがひどく眩しくて、今度は少年のほうが目を細めた。

(他の客には、絶対に言わなそうなことなのに――)

正直な心話を話してくれたのは、自分がまだ子どもだからだろうか？

そう予想した少年は、もっとその笑顔が見たくて、それを逆手に取ることにした。

「それなら、ここにいればいい」

(こんなにきれいな髪を引っ張るようなやつがいる場所に、いる必要なんかない)

半分気持ちを隠して告げた少年の言葉に、彼女は曖昧な表情で応える。

「お客さん、ご注文は？」

それも、躲す言葉だったのだろうか。

判断がつかなかった少年は、思いのままに口を開く。

「――きみ」

「え？」

「きみとずっと、話がしたいから」

逃げられないように手を伸ばして、短い袂を掴んだ。

赤かった少年の頬の色が、まるで指先から伝わったかのように、今度は彼女の肌を染めあげてゆく。

「あ、あの……」

また盆で顔を隠した彼女は、戸惑った様子を見せながら、くるりと身体の向きを変えた。

その背中に、蝶々のような帯結びが見えて、少年は覚悟する。

(そのまま、飛んでいってしまうのか)

しかし――

意外にもその蝶々は、ふわりと少年の隣にとまった。

「……少しだけ、お話ししましょうか」

そうはにかんだ笑顔は、太陽のようだった。

(二)

少年がそんな出逢いを迎えていた頃、少女はやがて訪れる未来を知り、小さな胸を痛めていた。

「それは本当なの？ あたし、毎月でも帰ってこようと思ってたのに……」

乳母(めのと)とふたり、母屋の縁側(すのこ)に腰かけて交わす言葉は、少女にとって雨のようなものだ。  
「本当ですとも。姉上さまたちも、そう頻繁には帰省していらっしやらないでしょう？」

じつとりと心の奥を濡らし、気持ちが重くなってゆく。

「……頻繁どころか、そういえば嫁いでから一度も会ってないわ」

少女がしぼんだ声音で答えると、乳母は傍にあった少女の左手に自分の右手を重ねた。

「あら、どうしたの？」

あたたかいそのぬくもりに、少女は首を傾げる。

すると乳母は、申しわけなさそうに眉を八の字にして、

「――『あの子』のことを、気にしておられるのですね？」

「……っ」

少女は、気づかれていたことに一瞬驚いた。

しかしすぐに、

(いつもあたしの傍に居てくれたんだもの、当然だわ)

そう思いなおす。

それからじつくりと、言葉を探して答えた。

「約束、しちゃったから」

(どこかの藩主に嫁いでも、月に一度は帰ってくるから)

誰にも触れさせないし、誰にも心を動かされない。

そんな約束を、していた。

少女の手を、乳母はぎゅっと握りしめる。

「どうかお気になさらずに、ご自分の幸せだけを考えてくださいませ」

乳母がつらそうに訴えるのは、少女の約束の相手が乳母の息子であったから。まだ城兵ですらない見習い。目の前の少女とはとてもつりあわないと、誰もが指を差す身分だった。

少女は表情を変えないまま、乳母の手を包みこむようさらに自分の右手を重ねる。そしてまっすぐに、乳母の顔を見つめた。

「わかってるわ。だってこの気持ちは、会ったこともない相手に嫁がなければならない不幸を、幸せに変えるためのものなんだもの」

たとえ二度と会えなくなっても、好きであった記憶は、きっと、ずっと、自分を支えてくれるだろう。

そう自分に言い聞かせ、微笑む少女の瞳から、それでも想いは溢れ出る。

(生まれた瞬間(とき)から、わかってたはずなのに――)

十六になったら、見知らぬ相手に嫁がねばならないこと。

そのための覚悟をつくっていたし、学術も武術も馬術もきちんと学んできた。

(でもあたしは、いちばん基本的なことを、忘れてた)

恋をしないということ。

絶対に実らない恋など、相手にとっても迷惑な話だろうと――恋をしてしまってから、気づいたのだ。

乳母はそっと少女の身体を引き寄せ、胸を貸してやる。自分にも責任があるのだと、そう思っているの

かもしれない。刻まれた表情は、哀しみに満ちていた。

そこへ、

「――あれっ？」

偶然石庭を歩いて現れたのは、その『彼』だった。

明らかに泣いている少女を見て、彼は縁側に駆け寄る。

「ど、どうしました!? どこか痛むんですかっ？」

問われても、少女は乳母の胸から顔をあげなかった。あげられなかった。今顔を見てしまったら、自分の気持ちを吐露してしまいそうだったから。

乳母はそんな少女の気持ちを察してか、あいている左腕を伸ばして彼を制した。

「今は放っておき。あんたに、この痛みは治せないよ」

「え……っ？」

彼は目を丸くすると、震える少女の背中を見おろす。

「もしかして、僕のせいで泣いているんですか……？」

思わずびっくりと反応してしまった少女は、

「違うの！」

くぐもった声で答えた。

「自分が情けなくて……だから気にしないで」

「き、気にしないでと言われても……」

「明日には、ちゃんと笑うから！」

背中で強く告げる少女を援護するように、乳母は強い瞳で自らの息子を見つめていた。

そこにこめられた想いに、彼はどれほど気づけたのだろうか。

「――わかりました」

淋しそうにそれだけ告げると、石庭の奥へと戻っていった。

少女はわずかに顔を浮かせ、悟られないように横目でそれを見送る。まだ告げられない言葉を、いくつも呑みこんで。

(ごめんね……)

心のなかで呟いた少女に応えるよう、上空を旋回していた鷹がぴいと鳴いた。

少年と少女。

ふたりが新しい絆で結ばれるのは、それから二年後のこと――。

奏和暦(そうわれき)二二五年、三月初旬。

奏和の国を統べる壺師(いちし)の娘・朱華は、南へと向かう牛車のなかにいた。

「――ねえ、そこのあなた。今どのあたりにいるの？ 対岐(つき)まで、あとどれくらいかかる？」

輿の脇についた御簾を片手で持ちあげ、朱華は傍を歩く守人(もりと)のひとりに声をかける。

「は、はい！」

問われた若い守人は、大慌てで頭上の笠を胸まで引き寄せると、かしこまって答えた。

「現在は、第三十九藩・備芸(びき)のなかほどまで来ておりますっ。都と対岐のちょうど中間にあたる藩ですから、あと五日はかかるだろうかと」

「うう……前に訊いたのから全然減ってないじゃない！」

朱華が怒ったように告げると、周囲にいる他の守人三人から苦笑が漏れる。

「それは仕方ありません。姫さまがお尋ねになる間隔が、あまりにも短すぎるのです」

「そうですよ、朱華姫。先ほどお顔をお出しになってから、まだ一刻も経っていないじゃありませんか」

「お暇でしたら、後ろの牛車から読みものでもお持ちいたしましょうか？」

「そ、それはいいわ！ わかった、おとなしくしてる……っ」

本当に持ってこられてはたまらないと、朱華はあげていた御簾をおろしてなかに隠れた。

それでも忍び笑いは追いかけてきて、朱華の顔をまっ赤に染めあげる。

(もうっ、みんな面白がってるんだから！)

心のなかでそんな文句を言いながら、朱華はその場に大の字になって寝転がった。それは、牛車の輿にしては広い空間に、ひとりきりだからこそできる、はしたない行為だ。もし誰かに見られでもしたら、先ほどの比ではなく笑われることだろう。朱華とて十分に理解していたが、それでも寝転がらずにいられないわけがあった。

一都五十二藩からなる島国・奏和。その中心にある都で、朱華は生まれ育った。こうして対岐に向かうまで、一度もそこから出たことのなかった朱華にとって、すでに五日も続いている長旅は苦痛そのものなのだ。朱華はそれを横になってやりすごすことで、なんとかこらえていたのだった。

輿の天井に描かれた桜の絵を見ながら、長いため息をひとつ吐く。

(長く揺られるのはもちろんだけど、着物が重いのがいちばんつらいのよね)

朱華が今身につけている嫁入り用の着物――花着物は、通常の三倍ほど重ね着をしたものだ。そうすることにより、襟もとと足もとを華やかに見せることが目的で、動きやすさはまったく考慮されていない。おまけに、着ているとかなり暑い。

それでも簡単に脱ぐことができないのは、その花着物自体が朱華の身分証明となっているからだ。旅のあいだ、藩境を自由に移動できたり、それなりにいい宿に泊まれたりするのは、すべて花着物のおかげ。その着物のいちばん外側にある、通称を『都色』という鮮やかな朱色は、国の主(あるじ)たる壺師お抱えの染め屋にしか出せない色だと言われていた。

もっとも、朱華にはそれが鮮血の色に見えて、実のところあまり好きではなかった。朱華の機嫌が直らないのには、そういう理由もあったのだ。

(この状態でさらに五日間なんて、信じられない！)

第五十一藩にあたる対岐は、一体どれほど遠いというのだろう。

都から離れてゆくたびに――いや、本当は常に、朱華は櫻(けやき)のことを想っていた。

(こんなに長いあいだ顔を見てないなんて、初めてだわ……)

そしてもう会えないかもしれないと思うと、胸が詰まる。

櫂は、朱華を育ててくれた乳母(めのと)・萩(はぎ)の息子だった。朱華と同年ではあったが、とてもおとなしい性格で、むしろ朱華のほうがずっとおてんばだったくらいだ。それでも櫂は懸命に槍の扱いを学び、十二の頃には壱師の住まう都城の見習い兵となった。

(そのあとも、櫂は毎日顔を見せに帰ってきてくれたから)

ふたりはずっと一緒だった。

櫂が正式に城兵となったあとも、それは変わらずに。

いつしか、想いあっていた。

だが――互いにその気持ちを伝えあうことは、ついになかった。

それは朱華が、壱師の五十一番目の娘であったからだ。

(国のために、あたしは従わなければならない)

朱華は、自分の運命を素直に恨むこともできずにいた。

(だって櫂と会えたのも、やっぱり父上のおかげだから――)

この痛みを受け入れるしかないのだと、そうしないのはただのわがままなのだ、理解していた。

視線の先で楽しそうに舞う桜の絵から目を逸らし、朱華は身体を横向きにする。そして自分自身を抱きしめるように、そっと身体を丸めた。脚が完全に見えていたが、いつもなら叱ってくれる萩も、ここにはいない。

思い知らされるなにもかもが、朱華の心をきりきりとしぼるようだった。

(知らなかった)

人と離れることが。

人に嫁ぐことが。

こんなにも、つらいことだったなんて――。

朱華の瞳からつうと雫が落ちたとき、

「うわっ、な、なんだ……!?!」

外から守人たちの悲鳴が聞こえた。同時に届いた羽音に、朱華はその理由を悟って飛び起きる。袖でぐいと目の辺りを拭くと、勢いよく御簾を開けた。

「どうしたのっ? 落ちつきなさい!」

朱華が叫んだ相手は、うろたえている守人たちではなかった。その守人たちのあいだを縫うように低く羽ばたいている、一羽の鷹だ。

「ほら、こっちにおいで鷹雄(たかお)!」

朱華が奥のなかから左腕を伸ばすと、鷹雄と呼ばれた鷹はすぐに反応し、朱華のもとへと飛んでくる。――そう、その鷹は朱華が飼っている鷹なのだ。そのため、本来ならば鋭い爪も、朱華に怪我をさせないようにきちんと手入れされている。

【都の権力をみだりに誇示してはならない】

そのような壱師の教えがあるため、『壱師の娘たち』の嫁入りに際し同行を許されるのは、壱師から贈られる鷹だけと決められていた。それは、より早く藩での生活に溶けこむための手段でもある。『どうせ侍女をつけるならば、都の者でなく藩の者をつけよ』ということだ。

もちろん朱華とて例外ではなく、今ともにいる守人たちも、朱華を対岐へと送り届けたあとはみんな都に帰ってしまうのだ。

「騒がせてごめんなさいね」

朱華は守人たちに謝罪してから、鷹雄を腕に乗せたまま御簾のなかに戻った。鷹雄は鷹のなかでも小振りな種類であるため、暴れたりしない限りはこうして一緒に牛輿に乗ることもできる。都にいた頃も、何度か一緒に乗ったことがあった。

だが、呼んでもいないのに近づいてきたのは初めてのことだ。

朱華は右手で鷹雄の頭を撫でながら、問いかける。

「おまえも、淋しいの？」

鷹雄は、櫂にも萩にも懐いていた。そして実は、鷹雄に名をつけたのは櫂だった。

(雄の鷹だから鷹雄だなんて、ね)

今思うと単純すぎる名づけも、幼かったふたりにとっては素晴らしいものを感じていた。

そんな昔が、都と一緒に遠ざかっているような気がして――今度は鷹雄を抱きしめる。

(思い出も想いも、あたしは絶対に失くさないから……！)

(二)

朱華が対岐(つき)の藩境を越えたのは、それから五日後の昼過ぎだ。若い守人(もりと)の予想は見事に当たってしまったが、朱華もその覚悟ができていた分、前半よりはいくぶんましな旅路となった。

藩の中心にある対岐城へと近づくと、沈んでいた気持ちも少しずつ高まってくる。

(――そうよ、いつまでもくよくよしてはいられないわ！ あたしは都と藩を繋ぐ役割を担うために、こんな南の端までやってきたんだからっ)

そう気合いを入れなおしたところに、ちょうど輿の外から声がした。

「姫さま、前方に対岐城の天閣が見えてきましたよ」

「えっ、どれどれ!？」

朱華が急いで御簾から顔を出すと、まだ結構な距離があるにも関わらず、確かに天閣の上部が見えていた。白漆喰で塗り固められているのだろう白壁は美しく、黒光りする瓦屋根をいっそう際立てている。形状は一般的なものと変わらないようだったが、問題はその高さにあった。

(ここから見えるということは、五層くらいはあるのかしら?)

そもそも天閣とは、城郭の象徴として敷地の中心に建てられる櫓(やぐら)のことであり、それが藩民たちの心の拠り所にもなる大切なものだ。そのため、ある程度の高さを出して、城下町のどこからでも見えるようにすること自体は、よくあることだったのだが――

(こうして対岐に入るまで、他の城郭にある天閣も見えてきたけど、ここのが断然高いわ!)

各藩の天閣は、壱師が藩民に【藩主のために力を合わせてつくるように】と号令を出し建てさせたものだと、朱華は聞いていた。つまり、天閣の高さはそのまま、藩民たちの信頼や期待を示していることになる。(どうやら、人間的には心配する必要もなさそうね)

これから夫婦になるというのに、相手の名さえ知らない朱華は、そっと自分の胸もとに手を当てた。指先にある硬い感触は、朱華が自分の身を守るために用意してきた――懐刀だ。

(……こんなものを用意してるあたしのほうが、よっぽど問題がありそうな気がするわ)

ひとり笑って、守人たちに不審な顔をされながら、御簾のなかへと顔を戻す。

守人の「着きました!」という声が届いたのは、朱華が何度目かの深呼吸を終えた頃だった。

重い着物を引きずるようにして輿から降りた朱華は、目の前に広がっていた風景に、せっかく整えていた息を呑みこむ。

(すごいわっ、なんてきれいな……!)

その周囲をぐるりと広い水堀に囲まれている対岐城は、まるで湖に浮かんでいるような錯覚に陥るほど、幻想的な姿をしていた。通常は土留めの上に石垣が詰まるところ、対岐城の場合は水面ぎりぎりから石垣が始まっており、それが余計に不思議な感覚を生み出しているのだろう。

高い天閣しか想像していなかった朱華は、しばしその場で見入ってしまう。

するとやがて、正面に見えている面手門(おもてもん)が開き、そこから桔橋(はねばし)を通して近づいてくる人の姿が見えた。長い烏帽子をかぶっているところから、それなりに高い地位にある人物だろうことがわかる。

(まさか藩主本人ではないと思うけど……)

【他人に正面から顔を見られるのは女の恥】と教えられていた朱華は、袂から取り出した空色の扇を広げて待つ。

朱華のすぐ前まで近づいてきた男性は、片膝を折ると恭しく頭(こうべ)を垂れた。

「そのお着物、間違いなく都色と拝見いたしました。都上(とがみ)の姫君でございますね？」

(あら、都の外の人たちは父上のことを名では呼ばないのね)

『都上』とは、民が耆師につけた敬称だ。実は耆師自身は、そう呼ばれることをとても恥ずかしがっているようで、都の人々には名で呼ぶようにと厳しく指導していた。だが、普段接することのない藩の人々までには、手がまわっていないらしい。

(せっかくあんな父上を尊敬してくれてるんだもの、印象を壊さないようにしなくちゃ)

朱華はそんなことを考えながら、扇を少しさげ、こくりと首を振る。

「はい。都から参りました、朱華と申します。これからお世話になります」

必死に練習してきた余所行き笑顔で告げると、年配に見える男性の頬がぽっと赤くなったのがわかった。

(ほら見なさいよ、櫂。あたしだって、やればできるんだから！)

あまりにも行動的すぎる朱華は、いつも櫂に心配されていた。そして毎日のように小言を聞かされていたため、いつかその鼻を明かしてやりたいと思っていたのだ。

たとえ今、ここに櫂がいなくとも。朱華のなかには確かに、『櫂の目』があった。

「わたくしは守人頭の楊(やなぎ)と申します。姫君をお連れするよう、我が主より仰せつかって参りました。さあさ、なかへどうぞ！ お荷物はこちらで運んでおきますので」

言いおわるなり、くるりと背を向け歩きはじめた男性・楊の後ろ姿を、得意げに胸を反らせた朱華が追ってゆく。花着物は相変わらず重く歩きづらかったが、こんなところでいきなり躓きたくはなかった。

そんな朱華を助けてくれたのは、例の若い守人だ。

「あっ、ぼくが後ろの裾を持ちます！」

すぐに走り寄ってくると、歩きにくい原因のひとつである後ろの長い裾を持ってくれた。桔橋が思ったより狭いこともあり、そのままでは裾が濡れてしまうかもしれないと心配したのだろう。さいわい、裾を持ちあげても脚が丸見えになるわけではないので、ありがたい。

「ありがとう」

足をとめた朱華が礼を言いながら振り返ると、牛車の傍で見送る守人たちの姿が目に入った。

そこで朱華は、やっと思い至る。

(ああ、そうか。みんなともここで別れなんだ。あたしはここで、ひとりきりで頑張らなきゃならない)

牛車のなかでは櫂のことばかりを考えていて、そちらの覚悟はまったく足りていなかった。

今さら震えてきた脚を鼓舞するように、右手の扇をぎゅっと握りしめる。

「みんなも、ありがとう！ 気をつけて帰ってね～」

楊が前を歩いていることも忘れて、朱華は大きな声で告げた。

案の定楊は驚いた様子で振り返ったが――朱華渾身の笑顔に騙され、またすぐに前を向く。

朱華はにやりと口角をあげた。

(さあ、あたしにできることからやりましょう！)

天閣の上には、優雅に飛びまわる鷹雄の姿も見えたから、ひとりきりの怖さは少し和らいだ。

長い桔橋を渡りきると、そこには対岐側の侍女が数人控えており、裾を持つ役目を代わってくれる。

楊はその作業が終わるのを待ってから、再び歩き出した。颯爽と面手門をくぐってゆく。

改めて深呼吸をする暇もなく、朱華もあとを追った。その目に飛びこんできた城郭の内部は――またもや、想像していたものと違っていた。

(あらら、どこを見ても土塀ばかり！)

おまけに、どの塀にもきちんと槍や弓で攻撃するための穴がついている。それ以外で見えているものと

いえば、高さのある天閣と、いくつかの櫓の頭。他には、小さなつぼみを見せはじめている桜の木々くらいだった。幻想的な外観から朱華が想像した、豪華絢爛な御殿などどこにも見えない。

あまりにもきょろきょろとしている朱華が気になるのか、前を歩いていた楊は少し歩を緩めると、朱華の斜め前までやってきて身体半分振り返った。

「当城郭は、中心から内角(うちかく)・二の角・三の角・外角(そとかく)の四つの敷地で成り立っております」

そして始まったのは、ありがたいことに対岐城の説明だ。

(なるほど一、だから塀ばかり見えてるのね)

都で城郭についての勉強をしてきていた朱華は、すぐに納得する。敷地の区切りが塀であるのだから、敷地が多ければ塀も多くなるのは当然のことだった。

(よく見ると、塀の下半分が石垣になってるところもあるし……外から見たのと違って、結構堅牢なつくりをしてるみたいだわ)

粘土や泥でつくられた土塀よりも、石垣のほうが頑丈なのだ。いつなにか起きてもいいように、しっかりとした準備——覚悟があるように見える。

(……うん、悪くないじゃない)

相手に恋をする予定のない朱華にとっても、それは好ましいことであるように思えた。

「藩主さまは、どちらにいらっしゃるのですか？」

一体どんな相手なのだろうと、少し興味を持って訊いてみる。

「内角にあります、水蓮御殿(すいれんごてん)のなかでお待ちですよ」

「睡蓮御殿？ まあっ、睡蓮がたくさん咲いているのですか!？」

(やっぱり城郭のなかにも素敵なお場所があるんじゃない！)

途端にうきうきとはじめた朱華を、しかし楊の声がとめる。

「あ、いいえ！ 花の睡蓮ではございませぬ。水の蓮と書くのです」

そのどこか楽しそうな口調に、朱華はぴんときた。

(一般的には、『御殿』の前につけるのって人名なのよね……)

それでも楊がはっきりと告げないのは、主の名を軽々しく語ることが嫌だから、なのかもしれない。現に朱華自身も、楊に名乗ってはいたのだが——

「さあ姫君、ふたつ目の門が見えてまいりましたよ」

そう、先ほどから『姫君』としか呼ばれていなかった。

(……そういうこだわりも、あたしは嫌いじゃないわ)

だからまた、扇の陰から笑顔を向ける。

すると素直に反応した楊は、照れたように視線を外しながら言葉を続けた。

「も、門はさらにあとふたつございますから、お疲れのところ申しわけありませぬが、おつきあい願います。この城郭内では、健康のためにお車の類は禁止されているのです」

(え……健康のためっ?)

その思いがけない理由に、朱華は心のなかで笑ってしまう。

(禁止したのは、やっぱり藩主よねえ。きっと変わり者なんだわ！)

(三)

朱華が案内されたのは、水蓮御殿のなかにある大広間だった。金色に塗られた壁や襖は美しく、朱華は初めて疲れ以外の理由でめまいを感じた。壱師の娘ではあっても、特別裕福に育ったわけではない朱華は、眩しく高貴な色にそれほど慣れてはいないのだ。

――そして、『とのがた』に鋭い視線を向けられることにも、慣れていなかった。

「そなたが、都上(とがみ)の姫君か？」

人の気配などまるで感じられない、がらんとした広い空間。そのいちばん奥で胡座をかき、ゆっくりと杯を傾けていたのは、切れ長の目をしたひとりの男性だ。

声をかけられ視線を合わせた朱華は、一瞬息をとめる。

(この人が、水蓮?)

長い髪は、男性にしては珍しく結わえられていなかった。そして、身につけている浅黄色の着物は、ごく普通の藩民たちが着るような形のもので――ただ布地だけは、上等のものが使われているらしい。杯を置き立ちあがった動作で、安い生地にはない光沢が見えたからだ。

「……そうです。わたくしが壱師の五十一番目の娘・朱華と申します」

ごくりとつばを呑みこんでから告げた朱華は、そのまま水蓮のすぐ前まで歩を進める。

水蓮はそんな朱華を品定めするように見やりながら、次の言葉を紡いだ。

「私は奏和の五十一番目の藩主・水蓮だ」

おそらく朱華の言いまわしを真似たのだろう。

次いで右手を差し伸べてきたから、朱華は心のなかで戸惑いながらも、右手に持っていた扇を左手に持ち替え、あいた右手を差し出した。

(櫂以外の男性に直接触れられるのは、本当に久々かもしれない)

おかげで手が触れる瞬間、緊張からか少し震えてしまう。

――だが、それを押さえつけるかのように、朱華の手を掴んだ水蓮の手は、きつかった。

「い……っ」

「都上も酔狂なことを考えるものだな。いくら世の安寧のためとはいえ、五十二人も子をなし、すべての藩に与えるなどと」

冷たい声音が、朱華の上に降る。くつつつと、嗤う声が続いた。

「――ああ、五十二人どころの話ではなかったな。娘の他に息子もたくさんいるのだろう？ 都上の代替わりに際し、さてはてどんなことが起こるのか、今から楽しみではないか」

(この人……父上が嫌いなんだ！)

朱華がぞくりと背中を凍らせたとき、水蓮は握りしめていた朱華の手を強く引いた。

「きゃっ!？」

おかげで水蓮のほうに倒れてしまった朱華は、その胸に抱きとめられる形になる。

だがそこに、甘さなどというものは一切なかった。

「都上には、私の父を藩主に選んでくれた恩がある。だからこそ、そなたを受け入れよう」

仮にも夫婦になろうという間柄であるにも関わらず、水蓮の声音はひたすらに冷たいのだ。

「しかしな、先に教えを破ったのはそちらだ。私はそなたを大切にするつもりなど毛頭ない」

「ちょ、ちょっと待ってよ！ 『教えを破った』ってなんのこと!？」

さすがの朱華も、おしとやかな姫君を演じてはいられなかった。左手の扇を力いっぱい畳に叩きつけ、啖

呵を切る。

「たった今、十日間も牛車に揺られてやっとのことで辿り着いたあたしが、一体なにをしたって言うのよっ!？」

(あたしだって、来たくて来たわけじゃないのに……っ！)

着いて早々にこんな扱いをされたことが、悔しくて仕方なかった。

一瞬でも、水蓮に会ってみたいと思ってしまったことが。

自然と浮かんでくる涙を必死にこらえて、朱華は水蓮をきつく睨みあげる。

一方の水蓮も、眉間にしわを寄せ朱華を見おろしていた。その口もとが、ゆっくりと動く。

「――都上からの知らせでは、都の権力をみだりに誇示しないためにも、受け入れるのはそなたひとりでよいと書いてあった。だが、実際はどうだ？」

『『どうだ?』ってなによ！ 実際今ここにいるのは、あたしひとりでしょ!？』

「今は、な。そんなにしらを切りたいなら、切れないようにしてやるさ」

にやりと不気味に笑った水蓮は、やっと朱華の手を放すと、戸口で控えていた楊になにやら合図を出した。

それを確認した楊はこくりと頷き、廊下に消えてゆく。

(一体なんなの?)

朱華には、まるで覚えがない。

もし鷹雄のことを言っているのだとしたらどう対処しようかと、思わず心配になったくらいだ。

そうしてやがて戻ってきた楊の手には、一本の縄が握られていた。

反射的にその縄の先を目で追った朱華の鼓動が、一瞬、とまる。

「樗……っ!？」

その縄に繋がれていたのは、手足を拘束され引きずられている樗だったのだ。意識がないのか、ぐったりと倒れていた。

そんな樗に駆け寄ろうとした朱華の腕を、水蓮が強い力で捕まえる。

「やはり知っていたのだろう？ そなたは。先にこの男を潜りこませ、一体なにを調べるつもりだった？」

しかし、すっかり冷静さを失っている朱華の力のほうが、今は勝っていた。

「あなたが言ってること、あたしには全然わからないったら！」

強引にその腕を振りほどくと、今度こそ樗のもとへと走る。そのときばかりは、重い着物も長旅の疲れも、朱華にはまったく感じられなかった。

必死な朱華の形相に恐れをなしてか、楊も朱華をとめるどころかその場から離れる。

「樗！ しっかりしてよ、樗!! 一体なにがあったのっ？ 都にいるはずのあんたが、どうして対岐(つき)にいるのよ!？」

顔色がまっ青で心配したものの、胸に手を当てたらきちんと動いていたから、朱華は懸命に呼びかけた。それを何度か繰り返しているうちに、やっと樗の目蓋が持ちあがる。

「樗！ あたしが見えるっ？」

「姫、さま……？」

だがまたすぐにつむろうとしたから、朱華は慌てて樗の両頬をつねってやった。

「こら寝るな！ 起きなさいよっ。あんたがこんなところにいるせいで、あたしは今なんだかよくわからない疑いをかけられてるんだから！」

「痛っ、ちょ……やめてくださいよ姫さまっ!？ ――あ、あれ……？」

樗の意識は、そこでやっとはっきりしたらしい。改めて朱華の顔を見て、目を丸くした。

「姫さま！ よかったー、無事に対岐まで着いたんですね」

その口から飛び出した緩すぎる言葉を聞いて、がっくりと脱力した朱華は、呆れを隠さない声音で告げる。

「なに呑気なことを言ってるのよ、あんたは……」

(でもこのほんわか具合、ほんとに樗なんだ！)

言葉ではどんなことを告げても、心までは偽りきれずに、じわりと目頭が熱くなる。

咄嗟に顔を背けた朱華に気づいたのか、樗は縛られたままの手脚を器用に動かして、上半身を起こした。そしてなにを思ったか、朱華の肩に自分の肩をすり寄せる。

「――だって僕、姫さまのことが心配で心配で……申しわけありません姫さま。僕は結局三日しか持ちませんでした」

「も、持ちませんでしたって、なにが？」

いつもの朱華なら、まっ赤になって樗を突き放しているところだ。しかし今は、水蓮たちがいる手前我慢をしていた。それに、樗から本当のことを訊き出さなければ、水蓮の誤解は解けないだろうと考えたのだ。

ところが樗は、そんな朱華の努力を台無しにしてしまう。

「姫さまのいない日々の、耐えられなかったんですよ。なので、都を捨てて出てきちゃいました。僕は馬で来たので、備芸の辺りで姫さまたちに追いついたんですけど、鷹雄に見つかり騒がれてしまって……でも、姫さまにばれたら絶対戻れと言われると思ったから、いっそ先まわりをして対岐城の安全を確かめておこうと考えたんです」

あまりにもさらりと口に出された、その言葉は。

朱華が何度も呑みこんだ音を、嫌になるほど含んでいた。

今度ばかりはこらえきれずに、溢れた想いが頬を伝う。

「馬鹿ね……一度職務を放棄してしまったら、あんたはもう二度と都には戻れないのよ!? あ、あたしが一体どんな気持ちで、あんたを置いてきたと……っ」

「うん、ごめん」

あくまでも軽い口調で、樗は紡ぐ。

「それでも僕にとっては、姫さまの傍にいられないことのほうが、ずっとつらかったんです」

「――つまり、そなたらは恋人同士ということか？」

そこに口を挟んできたのは、成り行きを見守っていた水蓮だった。

「こっ、恋人同士なんかじゃないわ！ あたしは樗に告白したことなんてないっ」

「僕もありません。そういう立場ではないと、ずっと思ってきましたから」

「あんたはもう黙っててよ樗！」

樗が対岐にいた理由はもう話したのだから、これ以上樗に喋らせるのは恥にしかならないと、朱華は判断した。だからとめたのだが、樗はそれを無視して話しつづける。

「そうはいきませんよ、姫さま。このかたが姫さまの結婚相手なんでしょう？ でしたら僕は、宣戦布告をしなければなりません」

「な……なに馬鹿なこと言ってるの！ 大体あんた――んっ」

そこで朱華の言葉が途切れたのは、樗が強引に唇を重ねたからだ。よりによって、水蓮の目の前で。

(なにになにっ、今なにが起こったのよ!?)

突然の出来事に混乱状態の朱華は、言いたかった言葉をすべて頭の外に飛ばしてしまった。ただ身体中がひどく熱くなり、動悸と息切れが苦しい。

(なにこれ病気っ?)

朱華がそんな心配をしたとき、耳もとでまた恐ろしい言葉が紡がれた。

「――そういうわけなので、水蓮さまっ。どうか僕を、あなたの守人(もりと)にしてください！」

「はぁ!？」

そのあまりにも脈絡のなさすぎる言動に、朱華はまるでついていけなかった。だが、また唇を塞がれては困ると警戒して、それ以上は口に出さず、水蓮の反応のほうを窺う。

(……あ、あれっ?)

ふたりを見おろす水蓮の表情に、まったくと言っていいほど変化はなかった。驚いた様子がないことに、逆に朱華のほうに驚いたくらいだ。

(普通、妻になる人が他の男性と接吻してたら、びっくりするものじゃない!?)

しかもその相手に「家来にしてくれ」と頼まれているのに、水蓮の目もとは涼しいままだった。

(やっぱりこの人、すごく変わってる!)

「――いいだろう」

やがて届いた返事が、朱華のそんな感想をますます強くした。

水蓮はこれまでとは違い、どこか楽しそうに口もとを歪ませて続ける。

「そのかわり、ひとつ条件がある」

「条件？」

「なんなりとお申しつけください！」

訊き返した朱華の隣から、身体をよじって櫂が続けた。

だが水蓮はすぐに、

「おぬしにではない。朱華姫に、だ」

視線を櫂から朱華へと向ける。

「あたし？」

「これから私と城下町に出てもらおう」

「……それだけでいいの？」

交換条件にしてはあまりにも簡単だったから、朱華は思わず素直に問いかけた。

すると水蓮は、すうと目を細めて答える。

「とりあえずは、な。続きは行ってから教えよう。――そう、そのあいだにおぬし……櫂といったな。都の着物は目立つ。私たちが戻るまでに、対岐の着物に着替えておけ」

そこまで告げると、楊に声をかけ指示を出した。

そしてそれを聞いた櫂は、やっと自分は連れていってもらえないのだと気づいたのか、焦った声をあげる。

「ま、待ってください！ 僕の姫さまを、どこに連れていくおつもりですか!？」

だが水蓮は、その問いには答えなかった。かわりのように、櫂を低く脅す。

「抵抗などしてみる、おぬしの目の前で私が朱華姫に接吻してやる」

「な……っ」

声を詰ませたのは朱華だ。

その隣で櫂は、

「はい！ 絶対に抵抗なんてしませんっ。ですから、姫さまを変なところに連れていかないでくださいね!？」

最後のほうは完全に涙目だった。

(四)

---

「……桜茶屋(さくらぢゃや)?」

看板の文字を右から左に読んで、朱華は首を傾げた。連れてこられた場所が、あまりにも意外だったからだ。

(交換条件が、一緒に茶屋に来ること? なんで?)

しかもこの茶屋は、結構繁盛しているらしい。客の声が建物の外まで聞こえていた。

(人気の茶屋に来られるなんて、あたしにとっては得でしかないんだけど、一体どういうつもりかしら。まさか、みんなにあたしを見せびらかしにきたなんて、あるわけがないし……)

いくら考えても不思議で、疑問符ばかりが浮かぶ朱華。開いた扇の陰から水蓮の横顔を見あげたら、目深にかぶった笠で陰になっている目は、やけに真剣な色を見せていた。

(水蓮……?)

声をかけようか迷っているうちに、にゅっと水蓮の手が伸びてきて、朱華の左手首を乱暴に捕まえる。そしてそのまま連れていこうとしたから、朱華は慌てて自分の着物の裾を持った。

引かれるままに暖簾をくぐり茶屋に入ると、店のなかはやはり混雑しており、ふたつある長卓は人で埋まっていた――はずなのだが。

(えっ、なんで!?)

水蓮の姿を見るなり、何人かの客が飛びあがるようにして席を立った。そのおかげで、奥のほうに五人分ほどの席があく。

水蓮は席を立った人たちに一礼をすると、さも当然であるかのようにその席へと向かった。もちろん、朱華を連れて。

(――もしかして水蓮、よくここに来てる?)

朱華がそう思ったのは、水蓮だけでなく、他の客たちも慣れている様子だったからだ。

(あの人たちはきっと、ここにいるのが水蓮だって気づいてる)

藩主らしい着物を身につけていなくても、笠で顔を隠していても、気づいたからこそ席を譲ったはずなのだ。しかし、だからといってそのことを騒ぎ立てるわけでもなく、話しかけてくるわけでもなく、彼らはすぐに自分たちの会話に戻っていた。やはり、さも当然であるかのように。

(あたしなんか、まだ花着物から着替えてなくて、絶対目立つはずなのに!)

わざと注目しないようにしているのだと、初めてこの茶屋にやってきた朱華でもわかった。水蓮に至っては、店のなかでも笠を脱がないままなのだ。

「……あなた、屋内でも笠を脱がない主義?」

朱華が批判の意をこめて尋ねたら、先に座布団へと腰をおろしていた水蓮は、

「いいから、さっさと座れ」

問いには答えず、袖だけ引いてきた。

朱華は仕方なく、わざと長い息を吐いてから、水蓮の隣に座る。正面の席もあいてはいたのだが、水蓮が朱華を引っ張ってきたために、長卓の向こう側にまわれなかったのだ。

「いらっしゃいませー! ご注文はなににいたしますか?」

ふたりが席に着いてすぐ、待ちかねていたのか、茶屋の娘がふたりの後ろに飛んできた。

反射的に振り返った朱華の目に、まず飛びこんできたのは、桜色の着物だ。

(桜茶屋だから、桜色なのかしら?)

そんなことを考えながら視線をあげていくと、次に思いがけない色と遭遇する。

(まあっ、なんてきれいなお髪(ぐし)……！)

それは、水蓮御殿で見てきたばかりの金色だった。髪の色としては、初めて見る色だ。そしてもうひとつ、空のように澄んだ色をした瞳を見るのも初めてで、朱華は思わず見惚れる。

(異国の娘かしら？ 奏和の言葉を話してるようだけど)

「いつものを、ふたつ頼む」

水蓮が振り返らずに注文すると、娘は一瞬残念そうに目を伏せた。

碧い瞳にじっと見入っていた朱華は、自然と、気づいてしまう。

(なに……？)

すると、娘のほうも朱華の視線を悟ったようで、

「他のご注文はよろしいですか？」

引きつった笑顔で訊いてくる。胸の前で丸い盆を持つ両手は、微かに震えていた。

「だ、大丈夫です」

朱華が戸惑いながらもそれだけ答えると、ぺこりと頭を下げた娘は、そそくさと離れてゆく。

(あの娘、もしかして水蓮のことが好きなのかしら？)

直感した朱華は、すぐに水蓮の耳もとに口を寄せた。扇の陰で、こそこそと話しかける。

「ねえ！ どうしてあの娘の顔を見ないの？ せっかく注文を取りにきてくれたのに、失礼じゃない」

探りを入れてみると、水蓮は不意に朱華のほうを向いた。おかげでふたりは、至近距離で見つめあう羽目になる。

(ご、誤解されても知らないわよっ!?)

朱華はそう心のなかで叫びながらも、周囲にたくさんの方がいる手前、不自然に水蓮から離れることはできない。

すると今度は、水蓮が朱華の両肩を掴み、その耳もとに唇を寄せてきた。そして、朱華が身体を強張らせる前に、次なる指令をください。

「いいか。今からそなたには、都からやってきたわがまま姫を演じてもらう」

「え……？」

「先ほどの娘の名は、梓(あずさ)という。――『梓を気に入ったから、侍女にする』と、騒げ。都上(とがみ)の姫君であるそなたが言うならば、誰もとめはしない」

「そ、それって……っ」

朱華が息を呑んだのも、無理はない。なぜなら――

「あなたも言ってたじゃない！ 【都の権力をみだりに誇示してはならない】って」

そう、騒ぐだけならば簡単なのだが、それをやると、どうあってもその教えを破ることになるのだ。

(さっきは勝手に誤解して、その教えを破ったと怒ってたくせに!?)

「それでも、やれ」

動揺する朱華とは裏腹に、水蓮の口調は冷静そのもの。

「櫂を傍におきたいと思うなら、教えを破ってでも、やれ」

「――っ」

水蓮の強い囁きに、朱華の心は揺れる。

(櫂……！)

朱華のために職務を捨ててきた櫂は、もう都へ戻ることはできない。そのうえ水蓮の守人にもなれないなら、都からの間諜としてずっと囚われることになってもおかしくはないのだ。

だが、ここで朱華が都の権力を振りかざすなら、朱華自身もそう簡単には都へ戻れなくなる。壺師は教えを破る者に厳しく、なかには処刑された例もあるのだ。もしそれが実の娘であっても、対応は変わらないだろう。

(父上は、そういう人だもの)

だからこそみんなから信頼されるのだということを、朱華は知っていた。

――ぱたんと、扇の骨をひとつ合わせる。

(櫂だって、父上にばれたらどうなるかわからないのに、それでもあたしを追ってきてくれた)

――ぱたんと、ふたつ目の骨を合わせる。

(一度は諦めた、傍にいる約束が叶うなら……)

――ぱたんぱたと、最後まで折りたたんだ。

扇はもう、なにも隠さない。

やがて、ふたり分の茶碗を運んできた娘・梓の手首を、朱華は掴んだ。

「ねえあなた！ わたくし、あなたの派手な見た目を気に入ってしまいましたの。ですから、あなたをわたくしの侍女とすることに決めましたわ！」

「え？ ……ええっ!? な、な、なにを仰って――」

目を丸くした梓を逃がさないよう、にじり寄る。

「冗談で言っているんじゃないですよねのよ？ わたくし、本日都から到着したばかりの、壺師の娘です。名は朱華と申します」

朱華がわざと壺師の名前を出すと、にわかに反応したのは梓よりも周囲の客たちだった。

「や、やっぱりそうか！」

「おい、本物だってよーっ」

「すげえ！ 誰よりも先に見ちまったぜ!!」

どうやら、近日中に都から姫がやってくるという噂は、ちゃんと広まっていたらしい。

(それなら話は早いわね)

朱華はにっこりと笑みを浮かべて続ける。

「あなたに断る権利はありませんのよ、梓。ねえ水蓮、あなたからも、わたくしの言葉は絶対であることを教えてあげてちょうだい？」

そうしてわざと大袈裟な口調で水蓮に振ると――そこには、信じられないものがあつた。

(――！ 水蓮……なんて瞳を、してるの)

朱華にはまだ一度も見せていない、優しい色を梓に向けていた。

心配そうに、眉を寄せていた。

それを目にして、朱華はやっと気づく。

(そっか、違うんだ)

好きなのは。

傍にいたいと、誰よりも願っていたのは。

(あたしでも櫂でも、この梓でもなくて)

――水蓮。

朱華はそこで初めて、この交換条件の本当の意味を悟った。

(五)

水蓮御殿に戻ったあと、朱華たちは右奥にある寢所に通された。そこには、朱華のために特別にあつらえたという桜の花びらが描かれた帳(とぼり)があり、すでに敷かれた布団を囲んでいた。

(ここにも、桜……)

対岐にやってくる時に乗っていた輿の天井にも、それはあった。ずっと胸のなかに抱いてきた切ない気持ちを思い出し、朱華は複雑な気分になる。

(これから、どうなるんだろ?)

都へは戻れなくなった櫂をこの対岐にとどめるため、朱華は水蓮の交換条件を受け入れた。よって櫂は正式に水蓮の守人となることを許され、朱華と櫂はまた以前のように近い場所で暮らせることだろう。

だが、朱華はこれから水蓮の妻となる身だ。そのうえ壱師の教えを破っているため、もしこの先対岐でなにか問題が起こったとしても、やはり都へ戻るのは難しい。

(櫂と一緒に居られても、あたしたちの状況が八方塞がりであることには違いないんだ)

また、水蓮は水蓮で別の想い人がいるとわかった以上、朱華もおとなしく結婚する気にはなれなかった。朱華にとって今の状況は、とても手放しでは喜べないものだったのだ。

「――朱華さま？　どうかなさいました？」

帳に舞う桜を見つめたまま動かない朱華の後ろから、侍女となった梓が声をかけてきた。

朱華はゆっくりと振り返り、それでも梓を不安にさせないようにと笑顔を見せてやる。

「なんでもないわ。それより梓、隣に侍女用の部屋があるそうだから、あなたの荷物を置いてらっしゃいな」

「は、はい！　では失礼いたします」

梓は素直に頷くと、さっと背中を向けて出ていった。

その瞬間にも、きらきらと光る金色の髪。

(あんな髪色をしてるから、水蓮もこんな手を使わなければ城郭に呼べなかったんだわ)

藩主に望まれて城郭にあがったとなれば、周囲の人々の視線はますますきつくなるだろう。奏和の人々は、見慣れないものをなかなか受け入れることができない性質を持っている。朱華自身も実は、梓の髪や瞳の色をきれいだと思う反面、心の底では怖いとも思っていた。梓自身のことをまだなにも知らない今の段階では、それも仕方のないことだった。

そんなふうには、ただでさえ警戒される外見をしているのに、それ以上は梓のためにならないと、水蓮は思ったのかもしれない。

(でも、あたしのわがままで城郭に連れてきたのなら、目立つのはあたしのほうだものね)

だから水蓮は、あんな交換条件を出してきたのだろう。

そのことは朱華も、理解していた。愛しい者とともにありたいという気持ちも。

――だが、赦せないこともあった。

(どうして脅すような方法をとったの?)

仮にもこれから妻になろうという相手の、いちばん大切な想いを逆手にとって、水蓮はそれを成し遂げた。しかし朱華にしてみれば、そんなことをせずとも、最初から正直に話してもらえれば、きっとおとなしく協力していたのに――と思うのだ。

そのため朱華は、櫂を守人として認めてもらえたことはありがたいと思えど、それ以上の気持ちを持つことができずにいた。それは梓に対しても同じことで、どんなふうには接すればいいのか、少し戸惑っている部分があった。

(梓にしてみれば、たんに巻きこまれただけなんだろうし)

梓にはなにも落ち度がない。むしろ、突然城郭に連れてこられて、梓のほうこそ困惑しているはずだから、優しくしてあげなければならないだろう。

そう考える朱華の心の半分は、けれどそれを否定する心で埋まっていた。

(素直になれないのは、この先が不安だから……?)

朱華自身にもよくわからなかったが、とても穏やかな気分ではいられなかった。

距離感をまだ決められないまま、やがて梓が戻ってくる。

「お、お待たせしました朱華さまっ」

よほど急いできたのだろう、隣から戻ってきたはずの梓の頬は少し上気していた。

「どうぞ、こちらに」

口もとを扇で隠した朱華が告げると、梓は遠慮がちに入ってくる。そして数歩も歩かないうちに、その場にべたりと座りこんだ。両手を揃えて膝の前につけ、頭を深々とさげる。

「あの！ 申しわけありませんっ。わたし、侍女と呼ばれる人々が普段どのようなことをしているのか、まったく知らないのです。それゆえに、たくさんご迷惑をおかけしてしまうかと思いますが、一生懸命頑張りますので、どうかご容赦を……！」

それをきょとんとした顔で見返したのは、他でもなく朱華だ。

(まあ！ なんて素直なのかしら)

自分とは大違いだと苦笑を浮かべながら、朱華は応えてやった。

「そんな心配はいらないわ。あたしだって、侍女がなにをする人かなんて知らないもの」

「……え？」

反射的に顔をあげた梓に、朱華は近づいてゆく。

「あのね、壱師の娘はたったひとりで余所の藩に嫁がなければならないのよ？ それはつまり、ひとりでなんでもできるようになっていなければならないということ。都のお屋敷にいた頃だって、誰も世話なんかしてくれなかったわ。あたしを育ててくれた乳母が、自分の世話の仕方を教えてくれただけよ」

朱華が梓の傍にしゃがみこむと、梓は惚けたように口にした。

「わ、わたしはてっきり、都の姫君はみんな、侍女にお世話をされて育つものだ……」

「もちろんそういう姫もいるでしょうけどね。あたしは違うの！ わかった？」

扇を梓の顎の下にあて、朱華はきちんと自分のほうを向かせる。梓の碧い瞳のなかの自分と、目が合った。

(本当に、きれいな瞳ね)

魅入られてしまいそうな、怖い色。

前髪でそれを隠してしまうことも、きっと可能なはずなのに。そうしていない梓は、朱華の視線に照れたのかぼっと頬を赤らめた。それでも顔を逸らさずに、口を開く。

「で、ではっ、朱華さまに侍女なんていないのでは？ どうしてわたしを……」

「どうして？ わからない？ ——本当に？」

朱華がそのまま訊き返すと、梓の頬の赤が顔全体に広がっていった。

(十分にわかってるんじゃない)

朱華は心のなかで笑う。

明らかに、ふたりは両想いだった。

だが、傍にありつづけられない事情があった。

(それは、あたしたちと同じだ)

素直に言葉を伝えられないこのもやもやは、まるで自分たちを見ているようで齒がゆいせいなのか。それとも単純に、羨ましいからなのか。

朱華にはやはり、自分の心を読み解くことはできなかった。

それでも――

(少しくらいは、あたしも素直になりたいわ)

なにも隠さない目の前の娘に、もっと近づいてみたかった。その内側を、もっと知りたいと思った。

扇をおろし、朱華はそっと梓の手を取る。

「ねえ、あたし、侍女はいらないけど、話し相手はとても欲しいわ。あなたのことを教えてちょうだい。あなたの色、まだ少し――怖いの」

心のままに告げると、梓の手がびくりと震えた。それでも次の瞬間には、茶屋で見たものと同じような笑顔を見せて、

「はい、喜んで！」

その夜ふたりは、同じ布団に横になり、眠りに落ちるまで話しつづけた。

(一)

建国から二〇〇年のあいだ、奏和は乱世の時代にあった。

人々は有力な一族のもとに集い、互いに領地を奪いあっていた。

強い者だけに生きる権利がある。

強い者だけが、夜という時間を生きたまま越えることができる、厳しい時代。

自ら進んで戦う者たちの陰に、ただ生きることを望み死んでいった者たちが大勢いた。

——その声を聴こうとし、たったひとりで立ちあがった者こそ、当時まだ十八になったばかりの壱師(いちし)だった。

(まことに、すごい男だ)

薄暗い寝所の隅にある書机に片肘をつき、行燈(あんどん)の明かりで書物をめくりながら、水蓮はしみじみと考えていた。壱師の娘である朱華には、壱師を憎んでいるかのように告げていたが、その実はまったく逆だった。

(力を持ちすぎた一族を次々と潰し、だが彼は、なにも奪わなかった)

手に入れた領地を自分のものとするのではなく、その土地に暮らす人々が最も望む人物を領主として選び出し、与えた。それを何度も繰り返し、仲間を増やし、細長い国土の北から南までを制覇した壱師は、こう言ったという。

『醜い争いは、もう見たくない』

そしてそれを実現するために、領地を平等に区切り、藩を置くことにした。一都五十二藩制の開始は、奏和暦二〇三年と意外に遅いのだ。

(まだ年若い彼がそこまで仕切っても、みな文句を言わなかったのだから、それだけ彼の言うことは理にかなっていたのだろう)

——そう、あとになって、五十二人の娘をそれぞれの藩に送りこむという無茶な計画を始めても、誰も異を唱えなかった。むしろ、かつて壱師に命を救われた女性たちが、国のために子を産みたいと殺到したという伝説があるほどだ。

そもそも壱師がそんなことを考えたのは、都と藩との繋がりを強めるため。監視ではなく、藩になにか問題があったときにいち早く気づくためなのだと、みんなを説き伏せた。また、本当の家族になってしまえば、自然と親しみもこもるだろうという理由もあったらしい。

(私とて、最初父上からその話を聞いたときは、心から驚いたものだがな)

幼かった自分を思い出して、水蓮はひとり笑う。

それでも大人になった今、おとなしく朱華を受け入れたのは、【必ずしも子をなす必要はない】と壱師側から藩主たちを気遣う譲歩があったからだ。

(おかげで、私のように想い人がいる場合でも、あまり負担なく受け入れることができる)

どちらかと言えば、娘たちのほうがずっとつらい立場だろうと、水蓮は考えていた。だからこそ、嫁ぐためにやってくる朱華をどのように扱うか、このところずっと頭を悩ませていたのだ。

(都上(とがみ)が国のために立ちあがったのと同じ、十八歳。だのに、私の悩みのなんと小さきことか)

父親を一年前に病気で亡くしていた水蓮は、そんな葛藤を抱えながら——梓への恋心も抱え、さらに朱華のことを心配していた。若いのに気苦労の絶えない藩主だった。

——だが、そんな水蓮にだからこそ、救いの手は差し伸べられたのかもしれない。

「水蓮さま？ まだ起きていらっしゃるんですか？」

寢所から漏れる光に気づいたのだろう、襖の向こうから声がした。

「櫂か。入ってよいぞ」

顔をあげた水蓮が告げると、すぐに「失礼いたします」と返ってくる。

(まこと、律儀な男だな)

今日一日見た限りでは、朱華は結構大胆な性格のようであったから、櫂とは合うのかもしれない。

水蓮は勝手にそんな納得をしながら、対岐(つき)の着物があまり似合っていない櫂を目で追った。

静かに襖を開け入ってきた櫂は、布団を隠すように立っている衝立の後ろまでやってくると、その場で膝を折ろうと腰を屈める。

水蓮が、それをとめた。

『入ってよい』と、言っただろう？」

「えっ？ で、ですが……」

「私を殺めにきたのでないなら、入れ。ここは都とは違う。対岐へ来たからには、私の言うことを聞くべきではないのか？」

そこまで告げると、さすがの櫂もすっと立って、

「はい！ そうでしたっ！」

元気に返事をすると、衝立の隙間から抜けてくる。

「申しわけありません、水蓮さま。枕もとに近づくのは、大変失礼な行為だと思ひまして……」

「他の者は知らないが、私は問題ない。ここに座れ、櫂。おぬしに話がある」

水蓮は言いながら、自分の向かいの畳を指差した。

「僕にですか？ ……失礼いたします」

都で城兵をしていたという櫂は、さすがに一挙一動がきちんとしている。藩の城兵ならばいきなり胡座をかいて座る者も珍しくはないが、櫂は実に自然な動作で正座をした。

(これほど主に忠実そうな男が、あっさりともを捨ててくるとはな)

そう考えるとおかしくて、水蓮の口もととはつい緩んでしまう。

「あの……？ 僕、どこかおかしいですか？ やはり着物が似合っていないませんか!？」

途端に慌て出す櫂がおかしくて、水蓮はさらに「はは」と笑った。

「いや、違う、そうではない。ただ——おぬしはまことに朱華姫が好きなのだ、そう思っただけだ」

「ええっ？ なんです、それは。そりゃあ姫さまのことは大好きですけど……」

さらりと答えた櫂を、水蓮は少し羨ましく思う。

(私にも言える勇気があれば、こんなにも遠まわりをする必要はなかったのかもしれない)

せめてこれからは、本心を伝えていきたいと。

「私は感謝しているのだ。おぬしのその想いに、な」

水蓮の告白に、櫂は目を丸くする。

「おぬしが朱華姫を追って対岐に来てくれなければ、私は梓を城郭内に引き入れる手立てを思いつけなかっただろう」

「——ではやはり、水蓮さまは初めから、僕の言葉を信じてくださっていたんですね？」

(そう、信じていた)

櫂が城郭内で捕らえられてきたときのことを、水蓮は思い出す。

都、あるいは他藩からの間諜かと疑われても、殴られても、櫂はまるで抵抗しなかった。ただ言葉で、告げていた。

『僕は、姫さまに幸せでいてほしいだけ……』

愛しい姫の夫となる相手に向かって、櫂は少しも引かなかった。

『もう、我慢をするのも我慢をさせるのも、嫌なんです！』

その真剣な眼差しを、水蓮が信じたのは――自らも、強く愛する相手がいたからだ。櫂の目は自分の目と同じだと、すぐにわかった。

書机の上の書物をぱたんと閉じた水蓮は、きちんと身体の向きを変えてから、口を開く。

「だからこそ私は、下手くそな演技をしてまで朱華姫を利用したのだ」

相手は都の姫君。普通であれば、そんな相手を脅すなどと考えられないことだった。

(だが私に、他の選択肢はなかった)

事情を素直に話したところで、受け入れてもらえる保証はない。また、事前に聞いていた櫂の口ぶりでは、朱華姫は自らの気持ちを正直に語るような姫ではないとわかっていた。そのため、脅してでもその本心を引きずり出さねばならなかったのだ。そうしなければ、作戦は最初から頓挫してしまっていただろう。(それに――同じ『都上の教えを破る』という行為でも、私に脅されてやったのと、朱華姫が自分で決めてやったのでは、罪の重さがまったく違うはずだ)

水蓮はそこまで考えていた。たとえ自分が憎まれることになっても、少しでも朱華の心を軽くしてやろうと。

――もっとも、どんなに言葉を重ねたところで、水蓮が朱華を利用したことには違いない。

「すまなかったな」

心から告げた水蓮の素直な言葉に、櫂は強く首を振る。短い髪が跳ねた。

「いいえっ、とんでもありません！ 僕のほうこそ、お礼を言いたいくらいです。――そうだ、謝るなら、姫さまにしてくださいよ。僕はただ自分のわがままを貫きとおしただけで、重大な決断を迫られたのは姫さまのほうですから……」

櫂の声が徐々にしぼんでいったのは、『都に帰れない』という同じつらさを抱えているからなのだろうか。俯いた顔に、膝の上で握りしめられた両手に、ふたりの無念さが見えた気がした。

水蓮はそっと、自分の胸もとに手を当てる。いくら梓のためとはいえ、そこにある罪悪感の灯は、しばらく消えそうもなかった。藩主としても身勝手な行動であったと、充分すぎるほどにわかっているのだ。

(しかし梓は、私が何度「城郭に来い」と言っても、首を縦には振らなかったからな……)

交換条件が『最後の手段』であったのは、水蓮も同じ。同じであるはずなのに、その犠牲の重さはあまりにも違っていた。

「――なあ櫂。今回のことは、おぬしたちが都上に伝えなければ、わからぬのではないか？」

せめてなにかひとつでも抜け道はないかと、水蓮が尋ねる。

しかしまたも櫂は、あっさりとして左右を見た。

「いいえっ、壱師さまの情報網を舐めてはなりませんよ。壱師さまにはご子息もたくさんいらっしゃいますし」

その言葉で、水蓮は悟った。同時に、背中にぞくりとしたなにかが這いあがってくる。

「まさか、その子息たちが全国をまわって……？」

「ええ。僕も正確な数まではわかりませんが、おそらく姫君と同じくらいは――しかもその全員が、人の本質を見抜く壱師さまの血と技を受け継いでいるのですから、油断なりませんよ」

(どうりで、娘たちのことを「監視ではない」と言うはずだ)

監視の目は、そうとわからない形で他に用意されていたのだから。

ただ、だからといって単純に壱師のやりかたを否定するほど、水蓮は子どもではなかった。

「……なるほどな。藩民たちに諸手を挙げて受け入れられる藩主を、都上が都に居ながらにして選ぶことが

できるのには、そういう仕掛けがあったのか」

藩主だった父が亡くなったため、自然とそのあとを継いだ水蓮。もちろん対岐だけでなく、他の藩でも代替わりの話は聞こえてきていたが、なかには直系の子であっても次期藩主として認められなかった者もいるらしい。それはつまり、壱師がきちんと相手の人となりを見定めたいうえで選んでいるという証しに他ならないのだ。

今度こそ櫻は、怖い話でもするような表情で、深く頷く。

「それだけではありませんよ？ どの藩主に、どの姫君が合うのかも、実は綿密に考えられたうえで決定されているそうです」

「なんだって……？ たんに生まれた順ではないのかっ？」

てっきりそう思いこんでいた水蓮は、心から驚き、そして納得した。

(どうりで、嫁いだ姫を「気に入らない」と言う藩主がいないはずだ)

第一藩の陸羽(りくう)から第五十藩の日隅(ひずみ)まで、これまで順番に嫁いできた姫君たちは、どの藩でも好意的に受け入れられているようだったのだ。強制ではないにも関わらず、子をなした夫婦はたくさんいる。それも、最初から相性を考えて引きあわされているのなら、不思議なことではないのだろう。「よく誤解されているんですけどね。嫁ぐ順であって、生まれた順ではありません。——水蓮さまだって、姫さまのことをそんなにお嫌いではないでしょう？」

櫻にくすくすと笑いながら問われ、水蓮は一瞬言葉に詰まった。

「あ、ああ……確かにな」

それでも頷いたのは、おしとやかなだけの姫よりは、遥かにましだと思えたからだ。

(朱華姫ならば、梓ともうまくやってくれるだろう)

会って間もない相手でも、そう期待が持てるくらいには、朱華の気の強そうな瞳を気に入っていた。水蓮が同じ痛みを抱えた櫻に同情したように、朱華も同じ痛みを抱える梓をわかってくれるだろうと——

「っ……まさか!？」

そこで恐ろしい答えに辿り着いてしまった水蓮は、思わず声をあげた。

「どうしました？ 水蓮さま」

まだ気づいていないのか、目をぱちくりさせる櫻に、水蓮は言ってやる。

「——おぬしの言うことがまことならば、都上は、私たちがこうなることを予想したうえで、朱華姫を私のもとへ来させたのではないか？」

(互いに想いあう相手がいると)

すべてわかっている。

(その想いは都上への忠誠よりも勝ると)

すべてわかっている。

(私たちの『心』を、試したのか……?)

「僕もそこまでは考えつきませんでしたが一ありえないことではありませんね」

苦笑を浮かべて、櫻は告げる。

「ですが、もしそれが本当ならば、僕はとても誇らしいです」

「誇らしい？ なぜ？」

水蓮が軽く首を傾げると、櫻はすうと居住まいを正した。

「壱師さまと姫さまを天秤にかけ、姫さまを選んだその想いは本物なんだと、堂々と証明できたということですから！」

こぶしを握って勇ましく宣言するその姿が、水蓮にはやはり羨ましい。

(こやつは案外、器の大きな人間なのかもしれぬ)

梓を城郭に引き入れるために。

嫁がされてきた朱華を、不幸にはしないために。

半ば成り行きのような形で、櫂を自らの守人とした水蓮。しかしそれは、水蓮自身にとっても得なことであったようだ。

水蓮はおもむろに、書机の上に置いてある漆塗りの小箱を開くと、なかから鉄製の細い鍵を取り出した。そして櫂に差し出してやる。

「――これを、おぬしに預けよう」

「えっ？ な、なんですか？」

櫂はすぐに、畳の上を這うようにして近づいてくると、鍵の下に両手を広げた。

「天閣の鍵だ」

答えながら、水蓮は鍵から手を離す。

「あそこは普段、物置としてしか使っておらぬからな。人は滅多に来ないだろう。それに、見晴らしもいい。――どうしてもふたりきりになりたいことがあったら、使え」

「え……っ!？」

受け取った鍵を抱きしめるようにして、さすがの櫂も顔をまっ赤に染めた。

その様子にいたずら心をくすぐられた水蓮は、もうひと押し。

「おぬしは今、いくつだ？」

「ひ、姫さまと同じ十六ですが……」

「ならば、早いということはないだろう」

「な、な、なにがですか!？」

焦りまくる櫂を無視して、水蓮はさらに煽る。

「最初は、詫びの品として朱華姫に渡そうかと思っていたのだが、女性に誘わせるのはいささか酷だろうと思ってな。なあに、遠慮することはない。おぬしたちがふたりきりになれば、同時に私たちもふたりきりになれるのだから」

「そ、そうですよねっ、あ、ありがとうございます！」

すっかり水蓮に乗せられた櫂の声は、完全に裏返っていた。

(二)

翌朝、水蓮は目が覚めるとすぐに、櫂と楊を伴って朱華の寢所へと向かった。

水蓮が朱華に与えた寢所は水蓮御殿の右奥で、左奥にある水蓮の寢所とはかなり離れている。

(もともとは、そうすることで少しでも朱華姫を安心させようと思っていたのだがな)

板張りの長い廊下を歩きながら、思いどおりにはいかない事象に、水蓮は苦笑を浮かべた。

今となっては、朱華の傍に愛する梓がいるのだから、もっと近くの部屋でもよかったと思うのだ。だが、朱華に与えるため部屋全体を改装させたり、女性が好むよう意匠に工夫を凝らしたりしていた手前、そこまで自分勝手にはなれなかったのだった。

「す、水蓮さま？ こんな朝早くから、一体なにをしに……っ？」

大股ですいすいと歩く水蓮の後ろを、櫂が小走りで追ってくる。身長の違いがそのまま、脚の長さの違いに出ているのだろう。

水蓮は、軽く振り返って答える。

「いいから、黙ってついてこい」

すると櫂は、あからさまに不満そうな顔をしたが、水蓮はその瞳のなかにある別の色を見逃さなかった。(朝から会えることが、嬉しいのだろうか？)

思わず笑い出しそうになる口もとをこらえて、前に向きなおる。

(わかるぞ——私も、そうだ)

水蓮の足もとが、必要以上に急いでいるのは、そのせいもあった。

離れていた相手と、いつでも会えるということは、まさに夢のような話だったのだ。

——もちろん、それだけのために朱華のもとへと向かっているわけではなかったが。

「朱華姫、起きているか？」

辿り着いた寢所の前で、水蓮は襖に向かって呼びかける。

すると、すぐに開いたそこから顔を出したのは、朱華ではなく梓だった。

「あ……っ」

水蓮は反射的に声をあげたが、実際にはそれが普通のことなのだ。来客への受け答えはまず侍女がするのが当然で、なんら不思議なことではない。

(なのに、私はなぜか朱華姫本人が出てくるものだとはばかり思いこんでいて——)

朝から会えると喜んでたくせに、醜態をさらしてしまったのだった。

そして水蓮の目の前にいる梓も、やってきたのが水蓮だとわかっていたはずなのに、顔をまっ赤にして俯いている。

まるで初めての見合いのように、あまりにも初々しいふたり。

それを横から見ていた櫂は、羨ましかったのか、

「あのう……早く入りましょうよ！ 誰かが通りかかったら、僕らすごく怪しいですよっ」

などと身も蓋もない言いかたをした。

(だがまあ、それももっともか)

おかげで我に返ることができた水蓮は、梓に労りの視線を向けると、もう一度確認する。

「朱華姫は起きているだろうか？」

「は、はい！ どうぞ、お入りくださいませ」

梓はぴんと胸を張って答えると、途中まで開けていた襖を最後まで開き、水蓮たちを迎え入れた。

水蓮に続いて櫂も入るが、その後ろの楊が足をとめたため、櫂は反射的に振り返る。

「あ、そうか！ 僕も入ってはいけないんですねっ」

朱華に会えるという嬉しさが先走り、自らの身分を忘れてしまっていたのだろう。

水蓮にはその気持ちが、手に取るようにわかった。

(昨夜は、自分からは衝立のなかに入ってこなかったくらいだからな)

その櫂が、あっさりと朱華の寝所に足を踏み入れるなど、よほどのことだ。

「――よい、おぬしは入れ、櫂」

水蓮はそう声をかけると、次に楊のほうを見て続けた。

「人払いを頼むぞ」

楊を連れてきたのは、最初からそのためだった。

「かしこまりました」

当人もそれを自覚していたのか、深く頭をさげるとすぐに、くるり背を向ける。

そんな楊に櫂は、

「あの、では、お願いします！」

と、わけのわからない挨拶をしてから、身体の向きを室内へと戻した。

やっと部屋の奥に入っていくと、見えるのは帳で囲まれた空間だ。その帳には美しく舞う桜の花びらが描かれており、一年中花見が楽しめるという趣向の一品である。これも、水蓮が朱華のために用意させたものだった。

(今はふたりのために、か?)

そんなことを考えながら近づいていくと、前を歩く梓の肩口から朱華の顔が見えた。

「戸口でなにをごちゃごちゃ話してたの？」

帳から顔だけ出した朱華は、興味津々といった表情で水蓮を見あげる。

いちばん後ろからそれを見つけた櫂が、ふたりを追い越して朱華のもとへと走った。

「おはようございます、姫さまー！」

「ぎゃあっ!？」

いきなり抱きついた櫂を支えきれず、朱華は大胆な悲鳴をあげながら後ろに倒れる。

その勢いで帳が天井から外れそうになったため、水蓮と梓が慌てて支えた。

「なんなのよっ、あんた！ こっちに来てからやけに素直で気持ち悪いわ……っ」

朱華は酷い文句を言いながら櫂の下を抜け出す。今日は花着物ではなく、対岐の質素な着物を着ているため、ずいぶんと身軽なようだった。

櫂も、不意打ちでなければ躲されるとわかっているのか、懲りずにその場で口を開く。

「僕はもう、姫さまに対してだけは、全力で素直になると決めたんです!!」

力いっぱい告げた櫂に、くすくすと笑ったのは梓だ。

「櫂さんって、見た目と違ってとても情熱的なかただったのですね」

梓はまだ櫂との接点が少なかったため、意外に思えたのだろう。

(なにせ櫂は、見た目はただの優男だからな)

胸の内にこれほどの想いを秘めているなど、誰も知らなかったに違いない。――おそらく、朱華でさえも。

「全然笑いごとじゃないわよ、梓！ 櫂がいたら話が進まないじゃないっ」

「僕だって、少し黙っているくらいはできますよ？」

「少しじゃなくて、できればずっと黙ってて！」

櫓から距離を取り、反対側の隅まで移動していた朱華は、睨みを利かせてそう告げた。

するとさすがの櫓も折れる。

「わかりました……ではとりあえず、姫さまの寝所をひとしきり楽しむことにします」

「見てのとおり、布団はもうしまったわよ？」

「く……っ、そこまで先読みするとは、さすがです僕の姫さま！」

(このふたりは、都で一体どんな生活を送っていたのだ……?)

水蓮が半分心配になりながらも帳のなかを見渡すと、朱華の言うとおりの布団はきれいに片づけられていた。

そこにすぐ、梓が人数分の座布団を運んでくる。

水蓮は素早くそれを奪い取ると、梓の代わりに畳の上に並べた。ひとつでは軽い座布団でも、複数を持つには重いのだ。

「あ、ありがとうございます、水蓮さま……」

消え入りそうな声音で告げた梓に、水蓮は笑顔を返した。ぽっと赤くなった頬が、かわいいと思う。愛おしいと思う。

(だが、もし私が突然梓に抱きついていたら、きっと失神してしまうのだろうか)

考えてみたら怖くて、とてもできなかった。それこそまったくもって笑いごとではない話だ。

「――さあ、みな座ってくれ。大事な話があって、ここに来たのだ」

水蓮がそう声をかけると、朱華は堂々と眉間にしわを寄せた。

「昨日の今日で『大事な話』って、なんなの？ もしかしてまた、交換条件？」

朱華が警戒するのも、無理はない。昨夜櫓が言っていたとおりの、今回のことで最も大きな決断をしたのは朱華なのだ。

そこで水蓮は、朱華に対し身体をまっすぐに向けると、座布団ではなく畳の上に両膝をつき、深く頭をさげる。

「昨日は無茶な選択をさせて、すまなかった。今話したいことは、そなたの負担が少しでも軽くなればと思っただけのことだ。よければ聞いてくれ」

言いおわってから顔をあげたら、そこには朱華の丸い目があった。

(私が素直に謝るとは、思っていなかったか?)

実はそれも、仕方のないことなのだ。水蓮とて人のことは言えず、生来目つきが鋭いため、きつい性格だと思われてしまうことが多かった。

「姫さま……？」

櫓が呼ぶと、はっと動きを取り戻した朱華は、にじり寄るようにして自分にいちばん近い座布団の上へと移動した。

それを見て、水蓮も畳の上から座布団の上へと移る。

最後に櫓と梓が座って、やっと落ちついて話せる状態になった。

(まったく、いちいち時間のかかる者たちだな)

――だが、嫌いじゃない。

水蓮は心からそう思う。

これからどうやって対岐(つき)を守っていこうかと、そのことばかりを考え、優先して、梓のことさえあとまわしにしていた水蓮にとっては、すべてが新しい刺激であった。

(自分の望みも叶え、同時に対岐を守っていけるなら、それがいちばんよいことだ)

そう気づかせてもらったことは、本当にありがたい。

だからこそ、少しでもふたりの役に立つことをしたいと思った。

「実は昨夜、櫂から都上(とがみ)のことを少し聞いたのだ」

水蓮がそう話し出すとすぐに、正面に座っている朱華の鋭い視線が隣の櫂に飛ぶ。

(他人に父親の噂話をされるのは、あまりいい気がしないものだからな)

前藩主を父に持つ水蓮自身も、それはよくわかっていたから、すぐに言葉を繋いだ。

「もちろん、悪い意味ではない。よい意味で、都上の『目』がいかに広く確実かということ、知ることができた」

「そうよ。父上にはきつと、なにひとつ隠しとおせないわ」

実の娘である朱華が、はっきりとそう告げる。誰よりも説得力のある言葉だった。

水蓮は軽く頷くと、本題に切りこんでゆく。

「それならやはり、形だけでも婚儀を挙げたほうがよいだろう。そなたが不利になるような事象は、できるだけ減らしておきたい。私も最初はこのまま、ただ一緒に暮らすだけでよいだろうと思っていたのだが――」

「藩民はあたしたちが『家族になった』と認めるかもしれないけど、父上はそうじゃないかもしれないと、言いたいよね？」

言いよどんだ水蓮を継いだ朱華の言葉は、水蓮が言いたかったことそのものだった。

(なるほど、なかなか頭の切れる姫らしい)

もしも梓と出逢っていなかったなら、惹かれていたかもしれない。

それだけ壱師の見立ては正確なのだと、水蓮は改めて理解した。恐ろしく思った。

すると朱華は「うーん」と腕組みをして、

「父上は確かに、『藩主と家族になること』にすごくこだわってるみたいだったから、ただ一緒にいるだけで家族になってないなら、心証は悪いかもしれないわね」

水蓮寄りの発言をする。

それが櫂には面白くなかったのだろう。座布団から身を乗り出して告げた。

「で、でも姫さま！ もう都へ戻らないのなら、壱師さまの心証など関係ないでしょうっ？」

だがすぐに、朱華は首を振る。

「そもいかないわ、櫂。父上の影響力は、どこにいたって同じなもの。それがわかっているからこそ父上は、せめて自分の娘や息子にはあまり権力を誇示させないようにしようとしたんじゃないかしら」

「なるほど……それなら筋が通りますね」

梓は納得したように頷くと、自分の正面に座っている櫂に向かって優しく話しかけた。

「あの、櫂さん？ 形だけとはいえ、朱華さまと水蓮さまがご結婚なさるのは嫌だと、そう思う気持ちはわたしもよくわかるのです。でも今は、こうしてお傍にいられるだけでも、本当に信じられないくらい嬉しいことで……わたしは半ば諦めていたからこそ、余計にそう思います。あなたは違いますか？」

(梓……)

もともとは、『茶屋で働く娘』と、『そこに通う客』という間柄でしかなかったふたり。当然水蓮がその茶屋を訪れなければ、ふたりが顔を合わせることもなかった。だから水蓮は、何度も城郭を抜け出して通っていた。それは、水蓮にとって梓の傍がいちばん安らげる場所だったからだ。

(最初から最後まで、態度が変わらなかったのは梓だけだ)

梓は知りあってからしばらく、水蓮が藩主の息子であるとは知らなかったようだった。だがやがて、それを知っても――水蓮が藩主に選ばれたあとも、以前までとまったく同じように接してくれたのだ。

藩主の息子が、次の藩主に選ばれるとはもちろん限らない。そうとわかっていても、幼い頃から期待の

眼差しを向けられつづけていた水蓮にとって、それは心底嬉しいことだった。人とは違う外見を補うため、常に明るい笑顔を見せている梓の姿には、何度も励まされていた。

そして今も――

(梓を強制的に登城させたのは、私の独断だったのに)

それを「嬉しい」と。

まっすぐに伝えてくれる気持ちが、水蓮の想いを強くする。

膝の上で小刻みに震えている梓の手もとを見つけて、水蓮は自分の手をきつく握りしめた。

梓のその震えが、幸せすぎてのものなのか、失われるのが恐ろしいからなのか、水蓮にはわからない。

ただもう、震えなくて済むようにしてやりたいのだ。

たとえ震えていても、すぐにそれがわかるように。

手を差し伸べてやれるように。

――そのためならば、悪者になる覚悟はできていた。

(櫂はどう出る……?)

視線を梓から櫂に戻すと、そこにあったのは意外にも、どこか泣き出しそうな笑顔だった。

「……違います。確かに、梓さんの言うとおりで。僕も、姫さまと都で別れるそのときまでは、諦めようと思っていました。でも一日目に、『本当にこれでいいのか』と疑問がわいて、二日目には『いいはずがない』と答えが出て、三日目には都を出る覚悟を決めました。たったひとりの家族である母にも、別れを告げました」

「櫂……」

小さく名を呼んだ朱華の瞳は、少し潤んでいる。

梓は一度そちらに目をやってから、続けた。

「それほどの想いでやってきたのなら、朱華さまが少しでも長く対岐にいられるよう、協力するのが筋ではありませんか？ もし今朱華さまが、『都上の姫君』として不適格だと判断されてしまったら、対岐を出るように言われる可能性もあるのでしょうか？ わたしは嫌です！ また別の姫君が来て、我がもの顔で水蓮さまのお隣に座ったりなんかしたら……っ」

最後の最後に、本当の想いが溢れ出る。

「でもっ、朱華さまならいいんです！ わたしたちも昨夜、たくさん話をして、お互いをきちんと知りあうことができました。わたし、朱華さまなら信じられるからっ、だから――」

「梓――ありがとう……っ」

ふたりとも耐えきれなくなったのか、互いに腕を伸ばして抱きあった。いつの間にか、すっかり仲良くなっていたらしい。

(羨ましいものだな)

そう思った水蓮が、そっと隣の櫂を見やると、櫂もまったく同じことを考えているだろう表情をしていた。水蓮は笑いたくなる口もとをこらえて、告げる。

「おぬしの負けだろう？ 櫂」

(いつも、女には敵わない)

そんな意図を含んだ水蓮の言葉を、櫂がどれほど正確に受け取ったのかはわからないが――

「……はい」

答えた櫂の頭の上には、白旗が見えた気がした。

(三)

---

ちょうど桜の花が咲く頃――十日後に婚儀を挙げよう。

四人でそう決めてから、すでに一週間が経過していた。

(できればすぐにでも……と思ったのだが、な)

婚儀を遅らせることとなった理由を思い出して、水蓮はひとり口もとを綻ばせる。

ここは、水蓮御殿の大広間の奥にある政務所(せいむしょ)だ。水蓮は普段この部屋で、藩主としての実務をこなしていた。寝所と比べても少々狭いものの、ここには土地や人々の情報をまとめたたくさんの書物が置いてあり、調べものをしたりするのに大変便利なのだ。

書机の前に陣取った水蓮が、たどたどしい筆致で書かれた文(ふみ)を読んでいると、  
「――失礼いたします」

不意に思いがけない人物の声が聞こえ、慌てて顔をあげる。

「梓かっ？」

水蓮が驚くのも無理はなかった。この一週間、朱華の侍女となった梓が、ひとりで水蓮のもとを訪れたことなど一度もなかったのだ。そして水蓮自身、それが当然なのだと思っていた。

だが――ゆっくりと襖が開き、両膝をついている梓の姿が見える。

「あ、あの、入ってもよろしいでしょうか？」

遠慮がちに問う梓に、水蓮は軽く頷きながら訊き返した。

「もちろん構わないが……朱華姫はどうした？」

「櫻さんが、どこかに連れて行ってしまったのです。それで、しばらくのあいだ、わたしに水蓮さまのお傍を頼む、と」

梓は心から困惑している様子で、眉尻をさげながら水蓮に近づく。

しかし、それを聞いてぴんときた水蓮は、「くく」と小さく笑った。

「そうか、とうとう使ったのか！」

「水蓮さま？ なんのお話ですか？」

「いやいや、男同士(こっち)の話だ。――それより梓、部屋の外に楊はいなかったのか？」

ごまかすように話題を変えた水蓮に、不思議そうな視線を向けながらも梓が答える。

「おられましたよ。文かなにかを書いていらっしゃったようですが、わたしが近づいていったら黙って通していただきました……」

そのとき梓の頬がぽっと赤らんだのは、楊にふたりの関係を正確に捉えられていると、今さらながらに自覚したからなのだろう。

(さすがに楊は、な)

水蓮の父が藩主だった頃から守人頭をしている楊は、水蓮にとってふたり目の父親のような存在だ。その分互いをよく知っており、また、年齢は離れているものの気のおける間柄であった。

だからこそ、信頼している。

「楊なら、人に言いふらしたりはしないはずだ、心配はいらない。――もっとこちらにおいで」

少し離れた位置に座ろうとした梓を、水蓮は手招きで呼んだ。

途端にますます顔を赤くした梓は、それでも逆らわずに近づく。梓とて、こんな機会など滅多にないことを、よくわかっているのだ。

水蓮は自分の身体の前にあった書机を横によけて、目の前に座布団を置いてやった。それから手の届く

距離までやってきた梓の細い手首を掴み、その上に引きおろす。

「す、水蓮さま……っ」

倒れそうになった身体を支えてやると、金色のふわふわとした髪が水蓮の顔にかかった。

(――っ)

思わず抱きしめそうになったところを、なんとかこらえる。

「……そう構えるな。茶屋にいたときのように、ただ穏やかに笑ってくれればよい」

すたと座布団の上におろしてやると、梓は自分の両手で頬を覆った。

「そっ、そう仰いましてでもですね……!？」

碧い目には同じ色の水が溜まっている。完全にいっぱいいっぱいになっているようだ。

――もともと、それは水蓮とて同じだったのだが。

(茶屋のときでも、周りに人はいたからな)

ちゃんと『ふたりきり』なのは、実はこれが初めてなのである。

「まあ、なんだ、その……」

梓を落ちつかせるうまい言葉も思いつけずに、水蓮は部屋のあちこちを見やった。そして、書机の上の読みかけの文を思い出し、手に取る。

「……そうだ。そなたも読んでみるか？」

「読む？ なにをですか？」

「藩民からの文だ。こここのところはやはり、朱華姫の話題が多いな。桜茶屋でわがままな振る舞いをさせてしまったから心配していたが、みなは思ったよりも好意的に捉えてくれたようだ」

「まあっ、どんなことが書かれているのです？」

手渡すと、梓は興味津々といった感じで筆文字に目を落とした。

(梓はこんな外見でも、奏和語の読み書きはかなり得意だからな)

梓が茶屋にいた頃、一見客に奏和語で話しかけるたびに目を丸くされていたことを思い出し、水蓮は気づかれぬよう口もとだけで笑う。

そんな水蓮の視線の先で、梓は感心したような声をあげた。

「朱華さまって、とっても人気があるのですね！ この文、七歳の子が書いていますよ……！」

そう、水蓮も半分まで読んでいたが、それは対岐(つき)にやってきた朱華のことを喜ぶ内容だったのだ。最近届く文は大抵そのような文面で、藩民の朱華に対する関心の高さを窺わせる。そもそも、水蓮と朱華の婚儀の日取りを桜が咲くまでに伸ばしたのも、藩民たちより「桜の下で祝いたい」という要望があったからだだった。

このように、対岐では昔から藩主と藩民のあいだで文による意見交換を行っていた。それは、民意を漏らさず酌み取るためだ。そこで対岐では、大人でも子どもでも、どんな身分や職の者でも文を書けるよう、すべての藩民に幼い頃から文字の読み書きを指導している。八歳の頃に、東の大陸にある亀李亞(カメリア)という国からやってきたという梓も、その方策により奏和語の読み書きを覚えていたのだった。

「水蓮さま、他にわたしが読んでも構わないものはありますか？」

普段目にする事のない内容が面白いのだろう、梓は照れていたことなど忘れて、瞳を輝かせる。

そこで水蓮は、自分が先に目を通していたものを渡してやった。

「そら、この辺は全部大丈夫だ」

「ありがとうございます！」

嬉しそうに受け取って、片っ端から読みあさり始める梓を、水蓮は書机に頬杖をついてじっと見つめる。それは水蓮にとっても、普段目にする事のない梓の新しい一面だった。

しばらく文を読むことに没頭していた梓は、不意に手をとめて、  
「やっぱりみなさん、水蓮さまと朱華さまのご結婚を楽しみにしていらっしゃるのですね……」

ぼつりと呟かれた言葉は、だが決して聞き逃せるものではなかった。

「梓？」

「水蓮さまがもしわたしとそうなっても、きっと誰も喜ばないでしょうに」

「あずー」

思わず書机を叩いた水蓮が、大きく名を呼ぼうとした、そのときだった。

「水蓮さま！ 一大事でございます!!」

いつも穏やかな楊の、やけに焦った声音が襖の外から飛んでくる。

「何事だ!？」

つられて水蓮も立ちあがりながら叫び返すと、

「藩境の兵士から、火急の文が届きましたっ。第五十二藩・吉奥(いつ)の軍がこちらに向かっているそうです！」

「な……っ」

告げられた言葉を、水蓮は一瞬理解できなかった。——いや、理解したくはなかった。

(なぜ!?)

国内のどこでも、久しく戦(いくさ)が行われたという話は聞いていない。

それなのにどうして、これから朱華と婚儀を挙げるというこの時期に、戦を仕掛けられるのか。あるいは、代替わりをして間もない時分であるから、狙われたのか。

(どちらにせよ、きっかけは『私』なのか——?)

呆然と立ち尽くす水蓮の腕を、ぐいと引いたのは梓だった。

「水蓮さまっ？ どうされました!？」

「あ——」

我に返った水蓮は、梓の心配そうな表情を見て、冷静さを取り戻す。

(そうだ、私がしっかりしなくては)

戦の理由は、必ずしもこちら側にはないのかもしれない。

梓に笑顔を見せ、肩にぽんと手を触れてから、水蓮は楊の待つ襖のところまで行って開けた。

片膝をつき頭をさげていた楊が、ぱっと顔をあげる。その後ろにも、何人かの守人や城兵が控えていた。

水蓮は彼らを一瞥すると、鋭い声音で指示を出す。

「すぐに藩中の警鐘を鳴らせ！ やつらはおそらくこの城郭を目指してくるだろう、城下町の住民たちを避難させるのだ。遠出ができない子どもや老人は、城郭のなかへ誘導するように！」

「はっ！」

すぐに返事をして、楊の後ろにいた者たちが散らばっていった。

——しかし楊は、その場から動かない。

「む？ どうしたのだ、楊」

いつもならまっ先に動くであろう楊を不審に思い、水蓮は声をかけた。

すると楊は、眉間に深いしわをたたえて告げる。

「もうひとつ、お知らせしたいことがございます」

その声は、どこか沈んでいるようだった。

「なんだ？ 早く言え！」

水蓮とて率先して動かなければならない立場だ、うかうかとしてはいられない。そこで楊を急かすと、楊

の視線はなぜか、水蓮を通り越して後ろを見た。後ろの――梓を。

「……壺奥の大將は、金色の髪に碧色の瞳を持っているそうです」

その言葉で、視線の意味を悟った。

(梓と同じ色を!?)

つまり、梓が以前いた東の大陸から来た者である可能性が高いということだ。

(だがなぜ、そんな者が壺奥に?)

奏和は積極的に鎖国をしているというわけではなかったが、異国の者が入ってくることはほとんどなかった。それは、互いに言葉がわからないせいであり、また、奏和の者は色の違う者を排除したがる傾向にあるという理由もあった。水蓮は梓から、奏和に来たばかりの頃は何度も殺されかけたという話を聞いていただけに、不思議に思ったのだ。

そっと後ろから袖を引かれ、水蓮は梓を振り返った。

まっ青な顔をして、ぶるぶると震えている梓を。

「――もしや、壺奥に知りあいでもいるのか？」

水蓮が念のために尋ねてみると、梓は必死に髪を揺らす。違うらしい。

「おりません！ わたし、奏和に来てからは一度も、同じ色を持った人に会ったことがないのです……」

(ならばなぜ、そんなにも震えている?)

考えはじめた、次の瞬間――水蓮は、気づいた。

袖を掴む梓の手を振りほどき、走り出す。

「そなたはそこにいろ！」

「水蓮さま……っ？」

悲痛な叫びが、水蓮の鼓膜を揺らした。それでも足をとめず、ただ急ぐ。

水蓮が向かったのは、城郭の中央――そう、天閣だ。

今そこにいる者に、用があった。

足音など気にせずばたばたと走り、天閣の扉へと近づく。いつもは出っ張りに引っかけられている鍵が、見あたらない。ふたりはまだなかにいるようだ。

やがて城郭各所にある櫓で警鐘が鳴らされはじめ、周囲がにわかに騒がしくなるなか、水蓮は天閣内に飛びこんでいった。

整然と積みあげられた木箱や武器のあいだを縫って進み、正面の狭い階段をのぼってゆく。この天閣は五層七階もあるうえ、敵襲に備え角度が急でのぼりづらい階段になっているため、少々苛つきながら脚を進めた。

そんななかでも、

「朱華姫！ 朱華姫はいるかっ？」

いることはわかっているのに、呼ばずにはいられなかった。

「水蓮!? 一体なにがあったの？ 警鐘が鳴ってるし、みんな慌ててるみたいだけど……」

異変を感じたふたりも、ちょうど出ようとしていたところなのだろう。水蓮が階段から顔を出すと、すぐ傍にふたりがいた。

そこで水蓮は、最後まで階段をのぼりきると、自分の代わりに櫓を階段へと押しやる。

「ちょっ……なんですかっ？ 水蓮さま！」

「水蓮御殿の政務所に梓がいる。おぬしは先にそちらへ行っている」

「えっ？ ひ、姫さまはっ!？」

「話が終わったら、すぐに合流させる」

水蓮は言いながらも櫂の身体をぐいぐいと押し、最後には階段の蓋を閉めてやった。天閣は、万が一城郭に攻めこまれた際の最後の砦であるため、こういった仕掛けはたくさんあるのだ。

「水蓮さま！ 僕の姫さまに、変なことを仰らないでくださいねっ！」

櫂は不満そうに蓋の下から叫ぶと、それでもやがて階段をおりていく足音が聞こえた。

残された朱華は、都の姫らしい凜とした視線を水蓮に向ける。水蓮の行動に、あまり驚いてはいないようだった。それどころか、

「あなたって本当に、なにをするにも突然ね」

小さく笑って、城郭の正面を向いている窓のほうへと近づく。

「攻めこんできたのは、一体誰なの？」

その確信に満ちた問いに、水蓮は一瞬息を呑んだ。

(やはりこの姫は、覚悟が違う)

普通の姫ならば、信じないどころか、考えもしないだろう。

なぜなら、それを認めるということは、自分の落ち度を認めることと同意だからだ。

(朱華姫もきっと、自分のせいだと思っているのだらうな)

周囲の人々が、都から来た姫君を恐れるならば、戦など仕掛けられるはずがない。壱師は【都の権力をみだりに誇示してはならない】と謳っているが、ある程度の誇示はやはり必要なのだ。だがそれも、まだ対岐に来て間もない朱華には、難しいことだろう。

(そんな状況下にあっても、朱華姫がそれを受け入れるというならば――)

「誰なの？」

水蓮が答えずにいると、朱華はもう一度尋ねた。

「――五十二番目の藩・壱奥だ」

朱華に負けじと覚悟を決めた水蓮は、はっきりと口にする。

朱華の目が大きく見開かれた。

「隣じゃない！ そっか……壱奥にはまだ都からの姫が行ってないから、今のうちにとってるのかも」

言われて水蓮は、「なるほど」と感心する。そこまで考えついてはいなかった。

「完全に都上(とがみ)の手に落ちてしまう前に、か？ だとすれば、やつらの目的は対岐だけでなく、奏和そのものである可能性もあるな」

「ええ、すぐに援軍を要請しましょう。あたしの鷹なら、父上のところまでひとつ飛びよ！」

言いおわるやいなや、階段のほうへと戻ろうとした腕を、水蓮は捕まえる。

「待て、まだ話は終わっていない」

「なあに？」

「壱奥軍の大將は、金髪碧眼だという情報があるのだ」

「まあ！ 梓と同じ国の人かしら？」

「それはわからぬ。が――」

水蓮はそこで一度言葉を切り、あいている左手を自分の胸に当てた。

「――それをみなに知られてしまえば、梓が壱奥の間諜だと、そう疑われるかもしれん」

「あ……！」

(そんなはずはない)

水蓮はそれを知っていた。当然だ。この一週間をともに過ごしている朱華や櫂も、信じてくれているに違いない。

だが、周囲の人々はそうもいかないのだ。

同じ色を持っているというだけで、疑いをかけられ、糾弾される――危害を加えられる可能性があった。先ほど梓が震えていたのはおそらく、これまでの経験からすぐそのことに気づいてしまったゆえなのだろう。

(私はそんな、梓の『気づき』に気づいた)

気づいたからには、手を打たねばならなかった。

「頼む朱華姫、梓を連れて都へ逃げてくれ！」

両肩を掴んで告げると、朱華の目がいっそう大きく開かれる。

「勝手なことばかり言っているのは、わかっている。しかしこのままここには、梓は――」

ほんの少し、先を想像しただけで、水蓮の手は震えた。

――いや、震えているのは朱華だろうか。

「あ、あたしだって梓が心配だけど、でも……っ」

先ほどまでの朱華は、きっと我慢をしていたのだ。表情が歪み、心の痛みを訴えてくる。

「今都に戻ったら、あたし自身どうなるかわからないのよ!? もしかしたら、もうここに戻ってこれないかもしれない……そうしたら櫻はどうなるのっ? あたしだって櫻のことが心配――」

「櫻は私が必ず守る！」

涙を含んだ朱華の声を遮って、水蓮は叫んだ。

「え……？」

「たとえ戦に巻きこまれても、私が絶対に死なせない。いずれ必ず、そなたの隣に返してやる。もしそなたが都上に拘束されるようなことがあれば、助けにいこう! だから――」

水蓮は朱華の両肩を掴んだまま、深く頭をさげた。

「お願いだ、そなたは梓を守ってくれ! 今梓を預けられるのは、そなたしかいない……!!」

「水蓮……」

身勝手すぎる自分を、水蓮は充分に自覚していた。

(朱華姫が都に戻りづらくなる原因をつくった私が、戻れと言っているのだからな)

もし自分が逆の立場だったなら、指を差して笑っていることだろう。そんなことはできない、できるわけがない、と。

それでも水蓮は、頼まずにはいられなかったのだ。

梓を守りたかったから。

やっと手に入れたささやかな幸せを、その欠片を、いずれまた繋げるように。

梓を傷つける可能性が少しでもあるならば、取り除いておきたかった。

(情けない話だが、そうしなければ私は、戦に集中することすらできない)

藩主失格だ――と、水蓮が自分を責めたとき、手の甲に水を感じた。

咄嗟に顔をあげると、朱華の両目からはとめどなく涙が溢れている。だが、その表情は決して哀しそうなものではなく、強い決意をたたえた眼差しがそこにあった。

「――約束よ」

低い声が、水蓮の決意を脅す。まるであの日、脅した水蓮のように。

「もし違(たが)えたら、絶対に、赦さないから」

溢れているのは、朱華の心なのだろうと思った。

水蓮は自分の手の甲を引き寄せると、落ちた雫にそっと口づける。

「この、涙に誓って――」

そうしてふたりは、ふたつ目の交換条件を交わした。

(四)

「まさか私がつくらせた水堀が、実戦で役立つことになろうとはな」

一週間前と同じ窓から外を見やり、水蓮は小さく笑った。

その横には、朱華ではなく櫂がいる。手に持った遠見筒を窓に向け、周辺を見渡していた。

「僕、てっきり湖のまんなかにならぶを建てたんだと思っていましたよ。水堀をあとからつくったんですね」

高い位置にあるこの窓から見えるのは、城郭の全体と、周囲をぐるり囲んでいる水堀。そして、その向こうでこちらを見張って待機している壱奥(いつ)軍だ。前線の兵士たちからの情報で、壱奥軍三〇〇と知った水蓮たちは、籠城戦を選んでいたのである。今すぐ出せるこちらの手駒は一二〇であるうえ、もともと対岐城は籠城向きで、桔橋(はねばし)をあげてしまえば敵軍はそう簡単に攻められない。

(まるでこの城郭だけが、世界から取り残されてしまったようだな)

そんなことを考えながら、水蓮は口を開いた。

「そう、もともとは父がつくらせた空堀(からぼり)があったのだ。それを私が、自らの藩主としての力を示すために、水堀につくりかえさせた。あの頃はまだ、父が亡くなったばかりで私も焦っていたからな」

『あの頃』と言っても、まだ二年しか経っていないんでしょう？ 梓さんから少しだけお聞きしましたよ。水蓮さまも、二年前はとても純朴な少年だったとか」

遠見筒から目を離しながら告げた櫂の言葉に、水蓮は鋭い視線を向ける。

「――いつの間に梓と話したんだ？」

「そこに怒らないでくださいよ。水蓮さまこそ、僕の姫さまとふたりきりで話したうえに、大事な約束までなされているらしいじゃありませんか……！」

櫂の涙目も、すっかり見慣れてしまった水蓮は、あっさりとして逃げ去る。

「それについては、すまなかったと何度も謝つたろう？」

「そうですね！ 僕だって、姫さまが危険な目に遭うのは嫌ですから、ここにいないほうがいいとは思っています。ただ……ただですよ？ もしもこのまま離ればなれになってしまったらと思うと……ううっ」

それについても、水蓮は何度も話していた。

「だから、もし朱華姫が都から出られなくなったとしても、必ず迎えにいくと――」

話していた。

(え……?)

名が出た相手の姿が、突然目の前に現れたように見えて、水蓮は息をとめた。

(あの着物の色は、都色ではないのか!?)

壱奥軍のなかにちらちらと見えている、あの色は。

「櫂、遠見筒をよこせ！」

水蓮が奪ったそれを右目にあてると、先ほどまではぼんやりとしか見えなかったものが、ある程度ははっきり見えるようになる。そして、見れば見るほど朱華にしか見えなかった。都色の着物はもちろん、背格好も似て見えたのだ。

(もしや朱華姫、壱奥軍に捕まったのか!?)

どくんと、水蓮の心臓が強く跳ねた。

その先にある、いちばん考えたくないことまで考えてしまったからだ。

「――っ」

なにも言えなくなった水蓮の手もとから、今度は櫂が遠見筒を奪い返す。そして同じものを見つけたの

だろう、完全に動きをとめた。

「あれは……姫さま!？」

「水蓮さま！ 壱奥の参謀と思われる者が、おかしなことを言い出し、我が軍の兵士らを混乱させようとしております……！」

櫂の声とかぶさるようにして、階下から楊の声が飛んでくる。

はっと我に返った水蓮は、すぐに反応すると階段の蓋を外してやった。

『『おかしなこと』とはなんだっ？ もしや、朱華姫のことか!？』

自分でも意外に思うほど動揺した水蓮の声音は、自然といつもより大きいものになっていた。

階段をのぼりきる前に問われた楊は、途中で足をとめ神妙な顔で深く頷く。

『『おとなしく対岐城を明け渡せ、それが都上の意思である』と。『その証拠に五十二番目の姫君である朱華姫を与えられた』と、そんな嘘を言っているのです！』

「な……っ」

水蓮はもう一度、言葉を失った。

(朱華姫が五十二番目の姫君だとっ？ 馬鹿な……！)

楊の言うとおりの、確かに嘘なのだろうと、水蓮も思う。――思いたい。

(だがもし、まことのことだったら?)

心配する心が、藩主としての責任が、胸中にどろりとした黒いものを浮かびあがらせる。

もしかしたら朱華は、都で壱師に捕まってしまう、教えを破ったことで五十一番目からおろされたうえに、対岐を襲う壱奥に味方するという恨まれ役を押しつけられたのだろうか。壱奥と合流したのがたった今だというならば、都へ行って戻ってくる時間的余裕はあったはずだ。

それとも――

(まさか、自分の意思で壱奥にくだった?)

朱華には恨まれているかもしれないと、そう思うところがあっただけに、水蓮の心は揺れた。

その後何度も遠見筒で外を覗いてみたが、朱華の姿は相変わらずそこにあり、逆に愛しい者の姿は見えない。水蓮は、それを喜ぶべきか哀しむべきかも、わからずにいた。

どんなに冷静であろうとしても、目の前にちらつく『裏切り』の三文字が心を掻き乱し、無意識に唇を噛みしめる。

そんな水蓮に、

「――ご安心ください、水蓮さま」

努めて冷静な声をかけたのは、櫂だ。

「梓さんは必ずご無事です。姫さまがおひとりであるということは、そういうことだと僕は思います」

「櫂、おぬし……」

(こんな状況では、櫂のほうはずっとつらいはず)

なにせ、目の前に敵となった朱華がいるのだ。しかも、黙っていればずっと櫂の傍に居られたかもしれない『五十一番目の姫君』という立場を捨て、『五十二番目の姫君』になったという。それが本当ならば、ふたりがともに過ごすことはもう二度とないだろう。他人の妻になるということだからだ。

それなのに櫂は、やけに澄んだ瞳をして水蓮を見つめてくる。

信頼は決して揺るがないと、言葉よりも雄弁に物語っていた。

たっぴりと間を取ってから、再びその口もとが動き出す。

「水蓮さまは、梓さんと対岐のことだけを心配していればいいんです。姫さまのことは、僕が心配します。誰よりも信じます！」

力強い宣言に、水蓮は反射的に大きく目を見開いた。

(朱華姫は、裏切ってなどいないと?)

それが、一瞬でも疑ってしまった水蓮を責める言葉なのか、たんに独占欲からきているのか、水蓮には区別がつかなかった。ただひとつわかるのは、その言葉が途方もない覚悟の上に成り立っているということだ。

櫂はおそらく、もし本当に裏切られていたとしても、決してそれを責めないだろう。哀しまないだろう。最後まで信じきった自分を誇り、結果傷ついても、その痛みを受け入れるのだ。

それほどの想いで、朱華を愛している。

今こうして穏やかに佇んでいられる櫂を見て、水蓮はそう悟った。

(――ならば、私はどうだ?)

同じくらい、梓を愛せているだろうか。

今度は自らに問う。

水蓮が朱華とともに過ごしたのは、まだ二週間程度であり、互いのことを深く知っているとはとても言えない間柄だ。また、四人揃って顔を合わせる事が圧倒的に多く、朱華の本心を聞き出せたことなど、実際にはないのかもしれない。

(だが、梓は違う)

四六時中朱華と一緒にいた梓は、水蓮よりも遥かに朱華のことをよく知っているはずだった。そしてその梓はことあるごとに、

「朱華さま以外の姫君が来るのは嫌です！」

そう口にしていた。それは信頼以外のなにものでもない言葉だった。

(私は、信じられるか?)

自らの愛しい人が信じる者を。

強固な絆を結ぶ前に、押しつけあった責任を。

あの約束を。

(信じられるのだろうか――?)

櫓に誘われ、天閣のいちばん上の階までのぼった朱華は、そこから見える景色にすっかり心を奪われていた。

「すごいわ……！ あたし、こんな高い場所にあがったの、初めてかもしれないっ」

「僕もですよ、姫さま。都城の天閣はここよりもさらに高いですけど、残念ながらそのなかに入ることは叶いませんでしたから」

残念そうに応えた櫓の言葉に、朱華は振り返る。

そこにあったのは、しかしとても楽しそうな笑顔だった。

それが腑に落ちなかった朱華は、首を傾げて問いかける。

「……怒ってないの？ あなた、あたしに父上のことを教えるために、城兵になったのに」

そう、もともと槍が得意だった櫓が城兵になることを目指したのは、朱華のためだった。

それはふたりが十二歳の頃、朱華の乳母(めのと)であり櫓の母である萩の誕生日を祝ったときに、こんな会話があったからだ。

『櫓は、萩さんのことをいろいろ知ってていいね』

『へ？』

『誕生日はもちろんだけど、好きな食べものとか、好きな色とか、なんでもわかるから、贈りものをするときも困らないよね』

『姫さま……？』

『あたし、父上の誕生日は人から聞いて知ってるけど、父上が好きなものなんて知らないから、なにを贈ったらいいのかわからなかったの。だから、贈れなかった。お姉さまたちはきっとみんな、すごいものを贈るんだろうなって思ったら、怖じ気づいちゃって……』

すると櫓は、両手のこぶしを握りしめて告げた。

『——それなら、僕が訊いてきます！』

『え……？』

『城兵になって、壱師さまのお傍に行けたら、直接訊ける機会があるかもしれないでしょ？ そうじゃなくても、都城のなかにいればきっと、今よりもたくさん情報が入ってくるはずだもの。それを僕が集めて、姫さまに教えますよっ！』

まだ将来の夢というものを持っていなかった櫓は、それで自分の未来を決めたようだった。

朱華は、そこまでしてくれなくていいと思いつつも——嬉しくて、まだ幼かった心は、その気持ちに抗いきれず、櫓の手を握りしめてしまったのだ。「お願い」と、伝えるかのように。

(それなのに、城兵をやめるきっかけも『あたし』だなんて……)

怒られても仕方がない。朱華はそう思っていた。嫌味のひとつでも、言われて当然だろうと。

ところが櫓は、逆に「なぜそんなことを訊くんだ？」と言わんばかりに目を見開いて、

「かっ、勘違いをしないでくださいよ！ 僕が悔しいのは、都城の天閣に入れる身分を手に入れる前に出てきたことではなく、姫さまにその素晴らしい景色をお伝えできなかったことなんです！ それは僕の勝手な後悔ですからっ！ 姫さまを責めているわけではありません!!」

両手をぶんぶんと振り、全力で否定する櫓の姿に、朱華の口もととは自然と笑った。

「——ありがとう、櫓。あたしの傍に在ろうとしてくれて」

周囲に誰もいないからこそ、素直な言葉もするりと出る。

(梓みたいに、あたしも少しくらいは素直にならなくちゃ)

一週間一緒にいて、ますますそう思った朱華は、照れを隠して実践してみたのだった。

——それが、櫻の忍耐力を試すものだとも知らずに。

不意をつかれた形になった櫻は、表情を真面目なものに戻すと、朱華との距離を一步縮める。唇はまだ、動かなかった。

「櫻……？」

(気恥ずかしいのがわかってて言ったのに、返事なし!?)

朱華が不満を隠さずに名を呼ぶと、なぜか櫻は両手を広げて動きをとめる。

そしてやっと、口を開いた。

「姫さま——抱きしめても、いいですか？」

「へっ？」

この手はどうやら、その準備らしい。

「な、なに言ってるのよっ？ あんた、いつも許可なんて取らずに勝手に抱きついてきてるじゃない！」

改めて尋ねられて、朱華がどぎまぎしながら返事をする、櫻の顔はふにやりと笑った。

「それは……水蓮さまや梓さんがいるときだけです？ ふたりきりでは、とめてくれる人がいないので、一応確認をと思ひまして——」

そこまで告げると、朱華がまだなにも言っていないにも関わらず、触れてくる。

「——でもやっぱり断られそうなので、返事は聞かないことにします！」

「あ……っ」

正面からしっかりと抱きしめられて、朱華は言葉を失った。着物の向こうから伝わってくる櫻の脈や体温が、朱華のなかにある文句や羞恥心を、どんどん覆い隠してゆく。

「櫻——」

朱華も自分の腕を動かし、櫻の背中に手をまわした。

結果心のなかに残ったのは、罪悪感と、諦めにも似た感情だ。

(こんな幸せな時間は、そう長くは続かないわ)

対岐(つき)の藩民たちと、そして壱師を騙す形になっている以上、この平穏は一時的なものではないと、最初からわかっていたのだ。

だが朱華にも——これほど早く終わりが来るとは、まるで予想できていなかった。

突然窓の外から聞こえてきた警鐘の音に、抱きあっていたふたりの身体がびくりと跳ねる。

「えっ？」

「な、なんでしょう、この音……」

名残惜しげに手を放し、揃って窓へと近づいた。城兵たちが右往左往しているのが見える。

(もしかして——!?)

信じたくない予想が朱華の脳裏に浮かんだが、それを尋ねるべき相手はここにいない。

「下におりましょう、櫻。ここからじゃ、話も訊けないわ」

朱華がすぐにそう判断すると、櫻はあからさまに残念そうな顔をした。それでも拒否はせず、

「——わかりました」

その応えとかぶさるようにして、もうひとつ、届く声がある。

「朱華姫！ 朱華姫はいるかっ？」

水蓮のものだった。しかも、相当に焦っているようだ。

朱華と櫻は一度顔を合わせてから、階段に近づく。

そこに水蓮が顔を出した。

そして――櫂を先に下へと戻し、ふたりきりになった朱華と水蓮は、再び密約を交わした。

それは、朱華の心を強く縛りつける、言葉の鎖の先にある約束――。

その後ひとり天閣の上に残った朱華は、呆然とその場に立ち尽くしていた。

『よいか、朱華。もしも対岐が危険に晒されたとき、先頭に立って守るのがおまえの役目だ。それによって対岐の人々は、おまえをより家族として受け入れるだろう』

対岐へと向かう前に壱師からもらった言葉を、一文字一文字思い出しながら。

――涙をすべて、この場所に置いてゆくために。

(ごめんなさい、父上。あたしはあなたの言葉を、なにひとつ守れそうにありません……！)

自分の力が至らないばかりに攻められても、矢面に立つことさえできない。

なにが壱師の娘か。

ただの自分勝手な娘ではないか。

(そう笑われても、文句なんか言えない)

自分をそんなふうにする水蓮の言動が、心底憎らしかった。

重大な決断ばかりを迫ってくる、あの鋭い瞳が。

朱華はまだ、水蓮を完全には赦せずにいる。

信じきれずにいた。

(それでも――あたしだって、梓を守りたい！)

最初は梓を怖がっていた朱華も、ともに過ごすうちにわかってきたのだ。水蓮が梓のどんなところに惹かれていったのか。

(いつでも優しく微笑んでくれる、梓)

それだけで人に落ちつきを与えることができるのだと、朱華は気づいた。そういえば幼い頃の自分も、そうと知らなかっただけで、萩や櫂の笑顔にずっと支えられていたのだと。

(いつか、たったひとりで旅立たなければいけない)

それを知っていても、穏やかな気持ちで暮らせていたのは、間違いなくそのおかげだった。そして今の朱華が、知らない者ばかりの城郭内で落ちついていられるのも、同じこと。櫂が傍に居るといっても、始終隣に居られるわけではなかったから、梓の存在は本当にありがたかったのだ。

(髪や瞳の色なんて、些末な問題だったのよ)

朱華はそう思う。

だが、梓にとってそうではないことも、十分に理解していた。梓のその笑顔は、ずっと苦労してきたからこそ身についたものなのだと、感覚的にわかるからだ。

夜が訪れるたびに、梓はぽつぽつと過去の話をしてくれた。

『髪の色が気持ち悪って、そんな目で見ると、何度も殴られました』

八歳で人攫いに遭い、いろんな場所を転々としていたという梓。奏和に連れてこられたばかりの頃は、本当に大変な毎日だったという。

『言葉も通じなくて、泣き声をあげる気力もなく、生きているのが不思議なくらいでした』

ひと握りの親切な人々に助けてもらえなかったら、とっくに死んでいただろう。

そう語った梓を思い出して、朱華は下唇を噛みしめた。

(都に戻ったら、あたしは一体どうなるの?)

それは、行ってみなければわからない。

だが、梓を対岐から連れ出せば、梓の危険は確実に回避できる。

不確かなことと、決定的なこと。

——そう、最初から、朱華が選べるのはひとつだったのかもしれない。

(水蓮に言われたときは、全然冷静には考えられなかったけど)

水蓮への腹立たしさや、櫂を心配する気持ちが先走って、それゆえに涙が落ちてしまった。

だが、状況を冷静に分析した今なら、悪くない選択だったと肯定できる。

(あたしは、守りたいんだ)

梓も櫂も、もちろん対岐だって守りたい。だが対岐に関しては、藩主たる水蓮が朱華に逃げろと言っているのだから、自ら守り抜く自信があつてのことだろう。

そう信じるしかないと、朱華は自分を納得させた。

(——さあ、あたしにできることからやろう！)

対岐城にやってきたそのときの決意を、再び胸に抱いて。

(あたしは『逃げる』んじゃない。梓を守るために、一度『戻る』だけよ！)

ぐいと袖で目の辺りを拭いたら、布地の色が変わった。その色がもとへと戻る前に、朱華は急な階段を駆けおりてゆく。

一階までおりると、ちょうど武器を取りにきたのだろう城兵たちがいて、ものすごい勢いでおりてきた朱華に目を丸くした。

(あ、やばっ！)

水蓮や梓以外の前ではおしとやかに振る舞っていた朱華は、すぐに笑顔を取り繕った。彼らを勇気づけるために——対岐を離れる罪悪感を隠して、告げる。

「——大丈夫、対岐は絶対に負けません。壱師もすぐに援軍を送ってくれるでしょう」

「は、はい！」

「我々も、少しでも被害を抑えられるよう頑張りますっ！」

動きをとめていた城兵たちは、ぴんと胸を張って応えた。

その様子に、朱華のほうこそ安心して、あいだをすり抜ける。

「期待していますよ」

(いつか兵士たち(みんな)の前でも、自由に振る舞えるように)

今は水蓮の面目を立てるために『自分』を隠していたが、本当の家族になるためにはそれではいけないことも、朱華自身わかっていた。

だが、まだ早いのだ。

なにもかもが。

(藩に嫁いで一週間で戻るなんて、前代未聞よね)

口もとに苦笑を浮かべながら外に出ると、そこには櫂が待っていた。

「姫さま……！」

なかなか戻ってこないから、心配して見にきてくれたのだろう。

ちょうどいいとばかりに、朱華は櫂に『命令』する。

「——櫂、水蓮に頼んで馬を見せてもらいなさい。そして、あたし好みの馬を選ぶのよ。あなたならできるでしょう？」

櫂の表情が、一瞬泣きそうに歪んだ。それでもこらえて、片膝を折る。

「かしこ…まりました……」

その脇を通りすぎるとき、朱華はぼんと櫂の肩に手を置いた。

櫂もそれを察していたのか、そっと朱華の指先に触れる。

――それも、約束。

覚悟という名の、約束だ。

(二)

朱華が都から対岐(つき)に向かうときに十日もかかったのは、旅の安全を考えて牛車を使っていたからだった。だが本来ならば、それほど時間のかかる距離ではない。

(一週間もあれば、戻れるんじゃないかしら?)

都で拘束されないことを前提に、朱華はそう考えていた。梓を都に預けたら、すぐに戻ってこようと。

「――では水蓮、行ってまいります」

男性用の質素な着物を身につけ、目深に笠をかぶった朱華が、馬の上からかきこまって告げる。髪も首の後ろで一本に結わえており、馬上のため身長がごまかされるせいか、華奢な朱華でもちゃんと男に見えた。

水蓮はそんな朱華を見あげると、小さく笑って応える。

「都の姫が裸馬を乗りこなすなどと、さすがの私も予想外だぞ」

それはもちろん水蓮だけの話ではなく、誰から見ても不自然で目立つだろうから、こうして男装をしたのだった。

朱華は得意満面の笑みで返す。

「安心して? 梓を振り落としたりはしないから」

そう、朱華が手綱を握る腕のあいだには、頭から布をかぶって髪を隠した梓がちょこんと収まっていた。梓がひとりでは馬に乗れないというので、こういう格好になったのだ。

「そうですよ水蓮さま、ご安心ください! 姫さまの乗馬の腕は、僕が逆立ちをしたって敵わないくらいなんですっ」

日頃から朱華とともに学んでいた櫂が補足を入れると、水蓮はますます苦笑して、

「だから、なぜそれを覚える必要があったのだ? 姫君ならば、おとなしく駕籠(かご)や輿に乗ればよいだろうに」

おそらく朱華の答えをわかっていて、問いかける。そういう顔をしていた。

だから朱華も、ためらわずに答えることができる。

「月に一度は、都に戻ろうと思ってたのよ! 乳母から駄目だと言われても、諦められなかった……それがこんなふうにならぬとは、あたしも思ってなかったけど」

視線は水蓮にではなく、その隣の櫂に向いていた。

(会いたい想いは、今も変わらない)

また会うために、必ず戻ってこよう。

さっと頬を赤らめながらも、朱華は視線で櫂に語りかけた。

「姫さま……っ」

応えた櫂に、こくりと深く頷く。

「対岐を頼んだわよ!」

手綱を引きながら告げた朱華のあとに、それまで黙っていた梓も続けた。

「おふたりとも、どうかお気をつけて……!」

旅立つ者と、戦へと向かう者。

本当に気をつけるべきは、一体どちらなのか。それさえもわからないまま、四人は手を振りあつた。それぞれに、別れがたい想いを抱きながら。

朱華と梓を乗せた馬は、ゆっくりと闇色に変わりゆく空の下を駆け抜ける。

「梓! もし途中でお尻が痛くなったり、具合が悪くなったりしても、速度を緩めることはできないから、

覚悟をしておいてねっ」

梓が振り落とされぬよう気を遣いながらも、朱華はそんな言葉を投げかけた。やはり一刻でも早く戻ってきたいという気持ちがあったから、自分の心を偽れなかったのだ。

一方の梓は梓で、朱華が抱えているものの大きさを、全部ではないにしろそれなりに理解しているようだった。

「それはもちろん、構いませんっ。わたし、いくらでも我慢しますから……！ わかっているのです。わたしと水蓮さまのわがままに、おふたりが振りまわされていること――」

「あら、梓は別にわがままではないでしょう？ 多分いちばん我慢してるのよ。都へ逃げろと言われても、一言も嫌だとは言わなかったじゃない」

さらに朱華は、櫂から正しい情報も聞いていた。

(あたしはてっきり、水蓮が梓のためを思って城郭に誘わなかったんだと思っていただけ)

櫂が水蓮から訊き出した話によれば、水蓮は最初から梓を城郭に迎えたいと誘っていたらしい。だが梓は、それを断りつづけていたという。

(なぜかなんて、考えるまでもないわ)

すべて水蓮のためだ。自分が城郭へ行けば、水蓮の評価をさげしてしまうかもしれない。それは今とて同じことで、自分が城郭内に残ることにより、自分だけでなく水蓮にまで疑いの目が向くことを恐れたのだろう。そして梓は、たとえ離れることになっても、水蓮の背中を押すことを選んだのだ。自らが我慢をすることで――

「そんな梓だからこそ、あたしも守りたいと思ったの！」

少しでも身体が軽くなるようにと、朱華は馬上から大きな声で叫ぶ。

決意は鈍らない。

それを証明するかのよう。

すると、馬が駆けるのと同じくらい、梓の返事は速かった。

「朱華さま……っ！」

呼ばれた朱華からは梓の後頭部しか見えないが、濡れた声から表情は簡単に予想できる。

「できることならわたしも、朱華さまを危険には晒したくないのです！ こうして都へ向かうことで、もし朱華さまになにかがあったなら、わたしは櫂さんに顔向けできません……！」

それでも「行かない」とは言わない梓の強さを、朱華も欲しいと思った。口に出したことが現実になるように、力強く言葉を紡ぐ。

「――心配いらぬわ。あたしは都のなかには入らないようにするから」

梓の両腰辺りにおいていた腕を前のほうにまわすと、ぎゅっと抱きしめた。

「あたしの鷹に、二通の文(ふみ)を持たせたの。ひとつは父上宛てで、対岐への援軍を周辺の藩に呼びかけてもらうためのものよ。そしてもうひとつは、萩さん――櫂のお母さんで、あたしの乳母だった人ね。萩さんには都の外で待っててもらうよう頼んであるから」

「ふ、ふたつ目の文まで都上に読まれている可能性は……？」

朱華もそれを考えていなかったわけではないから、すぐに答える。

「先に萩さんのほうに行くよう、指示を出してはおいたけど――五分五分ね。それに父上なら、もし気づいていても先の展開を読んで、わざと干渉してこないかもしれないわ」

そういう人だからこそ、朱華にその思考を読み切れるわけがないのだ。

しかし、壱師についてあまり詳しくないのだろう梓は、まだ諦めなかった。

「ではっ、朱華さまのお母さまに頼るわけにはいかないのですか!？」

手綱を握る朱華の手に自分の手を重ね、半分振り返るようにして訊いてくる梓に、朱華は眉尻をさげて答える。

「誰が自分の母親なのか、誰が自分の子なのか、父上以外は誰も知らないのよ。母親たちが子どものことについて醜く争うことのないように、そうしてあるらしいわ。候補なら百人近くいるんだけどね」

「ひゃ、百人も……!？」

よほど驚いたのか、梓はそのあとしばらく口を開かなかった。

(三)

第五十一藩の対岐(つき)から、第四十七藩の阿佐(あさ)、第四十三藩の紀路(のりじ)、第三十九藩の備芸(びぎ)、第三十五藩の石岐(いわき)、第三十一藩の但幡(たんぱ)と五つの藩を通り抜ける、都への長い旅路。最小限の休憩で都を目指したふたりは、四日後の朝には都の手前まで辿り着くことができた。

その足ですぐ、萩に指定していた場所へと向かう。

朱華が選んだのは、藩境付近には必ずある旅人が休憩するための茶屋だ。そこは梓がいたような城下町の茶屋とは違い、外に置かれた床机だけで客をもてなす、小規模なものだった。よって、店内で隠れて会うといったことはできないのだが――

(もともといろんな人が立ち寄る場所だもの、いかにもわけありのあたしたちが行ったって、怪しまれる確率はかなり低いわ)

朱華はそう読んでいたのだった。

馬の速度を落とし、視界の先にある茶屋にゆっくりと近づいていく。

店の前にはすでに人影があり、誰かが床机に腰かけているのがわかった。

馬の脚音で向こうも気づいたのか、ひとりが立ちあがる。

(え……?)

そう、立ちあがったのは、ひとり。もうひとはまだ、座ったままだった。

(ふたりいる!? どうして……っ)

萩への文(ふみ)には、「必ずひとりで来るように」と書いたわけではない。しかし、鋭い萩ならば書かずとも察してくれるだろうと思っていたのだ。それがなされなかったということは、ふたりで来たことが萩の意思でないことも考えられる。

(もしかして、やっぱり父上にばれてた?)

壱師の教えを破ったことはもちろんのこと、その朱華が都へ戻ったと知られたならば、捕らえられ事情を訊かれるのが妥当な対応だろう。そのために朱華に近づこうと、これから会う予定の萩に人をつけたのかもしれない。

そう考えた朱華は、だがすぐに自分自身で否定する。

(――ううん、違う。それだったらきっと、もうひとは最初から隠れてるはずなもの!)

店内には隠れられないといっても、建物の陰には充分に身を隠す余裕があるのだ。最初は萩だけを前に出しておいて、朱華たちが安心して近づいていったところで捕らえたほうが、どう考えても効率がよさそうだった。

(父上ならきっと、そうするわ)

逆に、あえてもうひとりを前に出しているならば、それは「逃げてほしい」という伝言とも取れる。

朱華は手綱を引き、馬の動きを完全にとめた。

このまま近づくべきか、引き返すべきか――

(あたしが選ぶべきは、どっち?)

深く思考しようとするほど、早鐘のように鳴る心臓が邪魔をする。

――不意に、

「あ……」

ひとり緊張する朱華の腕のなかで、小さく声をあげたのは梓だった。

「どうしたの?」

朱華が後ろから覗きこむようにして顔を見ると、梓は戸惑った様子で前を指差す。

「茶屋の前にいらっしゃる女性が、こちらに向かって手招きをしていますよ。あのかたが菫さんでしょうか？」

「えっ？」

言われてもう一度、朱華は人影のほうに視線を向ける。だが、立ちあがっていることはわかって、手招きをしているところまでは見えなかった。

(碧色の瞳は、黒よりも鮮明に世界を映し出すのかしら)

咄嗟にそう考えた朱華は、梓に振ってみる。

「もしかして梓、かなり目がいいの？」

「……そうかもしれません。あまり意識をしたことはありませんでしたが」

自分でも気づいていなかったのだろう、梓は苦笑を浮かべていた。

そんな梓の肩に、朱華はぽんと手を置く。

「じゃあ、もうひとりいる人がどんな顔とか格好をしてるか、見える!？」

相手が何者なのか、少しでもわかることがあればと、期待して問いかけた。

すると梓はすぐに頷いて口を開く。

「菫さんの陰になってちょっと見えにくいですが、あれは多分都城の兵士だと思います。前にふたりで話したときに樗さんが見せてくださった、都で着ていたというものにそっくりな着物を着ていますから」

「えっ？」

その瞬間、朱華の脳裏に浮かんだのは、

(ふたりで話したって……いつの間に!?)

そちらの衝撃だった。

朱華はそれまであまり気にしていなかったが、梓と樗は仕える者同士なのだ。朱華や水蓮に会うよりも、気軽に会いやすい間柄であることは確かで――

(だ、だからって、用もないのに会ったりはしてないと思うけど……けどっ)

梓と樗が自分の知らないところで、知らないうちに会話をしていたと思うと、なぜだか胸がざわついた。そんな可能性を、一度も考えたことのなかった自分に。

(ああ――あたしと水蓮がふたりきりになるたびに、不満そうにしてた樗の気持ちが少しわかったわ……)

相手をどんなに信頼していても、面白くないと感じてしまうのが恋心なのだろう。

(あたしがただ、その気持ちを知らなかっただけ)

気づいていなかったただけなのだ。

「朱華さま……？　どうかなさいました？」

それ以上の反応をしない朱華を不審に思っか、今度は梓のほうから後ろを振り返る。

朱華は、まさか「いつ樗と会ってたの？」などとは訊けずに、慌てて他の問いを取り繕った。

「あー、えっと……他になにか、わかることはある？」

「そうですね。これもおそらくですが、結構若いからだと思えますよ」

「若い？」

朱華が問い返したのは、それが意外に思えたからだ。

(もしここで本当にあたしを捕まえるつもりなら、ある程度そういう経験のある人を配置するんじゃないかしら?)

若いからといって、必ずしも経験が浅いとはもちろん限らない。だが普通に考えれば、それなりに歳を重ねた者のほうが手際よく動けるだろう。まして、この仕事をひとりで任されているならば――。

邪魔な嫉妬心を胸の隅に追いやり、朱華はくるくると思考を巡らす。

「一梓。萩さんはまだ、こっちに手招きをしてる？」

「ええ。先ほどまでより、さらに激しく動いていらっしゃいますよ。こちらが警戒しているのを、見越しているのかもしれませんがね」

「そう……」

(それなら、迷うことはないのかもしれない)

心を決めて、朱華は手綱を握る手に力をこめた。

(もうひとりいる誰かを、そう簡単に信じることはできないけど)

萩ならば、誰よりも信じることができるのだ。その萩が呼んでいるのだから、きっと信用できる人物であるに違いない。

朱華はそう判断した。馬の脚を、再び進める。

やがて朱華の目にも萩の姿がはっきり見えるようになると、その顔にびっしょりと浮かんだ汗に気づいた。よほど一生懸命に腕を動かしていたのだろうことが窺える。

(なんだか申しわけないことをしちゃったわね……)

朱華がそう後悔しているうちに、萩のほうからも駆け寄ってきて、

「やはり姫……！ もしやそのまま帰ってしまわれるのかと思い、心配しておりましたよっ」

近づいてから声をかけたのは、おそらく「姫」と大声で呼ぶことを避けたかったからだろう。

馬上に梓を残したまま、朱華はひらりと地面に飛び降りる。

「待たせてごめんなさい、萩さん。来てくれてありがとう！」

そう告げながら萩の両手を握ると、萩はその手のひらにできているまめに気づいたのだろう、少しだけ眉をひそめた。

「……本当に、対岐からこの馬で戻っていらしたのですね。男装までなさって……」

長時間手綱を握っていたからこそできたそれに、ふたりの過酷な旅路を悟ったようだった。

感心と呆れの入り交じったその表情を、正確に読み取った朱華は苦笑を返す。

「そうよ。あたしだって、やる時はやるんだから！」

朱華は萩と暮らしていた頃、好きなときに都へと戻れるようにと馬術を学んだ。そんな朱華に萩はよく、「無茶だ」と言っていたものだった。だからこそ朱華には、萩の複雑な胸の内がよくわかるのだ。

(喜びと心配も、一緒に入ってるのよね)

朱華は少しでも萩を安心させようと、握る手に力をこめた。離れていたのは二週間足らずなのに、その手には以前よりもしわが増えたような気がして、切なくなる。

(そうだ、あたし、萩さんから櫛まで奪っちゃったんだ……！)

今さらそんなことに気づいて、胸が痛んだ。

もう一度謝ろうと息を吸った、そのとき――

「どうりで、牛車での旅が退屈そうだったはずですよー」

(え……?)

萩の後ろから飛んできた『もうひとりの誰か』の声音に、朱華は驚いて動きをとめる。

声をかけられたことに対してではない。その声に、聞き覚えがあったからだ。

(もしかしてっ、あのときの!?)

朱華が萩の身体の向こう側をひょいと覗きこむと、まだ座ったままだった相手はゆっくりと立ちあがる。床机の上にある大きな番傘の陰から抜け出して、しっかりと見えるようになった顔にも、朱華はやはり見覚えがあった。

「あなた、あたしを対岐まで送ってくれた人じゃない！」

そう、朱華を対岐まで護衛していた守人たちのなかで、最も若い男だった。

「憶えていてくださいましたか！」

「もちろんよ。対岐まであと五日くらいだって言った、あなたの読みは当たってたし」

そして彼は、花着物の裾を持ってくれた人でもあった。そのため特に印象がよかったのだ。

「でも、なぜあなたがここに？」

相手が顔見知りだとわかったところで、朱華は正面から切りこんでみることにした。

(この人なら、そんな頭固そうに見えないし、話を聞いてくれそうなもの)

「萩さんが連れてきた——わけじゃなさそうね」

朱華がちらりと横目で萩の様子を見たら、萩は見るからにすまなそうな表情をしていた。彼の登場は、萩にとっても予想外なことであったのだろう。

若き守人は頭の後ろを搔きながら近づいてくると、

「ぼ、ぼくはただ、ここで休んでいただけですよ？ そうしたら、あとからいらした萩さんが、なんだかずいぶんと思いつめた様子でしたので気になって……こちらから声をかけたのです」

そこまで告げたところで、萩が勢いよく頭をさげた。

「申しわけありません姫！ このかたが、なかなかここを離れる気配がなかったものですから……。それに私も、このかたは姫の顔を知っているとわかっておりましたし、ならば話して協力していただいたほうがよいと、そう判断したのでございます」

(なるほど、そういうことね)

朱華はやっと状況を理解した。

同じ守人でも、朱華の顔を知らない者ならば、なんの問題もなかったのだ。しかし彼は、朱華を対岐まで送り届けるという役に就いていた。そして確かに対岐まで行ったはずなのに、こんな場所で朱華と再会したら、不審に思わないほうがおかしい。萩はそこまで考えたうえで、彼に事情を説明したのだろう。

「手伝ってくれるの？」

朱華が改めて確認するように問いかけると、彼はごくあっさりと頷いた。

「もちろんですとも！ ぼくら守人の役目は、『姫』をお守りすることです。そして、ぼくにとって女性はみんな『姫』なのですよ!! 断る理由がありませんっ」

こぶしを握って力説する姿が、どこか微笑ましい。

「——だそうよ。よかったわね、梓」

朱華はそう声をかけながら、やっと梓を馬の上からおろしてやった。

「朱華さま……」

感謝とも謝罪ともつかない響きで名を呼んだ梓に、ひとつ笑みを返す。それから朱華は梓の手を取り、萩の手へと託した。

「萩さん、どうかお願いね。梓を守ってあげて。あたしと櫻にとっても、梓は大切な存在なの。対岐にも心配してる人がいるから、文で無事を知らせてもらえると助かるわ」

笠の下からまっすぐに目を見て告げると、萩は少し意外そうに目を丸くする。そして、

「姫は対岐で、新しい絆を築くことができたのですね」

だが朱華は、きつく結わえた髪を揺らした。

「いいえ、まだよ。それをこれから築くために——約束を、守りたいの」

決意を口にした朱華に、萩は何度も深く頷く。その髪に見える白髪も、以前より増えたような気がした。それだけ心配をかけていたのかもしれない。それだけ、櫻のことを心配しているのかもしれない。

(――でもきっと、今必要なのは謝罪じゃないんだ)

心のなかで思いなおして、朱華は奥歯を噛みしめる。

萩の瞳には、朱華を責める気持ちが少しも見えなかったから。ならばそれよりももっと、必要な言葉があるだろうと、自らを奮い立たせるように口にした。

「大丈夫よ、萩さんっ。あたしが樗を幸せにするから！ 知ってるでしょう？ 樗が幸せなら、あたしも幸せなの！」

そんな朱華の気持ちに気づいてか、梓も加勢してくる。

「あ、あの！ 微力ながら、わたしもできることはお手伝いさせていただきます……！」

おそらく梓にも、みんなに迷惑をかけているという負い目があるのだろう。

「朱華さま――道中なにも仰ってくださいませでしたけれど、ひとりで対岐へ戻るおつもりなのですよ？ でしたらわたしは、都にいるあいだ、せめて萩さんをお守りします！」

強い口調で紡がれた言葉は、実に頼もしいものだった。

「ええ、お願いね梓。萩さんの話相手になってくれるだけでもあたしは嬉しいし、樗も喜ぶと思うわ」

「はいっ、頑張ります！」

そして朱華は、萩の後ろに立っている守人にも呼びかける。

「あなたも、頼んだわよ。どうかふたりを、守ってあげてね」

「お任せくださいませっ！」

びんと背すじを伸ばして応えた彼も、少し会わないあいだに逞しくなったように見えた。

(あのときは、もっとおどおどしてたのにね)

成長している。

みんな、それぞれの速度で、前に進んでいる。

そんな実感が、朱華の背中を強く押し出す。

(あたしも、とどまってはられない！)

水蓮に振りまわされるだけの自分は、嫌だった。

交換条件の裏をかくくらいのことを、やってのけたいのだ。

(できることなら、託された梓だけじゃなくて、みんなを守りたい！)

こみあげる思いを胸に、朱華は早速行動に移す。

あらかじめ文で萩に頼んでおいた風呂敷包みを受け取ると、再び馬に跨った。

「じゃああたし、行くね」

「姫っ、もう少し休んでいかれては……？」

心配そうに朱華を見あげた萩。

だが意外にも、それをとめたのは梓だ。

「申しわけありません、萩さん。朱華さまには、急いでいただかなければならないのです！」

その言葉が一体誰のためなのか、萩がどれほど理解できたのかはわからない。

それでもすぐに、表情を明るいものに変えると、

「――そうですか。では姫、どうかお元気で」

萩は誇らしげに胸を張った。

その姿に朱華は、もう一度励まされる。

(この姫を育てたのは私だと、いつまでも誇ってもらえるように)

きっと、父上の予想以上の結果を出してみせよう――。

新たな決意を胸に、朱華は対岐への帰路に就いた。

(四)

初めて対岐(つき)へと向かったときには、絶望のような感情しか残っていなかった胸のなか。しかし今は、いくつもの約束と希望がある分、疲れていても心は軽い。

梓をおろしたおかげで馬の脚も少し速まり、帰りは三日で対岐まで辿り着くことができた。

壱奥(いつ)に攻めこまれた藩内はどうなっているだろうかと心配していたものの、出歩いている人々が少ないだけで、そう変わった様子がないことに安堵する。

(桜がもう、咲きはじめてるわね……)

そんな感傷に浸る余裕もあった——城下町に、着くまでは。

「あ……！」

天閣が見える距離まで近づいた時点で、朱華は違和感に気づいた。周辺に住民たちの姿はまったく見えないのに、ざわざわとした騒がしさがこちらまで届いていたのだ。

(もしかして——)

その理由を予想し、危険を感じた朱華は、すぐに馬をおりた。そして傍にあった柵に手綱を括りつけると、自分の足でゆっくりと対岐城に近づいてゆく。

徐々に高くなる天閣とともに見えてくるのは、引きあげられている桔橋(はねばし)の前にある人垣だ。彼らは戦笠や簡素な胴鎧を身につけており、多くの者が対岐城のほうを向いていたから、壱奥軍だということはすぐにわかった。これが城郭を守る対岐軍ならば、対岐城に背を向けているはずだからだ。

(やっぱり、籠城してる！)

朱華が見た限りでは、対岐の城兵は今目の前にいる壱奥軍よりも遥かに少ないように思えた。よって水蓮が籠城を選んだのは、正しい選択だと言えるだろう。

(籠城なら、攻めてきた相手の三分の一の兵力でも勝てるというものね)

壱師が国を治めるようになってから、二十年以上戦(いくさ)が起こっていないとはいえ、知識としてはきちんと叩きこまれていた。朱華たち壱師の娘は、そういう意味でも最初から有事に備えられた存在だった。

(それなのに、まっ先に対岐を離れてしまったあたしは——)

無責任と罵られても仕方がない。そんなことは百も承知で、朱華は対岐を出たのだ。

そしてそれを覆すために、こうして戻ってきた。

(——さあ、今からでもできることをやらなくちゃ！)

沈んでばかりもいられないと、急いで馬を置いてきた場所まで戻る。そして、萩から預かった風呂敷包みを手を取った。周囲をぐるりと見渡し、通りから陰になっている場所を探す。

対岐の城下町は、朱華が道中通ってきた他の藩とは違い、規則正しく塀で囲まれたつくりではなかった。立ち並ぶ木造平屋建ての家屋を囲んでいるのは柵で、その分視界が広くなり、とても開放感がある。建物のあいだにある広い道に、藩民たちの姿はまったく見えないが、そのわりに朱華はあちこちから視線を感じていた。きっと家のなかから外の様子を見張っているのだろう。

(待ってて、もうすぐ自由に歩けるようにしてあげる)

家屋と家屋の間隙がひときわ狭くなっている場所に入りこむと、朱華は身につけていた男性用の着物を豪快に脱ぎはじめた。そして風呂敷包みのなかから女性用の着物を取り出し、手早く身につけてゆく。その着物は、嫁入り用の花着物ほど豪華なものではないが、都色で染められた高価なものであった。

(あたしが壱師の娘だと知らしめるには、結局着物(これ)に頼るしかないんだ)

それを哀しいことだと思いつつも、朱華は受け入れていた。だからこそ自らの身分を証明するものを、きちんと用意してきたのだ。

(着るのが嫌だなんて、言えない)

後ろで髪を束ねていた紐を、解く。

(あたしは壱師の娘で、生まれたときから道が決まっています)

お気に入りの空色の扇を、ぱっと開いた。

(それでも、幸せくらいは自分の手で掴みたいから！)

仕上げに胸もとの懐刀を確かめたあと、自らの存在を偽らずに歩き出す。

家屋の陰を抜け、広い道のまんなかを通り、朱華はずんずんと壱奥軍に近づいていった。

対岐の援軍を警戒しているのだろう、城郭に背を向けていた何人かの兵士が先に朱華に気づき、壱奥軍のなかにざわめきが広がってゆく。

朱華が歩くその先を、兵士たちがよけるため、朱華は自然と壱奥軍の中心に入っていった。

そのなかで、足をとめる。震えをこらえて、下腹に力をこめた。

「わたくしは、壱師の娘・朱華！ この壱奥軍の大將は、どちらにおられますか？」

誰に語りかけるわけでもなく大声を出すと、

「——大將ならば、ここにおる」

少し離れた位置から聞こえてきたのは、年老いた男のしゃがれ声だった。

朱華はそちらの方向にすいと身体を向ける。すると目の前に、再び人垣の道ができた。

(突然対岐に攻め入ったくらいだから、父上の権力なんて意味がないかもしれないと思ってたけど……)

どうやら下っ端の兵士たちにはまだ、この威光が利くらしい。

では大將はどうだろうか、朱華は冷静に歩を進めた。水蓮の話によれば、梓と同じ金髪碧眼を持っているという話だったが——

(まあ！ 本当に金色だわ)

朱華の視線の先で、たったひとりだけ椅子に腰かけている男の髪は、高い位置にある太陽の光をこれでもかというほど反射していた。近づくとよく見える瞳の色も、間違いない。

(でも変ね。さっき聞こえた声は、もっと歳がたってそうだったのに……?)

心のなかで首を傾げながらさらに近づくと、他の兵士たちとは逆に、朱華の前に飛び出してきた影があった。

「待て！ 話ならばわしが聞こう」

大將の姿を隠すように腕を広げて立ち上がったその男は、ひょろりと背が高く、きつくつりあがった目と口の周りの髭が特徴的だった。そして、ここにいる他の誰よりも老いていた。

(さっき応えたのも、この人だわ)

おかげですぐにわかった。この軍において、実質的な権力を有しているのは誰なのか。

朱華は顔の前に構えた扇を傾け、わざと愛想のよさを見せながら、罨を張る。

「わたくしは今ちょうど、壱奥に向かう途中でした。ですが、壱奥軍が対岐城に攻め入っているという知らせを聞きつけ、こうして駆けつけてまいりました。我らの父たる壱師は、戦など望んでおりません。どうかここは刀を収めて、お引き取りくださいな。あなたがたにとっても、わたくしを壱奥藩主に会わせることのほうが、ずっと有意義なことだと思いますわ」

それが朱華の、壱奥軍を自藩へと帰すための作戦だった。

周囲の兵士たちがざわめくなか、朱華を鋭く見つめ返した老人は、左の眉だけを器用に動かして応える。

「——なぜおぬしが都上の娘というだけで、藩主に会わせねばならぬのじゃ？」

導き出したかった問いを聞けて、朱華の口角は自然とあがった。

「それはわたくしが、壱師の五十二番目の娘だからです。どうか壱奥藩主——わたくしの旦那さまに、会わせてくださいませ」

朱華がきっぱりと言い切ると、老人は大きく目を見開く。

「都上から、まだそのような連絡は来ておらぬが？」

探るような視線も、当然だ。連絡など来るはずもないのだから。

(ここで引いては駄目。疑われないようにごまかすの！)

朱華は自分を励まし、扇を掴む手に力をこめる。

「あなたがたがこうして暴挙に出たものですから、壱師も慌ててわたくしを送りこんだのですよ？ さあ、早く藩主に会わせなさい！」

朱華があえて強気に打って出ると、老人はどこか呆れたように肩をすくめた。

「会わせるのは構わないがな。藩主は見てのとおり、奏和語がわからんぞ」

そう告げたあと、朱華の視界を塞いでいた身体をよける。

(え……?)

その目に入ったのはもちろん、大将と思われていた金髪 of 男だ。他の兵士たちよりもひとときわ体格がよく、そこに座っているだけで強い存在感があった。それはなにも、髪や瞳の色のせいだけではないだろう。櫻や水蓮といった、どちらかといえば線の細い男性ばかりを見ていた朱華にとって、なんとも言えない怖さを感じる相手だった。

(そういえばこの人、さっきから全然喋ってないわね)

朱華は老人が前に立ったせいなのかと思っていたが、どうやら違うらしい。今も男は、心から困ったような顔をして朱華を見あげているだけだった。朱華の疑問は増えるばかりだ。

「なぜ彼が『藩主』だと？ 異国人を藩主にしたなど、わたくしのほうこそ壱師から聞いておりませんわ。もしそれが事実ならば、全国的にも噂になっていたことでしょうに」

朱華が探りを入れながら問いかけると、老人はどこか楽しそうに「ほほ」と笑う。

「まあ、あくまでも仮の藩主じゃからな。——挨拶が遅れたが、わしは黄柏(おうばく)。壱奥本来の藩主である眞柏(しんぱく)の兄じゃ。そしてこやつは、亀李亞(カメリア)という東国から連れてきたレオ。奏和名では、『礼を尽くす王』で『礼王』と書く。わしがつけてやった、いい名じゃろう？」

(なにがいい名よ！ 思いつき父上への反抗心が見えるじゃないのっ)

憤りを感じながらも朱華は、答えを微妙に外している老人・黄柏を見逃さなかった。

「ではなぜ、このレオとやらが仮の藩主になっているのです？ 眞柏さまは壱奥で待っておられるのですか？」

「眞柏は病気のため長期療養中じゃ。よって、藩を束ねることなどできる状態ではない。じゃが、わしは人の上に立つ器ではないのでな、以前亀李亞を訪れたときに知りあった、頼りになりそうな男を連れてきたというわけじゃよ」

黄柏はそこまで答えると、にやりと唇の端をあげて続ける。

「それに、おぬしとてレオが藩主であったほうがよいのでは？ 六十過ぎの藩主に嫁ぐよりも、二十歳の藩主に嫁いだほうが先があるじゃろうて」

「な……っ」

さすがの朱華も、その言いようには言葉を失った。

(そんな理由で藩主を決めたりなんかしないわよ！)

藩主としてなによりも大事なものは、藩民にどれだけ慕われているかということなのだ。それは決して、壱

師やその娘たちの幸せのためではなく、すべては藩民の幸せのため――。

その思想を全否定されたような気がして、怒りで震える朱華の手を、乱暴に掴んだのは黄柏だ。

「な、なあにっ!？」

「こちらへ来い」

意外なほど強い力で引っ張られ、兵士たちのあいだをすり抜けた朱華は、水堀のすぐ近くまで連れていかれる。そこから対岐城を見あげたら、正面に高い天閣の窓が見えた。

(あ……)

その場所でたった一度だけ、櫂とふたりきりで過ごした甘い時間を思い出し、手とは違う意味で胸も震える。

(戻りたい)

思わずそう願った瞬間に、繋がれた手の先で黄柏が、天閣に向かって大きく叫んだ。

「対岐藩主に告ぐ！ おとなしく対岐城を明け渡せ！ それが都上の意思である！ なにせ我々は、都上に認められた！ その証しとして、都上は我々に五十二番目の姫君である朱華姫を与えてくださったのじゃ!!」

(ああ――)

黄柏のほうが、一枚上手(うわて)であったのかもしれない。

朱華は強く掴まれた手に痛みを感じながら、下唇を噛みしめた。

(五)

その後、対岐(つき)から見て壱奥(いつ)とは反対の方角にある第五十藩・日隅(ひずみ)の援軍が駆けつけ、壱奥軍は一度撤退することとなった。

(籠城戦において、いちばん重要なのは援軍の有無、だったわね)

朱華が直接壱師に向けた文(ふみ)を書き、またそれを、他の誰よりも早く鷹雄を使って届けていたため、この程度の時間差で済んだのだ。当然対岐の藩主たる水蓮自身も、周囲の藩主に対し文を送っていたはずだが、壱奥との距離が近ければ近いほど、のちの報復を恐れて簡単には出兵できない。ある意味において、平和が長く続きすぎたゆえの弊害だった。

(それが悪いことだとは、全然思わないけど)

日頃からもっと他の藩と仲良く――それこそ家族のように接していたら、互いに自然と助けあえるようになるだろう。今現在は、壱師の『娘を各藩に送りこむ』政策により、『壱師と各藩』あるいは『都と各藩』の関係は以前よりずっと密になってきている。だが、壱師がもともと目指していた『家族になる』ということは、実際にはそれだけの話ではないのかもしれない。

(もしかして、それぞれの藩同士も家族のようになればいいと、そういうことなの……?)

壱奥軍が用意してくれた馬車に揺られながら、朱華はあれこれと思考を巡らせていた。

――そう、朱華は今、壱奥へと向かっているのだ。それは、朱華が五十二番目の姫君として壱奥軍に潜りこんだため、壱奥城まで同行しなければ不審に思われてしまうからだった。それに、すぐに逃げ出して「やはり対岐の者だったのか」とばれたり疑われたりするの、再び対岐を襲わせるきっかけをつくってしまうという意味でも、逆効果に思えた。

(そもそも、今回どうして戦を仕掛けられたのかも、まだわからないのよね)

だからこそ朱華は、どうせ壱奥に行くならその辺も探っておようと、心に決めていた。

(本来の藩主である眞柏(しんぱく)さんが病気だなんて、本当なのかしら?)

そう疑いたくなってしまうほど、どう見ても黄柏(おうぱく)の行動は怪しかった。日隅の援軍が駆けつけたと聞いたとき、「やっと来たか」とまるで待っていたかのようなことを呟っていたのだ。それに、わざわざ奏和語のわからないレオを連れ帰ってきたというのも、やはり不自然だろう。黄柏自身は亀李亞語がわかるらしいからいいが、周囲の者たちは言葉が通じずに苦労するだけだ。確かに奏和人よりも身体が大きく頑丈であるようだったが、それだけでは藩民たちを率いる藩主の代わりなど務まらないのではないだろうか。

(レオも黄柏に利用されてるだけ? 直接話を聞いてみたいけど……ああ、ここに梓がいたらきっと通訳してもらえるのにつ)

梓もレオと同じ、亀李亞の出身であることを思い出し、朱華は歯がゆい思いをする。

(こうなったらもう、こちらも黄柏を利用してレオと話すしかないわ!)

もともと壱奥に長居する気はなかったため、作戦を決めたあとの朱華の行動は早かった。

壱奥城は対岐城と異なり、黒い壁が特徴的な天閣を有していた。櫓の数も対岐城より遥かに多く、至るところにあるため見渡した視界は非常に悪い。おかげで朱華は、内角(うちかく)まで連れてこられたあと、レオと黄柏の姿を探すのに苦労した。

(もうっ、黄柏ったらやっぱりあたしのことを軽視してるでしょ!)

御殿にすら通さず外に放置するなど、都の姫にすることではない。自分が黄柏を疑っているように、黄柏もまた自分を疑っているのかもしれないと、朱華は感じた。だからこそ、急がねばならないと。

(――水蓮たちもきっと、驚いただろうな)

梓を都まで送り届けたあと、朱華が対岐に戻ってくるころまでは、予想できていたかもしれない。だが、壱奥側に潜りこむ無茶をするなど、わからなかったのではないだろうか。朱華自身も、それは水蓮たちに悟られないようにしてやろうと思っていた。危険すぎることだと、きつとめられると、わかっていたからだ。

(あたしが裏切ったと思った？ それとも、ちゃんと作戦だって気づいてくれたかなあ)

今の朱華には、それを予想するための材料すらない。だが、情報を持って帰ることができればすべては解決するだろう。そう信じて、敵陣内で歩を進める。

通りすがりの兵士たちに、黄柏たちの居場所を訊くと同時に、なぜ対岐に攻め入ったのかを率直に訊いてみた。するとなんと、兵士たちは口を揃えてこう答えたのだ。

「さあ……わかりません」

レオがそう言ったから、黄柏がそれを許したから、仕方なくついていったという者がほとんどだった。対岐を恨んでいる者など当然おらず、逆に対岐からの報復を恐れているくらいだ。

(どうりで、対岐藩内があまり荒らされなかったはずだわ)

やる気満々だったのは上のふたりだけであり、兵士たちは最初から乗り気でなかったため、なるべく手を出さないようにしていたのだろう。

「眞柏さまであれば、なにかを行うときには必ず理由を説明して下さったのですが……」

朱華にそのような不満を訴えてくる兵士もいたため、眞柏のことについても訊いてみたが、『眞柏が病氣療養中である』という認識はみんな一致していた。ここ何年も、城郭に姿を見せていないらしいのだ。

(それだけが理由じゃ、全然弱いんだけどね)

もしかしたら、眞柏はもう死んで――殺されているのかもしれない。

朱華は直感的にそう思った。実は話を訊いた兵士たちが自ら、黄柏・眞柏兄弟の仲の悪さや、黄柏が昔から抱いていた眞柏に対する不満なども、教えてくれたのだ。それとて、朱華が壱師の娘だからというだけでなく、誰かになんとかしてほしいという兵士たちの気持ちがこもっているからではないだろうか。

朱華がそんな答えに辿り着いた頃、やっとふたりの姿を見つけたのは、黄柏御殿の一室だ。対岐城の政務所のように狭い空間で、ひとつの巻物を広げふたりで眺めているようだった。

朱華が「失礼いたしますわ」と部屋のなかに入っていくと、黄柏はぎょっとした表情で顔をあげる。

それを目にした朱華は、咄嗟に頭をさげた。

「ごめんなさいね？ どうしてもレオさまとお話したいことがありまして、御殿のなかに入れていただきましたの」

城兵に姿を見られてもなんら咎められなかったが、黄柏は不満だったらしい。「ふん」と鼻を鳴らすと、嫌味な口調で告げてくる。

「【都の権力をみだりに誇示してはならない】という言葉は、ただの飾りか？」

「あら、ただ御殿に立ち入っただけでそのように仰られるとは……なにかよほど大切なものを、この御殿のなかにしまいこんでおられるのですね？」

朱華とて確信があったわけではないがそう告げると、黄柏は睨みを利かせただけでなにも答えなかった。どうやら凶星らしい。

(でも、黄柏を言葉で押しても多分無駄だわ。攻めるならやっぱりレオよ！)

黄柏が口を閉ざしているうちに、朱華はその横に座っているレオに近づいてゆく。

梓のおかげで、その明るい髪や瞳の色に見慣れていたとはいえ、身体の大きさが全然違うこともあり、やはり怖さは拭えない。

朱華が遠慮がちに相手の顔を見やると、相変わらず不思議そうな顔をつくっているレオと目が合った。「レオさま！ あなたにはいろいろとお訊きしたいことがあるのです。さあ黄柏さま、通訳をお願いいたしますっ」

相手に乗ってもらえるように、朱華は黄柏にも『さま』をつけて呼びかける。

すると黄柏はまんざらでもないように胸を張ると、広げていた巻物を片づけはじめた。

「――仕方がないな。では、なにを訊きたいのじゃ？」

「その前にまず、レオさまにわたくしの立場をご説明いただけますか？ レオさまはいつも、訝しげな表情をわたくしに向けてくるのです」

きつとろくに説明もしていないのだろうと予想した朱華は、当たっていたようだ。

黄柏は小さく舌打ちをしたあと、レオの耳もとに話しかける。朱華まで漏れ聞こえてきた言葉は、やはり異国の響きをしていた。ただ自分の名だけは、なんとか聞き取れた。

(ちゃんと正確に説明してくれるといいんだけど……)

朱華がじっと待っていると、その視線の先でレオの表情がぱあっと明るくなる。

そして次の瞬間には、

「アクオス・エアモ・アフ・エロ・オン・エモヤナフ・アッタドゥ・アク！」

「きゃあっ!？」

突然レオに抱きつかれた朱華は、あまりに驚いて取り繕うことさえ忘れてしまった。

「は、放して……！ 黄柏っ、一体彼になにを言ったの!？」

朱華は必死にもがくが、レオの腕は力強く、押し返そうとしてもまったく動かない。

「ほほ。嘘は言っておらん。どうやらレオも、おぬしのことが気になっておったようじゃぞ」

そう告げるなりすっと立ちあがると、黄柏は襖のほうに向かって歩いていく。

「言葉ではなく、身体で語りあったらどうじゃ？ もっとよいものが見えてくるじゃろうて」

「ふざけないで！ きちんと通訳しなさいっ。レオを連れてきたあなたには、その責任があるでしょう？

――って、こら、どこを触ってるのよっ！」

胸もとに触れられて、朱華は慌てて襟を合わせる。自らの身を守るための懐刀がそこに入っていたが、今武器を隠し持っているとはばれたら問題になってしまいそうだった。朱華にとっては、自分の身の危険よりも、そちらのほうが恐ろしい。

(もし牢なんか繋がれてしまったら、対岐に戻るのが難しくなってしまうもの)

自分の役目は真実を見つけるだけでなく、それを伝えることでもあり、無事に戻ることでもある。そして心配を、杞憂に変えるのだ。朱華はそのことを、きちんとわかっていた。

これ以上触れないでと訴えるように、朱華がレオを強く睨みつけると、

「――オウバク、エロ・オム・ハネズ・オトゥ・アウィアク・イアティス」

不意に真剣な表情を見せたレオが、黄柏になにかを申し出た。

それを聞いた黄柏は、「仕方がないな」と呟き、こちら側に戻ってくる。そして傍にあった棚から二冊の分厚い書物を取り出すと、一冊ずつ朱華とレオに差し出した。

「わしとて忙しいのじゃ。おぬしらの戯れにつきあってやる暇はない。これを使って勝手に会話している」

「これは……？」

「それぞれ、奏和語から亀李亞語、亀李亞語から奏和語に対応する意味が載っておる語典じゃ。わしがこつこつと書きためたものじゃから、すべてを網羅しておるわけではないがの。会話の足しにはなるじゃろう」

(語典――そっか、そういう手もあるんだ！)

異国語など、てっきり口頭で教わるしかないと思いこんでいた朱華は、その手法に驚きを隠せない。そ

して黄柏の意外な優しさにも。

「ありがとうございます！ お借りいたしますっ」

今さら遅いことだとはわかっていたが、丁寧な口調と仕草で礼を言った。――といっても、まだレオの腕が身体に絡みついているため、満足に頭をさげることはできなかったのだが。

黄柏は最後にもう一度鼻を鳴らすと、今度こそ部屋を出ていった。

レオとふたりきりで残された朱華は、すぐに預かった語典を開きはじめる。

(えっと、こっちが奏和語から亀李亞語に訳してある語典ね)

ぱらぱらとめくってみると、ひとつの項目につき奏和語と亀李亞語の両方で書かれているようだった。そして、言葉はどうやら奏和語読みでの『化(あだし)の唄』の順に載っているらしい。そこで朱華は後ろのほうから探していくと、ついに目的の言葉を見つけた。

「あった！ これ……『放す(ウサナフ)』！」

朱華が大きく叫んだ瞬間、強く身体を押さえていたレオの腕が弱まる。その隙に抜け出した朱華は、語典を胸もとに抱きしめたまま、レオから少し離れた。

するとレオは、降参するように両手を挙げて苦笑する。朱華が嫌がっているということが、やっと伝わったようだった。

――それからふたりの、長くたどたどしい会話が始まった。

(六)

一日かけて試行錯誤した結果、話したい言葉を語典で探すよりも、相手が話した言葉を語典で探すほうが、互いに楽であることがわかった。ついでに文法めいたものも、なんとなくわかるからだ。そこで最終的には、奏亀語典をレオが持ち、亀奏語典を朱華が持つことにした。

(レオはやっぱり、自分がおかれてる状況をよくわかってないみたいだわ)

黄柏(おうばく)を信じ、黄柏の言うことにはすべて従っているようだった。対岐に攻めこんだことも、なにをしに對岐に行ったのかすら理解していないありさまなのだ。

(そのせいなのか、笑顔が妙にあどけないのよねえ)

背が高く体つきもがっしりとしているため、見た目にはかなり男らしい。しかし、そんな印象とは裏腹に、笑うとどこかかわいらしかった。これがもし悪人だったなら、朱華とて迷わずに突き放していたところだが、そう無下にもできない人懐っこさがあるのだ。そして黄柏も、おそらくレオのそういう部分を利用しているのだろう。

「――黄柏さま。レオさまのご家族を見つけるあては、本当にあるのでしょうか？」

朱華がそう尋ねたのは、さらに二日が経った頃。レオとの会話から、黄柏に切りこんでいくための手札を得た朱華は、早速それを使うことにした。壺奥での長居は無用どころか、危険が大きい。そのため、確認作業もなるべく急がねばならなかったのだ。

板張りの廊下を歩いていた黄柏は、かけられた声に足をとめて振り返る。

「ほう、この三日間でそこまで訊き出したか。なかなか根性があるではないか」

細めた目を、忌々しげに朱華へと向けた。

(根性があるのは、あたしだけじゃないけどね！)

なぜかはわからないが、レオ自身も積極的に協力してくれたおかげで、朱華はレオが黄柏とともに奏和の国へとやってきた目的を知ることができたのだ。

(まさか、幼い頃に生き別れた家族を捜すため、だったなんて)

ところどころわからない単語もあったが、黄柏がそれに協力してくれるというから従っているというようなことを、レオは話していた。

(それって、梓のことなのかな?)

すぐに思いついた朱華は、しかしまだ、それをレオに言えていない。教えるのは、梓自身に確認を取ってからのほうがいだろうと思っていた。ぬか喜びなどさせたくないからだ。

(それに、『梓』って思いっきり奏和名だし、言ってもきっとわからないわ)

また、ひとつ気になることもあった。レオの家族捜しを手伝っているのであろう黄柏が、對岐にいる梓の存在を知っていたのかという点だ。梓が本当に家族なのかは定かではないにしても、金髪碧眼を持った娘がいるとわかっていたならば、普通に会いにきたとしてもおかしくはなかった。

(もしかして、それを餌にレオを動かして、攻めさせたの?)

壺奥(いつ)軍を動かすには、レオの力こそが必要なのだということに、朱華は気づいていた。なにせ壺奥の兵士たちは、黄柏よりもレオを恐れて従っているように見えたからだ。だが、そのレオの言葉は、黄柏が訳さなければみんなに伝わらず、黄柏以外の誰もレオの本心を知ることにはできない。簡単に言ってしまえば、黄柏はレオの言葉を捏造し放題なのだった。

(逆に言えば、レオさえ封じてしまえば、黄柏になすすべはないのよね。それなら――)

レオを亀李亞に帰すか。あるいは、みんながレオの言葉を理解すべく努力するか。選べるのは、そのど

ちらかだと思えた。

朱華はにっこりと笑みを浮かべ、黄柏の傍に近寄っていく。

「あなたはまだお疑いかもしれませんが、わたくしは本当に壱師の娘ですから。こう見えても、勉強は結構得意ですよ。——そう、人の内面を見ることも」

最後の言葉はただの脅しだったのだが、黄柏には効果覲面だったらしい。

「……少々、甘く見すぎたようじゃな」

黄柏は朱華が腕に抱いていた語典を素早く奪い取ると、朱華の身体を強く後ろに押しやる。

「あ……っ！」

倒れそうになった朱華は、咄嗟に片方の足を後ろに引こうとしたが、着物の裾が邪魔でうまくできなかった。その場にすてんと尻もちをつく、「ハネズ！」と声をあげたレオが、背後から走り寄ってくる。

黄柏はそれを待たずに、冷やかな目で朱華を見おろし、口を開いた。

「余計なことは言わぬが花じゃ、朱華姫。おぬしがレオのものとなれば、壱奥から逃げ出すことはもはや不可能じゃろう？ わしならばいつでもレオに襲わせることができること、ゆめゆめ忘れるな」

そしてくるりと背中を向けると、足早に去ってゆく。

(黄柏……なにか気づいてる!?)

それでもこうして朱華を自由にさせているのは、絶対的な自信があるからなのだろうか？

今さらに強い恐怖を感じて、朱華の背中は凍った。板についた手の冷たさなど、比ではない。

「ハネズ……？ アココドウ・アテマティ・アコン？」

なかなか立ちあがらない朱華を心配したのか、レオがそっとその手を取る。

だが朱華は、うまく応えることができなかった。

「——ごめんなさい、レオ。早く真実を見つけたいと急ぎすぎて、黄柏に語典を取られちゃった。もう、あなたの言葉を調べられないわ……」

そんなつもりもないのに、涙が滲んでくる。身体のなかの熱が、すべてそこから放出されるかのように。

「あたしのしたことは、無駄だったのかな？ 壱奥に来て、やっぱり黄柏が怪しいと思ってるのに、いいように利用されてるあなたを助けることもできない。混乱してるの……これから一体どうすればいいのか」

自分の身の安全をいちばんに考えるならば、今すぐにも壱奥を出たほうがいい。朱華にも、それくらいのはわかる。しかし、壱奥をなにも変えないまま出てしまったのでは、また同じことが起こってしまう可能性があった。

(せめてレオの存在を、どうかしなくては——)

わかっているのにうまくできないもどかしさに、朱華は涙を拭いもせずレオを見あげた。

するとレオは不意に、自分が持っていた語典を朱華の胸もとに押しつけてくる。そして、

「アヌカン……エロク・オウ・エアモ・イン・ウラユエ」

少し淋しそうな声音で告げると、朱華の目もとを指先で拭った。

「レオ……？」

この奏亀語典があれば、少なくともレオは、周囲の人々がなにを言っているのか理解できるのだ。それは相手が朱華でなくても同じこと。逆に、それを朱華が持っていたとしても、レオひとりの言葉しか読み解けない。どちらが語典を持つべきか、誰が見ても明らかな問題だった。

(でもレオは、あたしに渡してくれた……！)

レオ自身不安でないわけがないのに、朱華のために手渡した。

それは誠意だと、朱華は思う。同時に、見た目で怖がるのは愚かなことだと、改めて痛感した。

レオの手を借りて立ちあがりながら、心のなかで宣言する。

(――うん、あたし、レオのこと、もう怖くないよ。いくら黄柏に命令されたって、今のレオがあたしを襲うとは思えないから！)

だからこそレオのためにも、この状況をなんとかしなければならぬ。いちばんいいのはやはり、レオが亀李亞に帰ることだ。しかし、家族がまだ見つかっていない以上、それはレオ自身が納得しないだろう。もしかしたら黄柏も、レオの家族がどこにいるかなどまったく知らないのかもしれないが、奏和国内にはいないなど誰にも言い切ることはできないのだ。

(それならあとは、みんなが亀李亞語を理解できるようになるしかないっ)

現状では、レオの言葉はすべて黄柏が訳してみんなに伝えているようだった。だがそんな方法で、レオの本心など伝わるはずもない。黄柏が自分に都合のいいように言い換えてしまう可能性があるからだ。実際黄柏は、そうやってみんなにレオを恐れさせているのだろう。

朱華は、再び腕のなかに戻ってきたずっしりとした重みに目を落とす。

(そう――この語典の内容を、みんなで共有できれば)

全員まではいかなくとも、亀李亞語を少しでも理解できる人数が増えれば、状況は変わるはずだ。

問題は、それをどうやってやるかだが――

「――あ！ 朱華さまっ、こちらにおられましたか」

朱華が思考を巡らせはじめた頃、廊下の奥からひとりの城兵が駆け寄ってくる。

「わたくしがどうかしました？」

涙の痕を咄嗟に扇で隠しながら尋ねると、傍までやってきた城兵は素早く片膝をついた。

「はい！ 都からの使者だとかたが、朱華さまにお会いしたいとおいでになっているのです。黄柏さまは怪しがって、追い払うようにと仰ったのですが、その、本物かもしれませんから、やはり朱華さまにもご確認いただきたいと思ひまして……」

どうやら城兵たちが機転を利かせ、引きとめてくれたようだ。

(やっぱりみんな、黄柏をそこまで信頼しているわけではないのね)

「わかりました、すぐに向かいます。大広間でよろしいのです？」

「は、はい、こちらです！」

城兵の先導に従って、朱華と、そしてなぜかレオもあとに続いた。

(それにしても、都からの使いだなんて、一体誰かしら？)

もしそれが壱師の手の者であり、本物の五十二番目の姫君に関する文(ふみ)を携えていたならば――と一瞬考えそうになったが、朱華はすぐに自ら否定する。

(本当にそんな文を持つてるなら、あたしじゃなくて黄柏に会おうとするはずだわ)

そもそも、朱華に会うために壱奥に来るという行為自体が、最初からおかしいのだ。今朱華が壱奥にいることを知る者は、実のところかなり少ないはず。全国をまわっている壱師の子息たちは、当然気づいて壱師に報告をしているかもしれないが、それにしても対応が早すぎるだろう。

襖の向こうにいる相手を、朱華は少しも予想できていなかった。

そのため、その後ろ姿が見えた瞬間に、大きく息を呑む羽目になる。

「……っ!？」

「――あ！ 姫さまっ」

振り返ってにっこりと微笑んだのは、対岐城にいるはずの櫓だった。

(一)

「水蓮さま！ 吉報ですっ。西側の監視を任せていた偵察兵から、日隅(ひずみ)の援軍がこちらに向かって  
いるとの連絡がありました!!」

そんな知らせが届いたのは、水蓮がやっと覚悟を決めた頃だった。

情報収集のため下に戻っていた楊(やなぎ)が、階段を駆けあがってくる音がする。

「なにっ、それはまことか！」

水蓮は窓の傍から離れると、思わず階段に駆け寄った。

蓋は外したままになっていたため、楊は今度こそいちばん上まであがってくると、いつもの穏やかさとは違う種類の表情で口を開く。

「まことでございます！ これで壱奥(いつ)軍も撤退するでしょう」

籠城戦においては、援軍のあるなしが勝敗を分けるといっても過言ではない。楊もそれを知っていたからこそ、嬉しそうに告げたのだろう。

だが、

「壱奥軍が撤退？ それなら、姫さまは……」

水蓮の背後から聞こえた声音は、諸手を挙げて喜べない現実を、水蓮に思い出させた。

(そうか……)

理由はどうあれ、朱華が五十二番目の姫君として壱奥軍に身を置いている以上、壱奥についてゆくしかない。朱華が最初からそれを想定していたのかどうかはわからないが――たったひとりで敵陣に潜りこんだだけでなく、さらに深く入りこむなどと、並大抵の勇気ではとても叶わないことだ。

(もしや朱華姫、向こうの内情を探るつもりなのか?)

自ら飛びこんだにしろ、壱師に命じられたにしろ、その行動力には心から敬服する。

そして見習いたいと、水蓮は思った。

「――安心するがいい、櫂。こちらもすぐに手を打つぞ」

「え……？」

振り返ってきっぱりと告げた水蓮に、櫂は不思議そうな顔を向けた。

「し、しかし、手を打つといっても、下手に刺激をするのは……」

また似たようなことが起こるかもしれないと、そう言いたいのだろう。

水蓮は軽く頷いて、

「ああ、直接壱奥軍に手を出すわけではない。――都上に、文(ふみ)を送る」

「ええっ？」

大袈裟に跳ねた櫂に苦笑しながらも、先を続ける。

「私も、朱華姫を信じてみることにしたのだ。現状ではまだ、朱華姫がどのような事情で壱奥軍に行ったのかはわからぬ。だが、その行動はすべて対岐のためなのだと、信じるぞ！ 朱華姫は梓が信頼を寄せた相手であるし、なにより、こちらにはおぬしという人質もいるからな」

「す、水蓮さま……っ？」

思いきり戸惑った様子櫂が、なおおかしい。

水蓮は散々もったいぶったあと、やっと告げるべき言葉を紡ぎ出す。

「よいか、櫂。朱華姫が五十二番目の姫君となった理由は、今のところふたつ考えられる。ひとつには、都上の命令。もうひとつは、朱華姫が自らそう名乗った場合だ」

「自ら!? ーあ、そうか！ 彼らがどうして対岐に攻めこんだのかを、調べようとしたのかもかもしれませんね」

「そう、私も同じことを考えた。そして気づいたのだ。先ほどおぬしが言っていたことは、間違いではなかったと」

「僕が言っていたこと、ですか……？」

「『梓は必ず無事だ』と、言っていたらどう？ もし壹奥軍へくだったのが都上の命令であれば、一度都まで行っていることになるのだ、当然梓をおいてくるはずだ。逆に、朱華姫自身の意思で行ったのだとしても、なおさらそんな危険な場所に梓を連れていくわけがない。よって、どちらにしても梓は無事ということになる」

(そう、梓が朱華姫を気に入っていたのと同じくらい、朱華姫も梓を気に入っているようだったからな)

そもそも、朱華が都へ戻ることを了承したのも、振り返ってみれば「梓を守りたい」という気持ちがあったゆえなのだ。そうでなければ、水蓮に頼まれたところで受けるはずがなかった。

それに気づいた水蓮は、だからこそだいが落ちつきを取り戻せていた。すうと息を吸い、口にしづらい言葉を続ける。

「ーだがな、樗。朱華姫はそうもいかないだろう。都上の命令ならともかく、もしも自分の意思で壹奥軍に行き五十二番目の姫君を名乗っているのだとしたら、都上から『また教えに背いている』と思われてしまう可能性もあるのだ」

「確かに……」

しゅんと沈みこんだ樗を、すぐに水蓮の言葉がすくいあげる。

「だからこそ都上に、きちんと事情を説明する文を送ろう。恐れ多いことではあるが、いらぬ誤解をさけるためにも必要だ」

「で、ですがっ、それをやっしまえば、壹師さまの水蓮さまに対する心証も悪くなってしまうのでは……？」

先に交換条件を仕掛けたのは水蓮なのだ、当然そうなるわかっていた。だが水蓮にも、譲れないものがある。先に種を蒔いた責任は、取らなくてはならないのだ。

「私とて、これ以上朱華姫の立場を悪くしたくないのだ。私は藩主でなくなっても問題なく生きていけるが、生まれたときから都上の娘であった朱華姫は、そうもいかないだろう？」

「水蓮さま……！」

水蓮の朱華を思いやった言葉に、樗は感激した様子でその場に膝を折る。

「ありがとうございますっ。水蓮さまがそこまで姫さまのことを考えてくださるのなら、僕は僕で精一杯対岐を守らせていただきますよ！ 槍しか扱えない頼りない守人で恐縮ですがっ」

最後には恥ずかしそうに頭を掻いた。

「ああ、期待している」

(私も朱華姫との約束を叶えるために、必ずおぬしを守ろう)

水蓮は心のなかで続けてから、視線を傍で控えていた楊のほうに振った。

「ーそういえば楊。先ほど壹奥軍の者が叫んでいたという言葉は、みな聞いていたのか？」

「先ほどの……と言いますと、朱華さまのことでございますか？」

「ああ、そうだ」

その瞬間に曇った楊の表情を、水蓮は見逃さなかった。

「朱華さまは寝返ったのかと。最初からそのつもりで、対岐城に潜りこんでいたのではないかと、噂している者もいるのは事実です」

楊はそう前置きをしたあと、すぐに言葉を繋ぐ。

「しかし、朱華さまは間違いなく都上の姫君にございます。それゆえに、その行動はすべて対岐のためなのだ、おふたりと同じように信じている者もいるのです。もしこれが梓さんでしたら、疑われるばかりで本当におつらかったでしょう」

それは明らかに、水蓮の選択を庇うための言葉だった。

(櫂だけでなく、守人頭にまで諭されてしまうとはな)

今の自分がどれほど頼りない顔をしているのか、わかるというものだ。

対岐の藩主として、戦のなかでそんな表情をしてはいけない。

そんな藩主には、誰もついてこない。

(都上のようにはなれなくとも、せめて手の届く範囲のものは守りたい……！)

そのためにも水蓮は、自分の選択と、そして朱華の選択を信じなければならなかった。

ぱっと右手を広げ、楊に指示を出す。

「外にいる壱奥軍に気づかれぬよう、日隅軍をもてなす用意を！ 私はすぐに都上宛ての文を書く。朱華姫は決して教えを破ってなどいないと！」

「はっ、かしこまりました！」

水蓮の力強い言葉を聞き、安心したのだろう。楊はいつもどおりの穏やかな表情で戻っていった。

それを見送る水蓮の背中に、櫂が声をかける。

「水蓮さま！ それなら僕は、なにをしたらいいでしょうか？」

水蓮はおもむろに振り返ると、高らかに指示を出した。まずは櫂の心を、守るために。

「おぬしは堂々と胸を張っている。朱華姫と同じ、都から来た者だと知られている分、おぬしに対する周囲の視線も変わるだろうが、決して屈するな！」

そんな水蓮の鋭い眼光を受けとめて、櫂は深く頷く。

「わかりました。僕らは決して対岐の不利になるようなことはしていないと、態度で証明してみせます！」

日隅(ひずみ)の援軍がやってくる。

そのことは、対岐(つき)城の外で攻撃の機会を窺っていた壱奥(いつ)軍も、すぐに察知したようだ。援軍の姿が見える前に撤退の準備を始めると、刀を交えることもなく去っていった。そのあまりにも潔い姿には、兵士だけでなく城下町に住む人々からも疑問の声があがったほどだ。

(壱奥軍は、一体なんのために戦を仕掛けてきた?)

水蓮御殿の政務所で壱師への文(ふみ)をしたためながら、水蓮はその理由を考えつづけていた。

壱奥との藩境から対岐城に至るまでの道中でも、被害はほとんど出ていなかったゆえに、不思議で仕方がないのだ。おそらく朱華も、対岐城に戻る途中でその問いに辿り着き、真実を探ろうと壱奥軍に飛びこんだのだろう。その度胸には、本当に恐れ入るばかりだ。

ほどなくして日隅軍到着の知らせを受けると、対岐城前の桔橋(はねばし)は一週間ぶりにおろされた。報復を恐れずに駆けつけてくれた日隅軍を歓迎するため、水蓮と樗も久々にその桔橋を渡る。

(壱奥軍も、攻める気がまったくなかったわけではなさそうなのだがな)

水蓮がそう感じたのは、水堀の上に木製の梯子や板が浮かんでいたからだ。水堀の底に立てかけて石垣をのぼろうとしたが、高さが足りなかったのだろう。それに、水堀の底にはつるの長い植物が植えてあり、そう簡単に動きまわれないようになっていた。籠城をしている側の水蓮たちに余裕があったのは、よほどのことがない限り城郭内に攻めこまれる危険はないと、わかっていたからなのだ。

(だからこそ私は、城郭内で広まってしまったら取り返しのつかない『噂』のほうを恐れた)

確実に梓を守ることのできる道を――。

「日隅のみなさん、よくぞ駆けつけてくださった」

誰よりも先に桔橋を渡りきった水蓮は、日隅軍の面々を右から左に見やったあと、深々と頭をさげた。日隅軍のおかげで早々に片がついたのだ、最大限の礼を伝えたかった。

そんな水蓮の迷いない行動に、日隅軍のなかからもどよめきが起こる。

(やはり日隅でも、藩主は簡単に頭をさげるものではないと思われているのだろうか?)

まさにそのような藩主だった父のことを思い出し、水蓮は心のなかで苦笑した。

すると、日隅軍の先頭にいるひとりだけ戦羽織を来た男が、一歩前に出てくる。まだ年若い男だったが、かなりの大柄で、肌の出ている場所にはたくさんの傷が見て取れた。日隅では日頃から厳しい訓練が行われているのかもしれない。

「水蓮どの、ですか？ 私はこの軍の大將を任されている山菅(やますげ)です。どうかそんなにかしこまらないでください。なにしろ、明日は我が身ですからな。もしも日隅が襲われたときは、どうか助太刀を頼みますよ」

歯を見せ屈託なく笑う男・山菅は、そこまで言いおえてからぼんと手を叩いた。

「そうだ、我々のことよりも、都からの知らせのほうが大事でしょう」

そうして後ろを振り返ると、「先ほどの飛脚はどうした？」と傍の兵士たちに振る。

「ここですっ、ここにおりまーす！」

その問いに答えてぴょんぴょんと跳ねたのは、飛脚本人のようだった。明らかに兵士たちとは違う格好をしていたが、大人数のなかにまぎれこんでしまっていたらしい。

鎧と鎧のあいだを掻き分けるようにして水蓮の前まで来ると、飛脚の男は胸に抱いていた小さな箱から一通の文を取り出した。頭を低くして、うやうやしく水蓮に差し出す。

「都の三条の一に住まわれている、萩さまより預かってまいりました」

「母上からっ？」

声をあげたのは、水蓮の後ろに控えていた櫂だ。

おかげで、文を受け取る水蓮の手はかすかに震えた。

(これにはなにが書いてある？)

考えるまでもない。

「失礼、先に文を読ませていただきます」

山菅に一言断ってから、水蓮はその折りたたまれた文を素早く開いた。

『あなたさまの大切なものは、確かにお預かりいたしました。どうかご心配なされませんよう』

短い文章ではあったが、一文字一文字丁寧に書かれているのがわかる。内容がぼかされているのは、万が一誰かに一たとえば壱師に見られても大丈夫なようにするためなのだろう。

(やはり、無事だったか……！)

心から安堵し、ゆっくりと息を吐き出した水蓮は、文をそのまま櫂に手渡した。そして自分は胸もとに隠していた別の文を取り出すと、飛脚の男に尋ねる。

「おぬしはこれから都に戻るのか？」

「ええ、その予定です」

「ではちょうどいい。この文を、都上にお渡し願いたい」

そこでまた、辺りの空気が揺れた。秘密裏に壱師と特別な繋がりを持つようとする者はいるかもしれないが、堂々と人前で文を託す藩主などいないからだ。

(だが都上にはむしろ、このほうがいい)

折に触れ櫂から壱師のことを訊き出していた水蓮は、そう考えていた。壱師は醜い争いを嫌うゆえに、誰にでも平等であろうとする。だからこそ、陰で文を送るよりも、目に見える形で送ったほうが有効なのではないかと。

(これでは都上も無視はできまい)

「頼んだぞ」

水蓮が念を押すようにつけ加えると、受け取った飛脚の男はぴんと胸を張った。

「か、かしこまりました！ 必ずお届けいたしますっ。では、わたくしはこれで！」

よほど仕事熱心なのか、すぐに駆け出していく。その速さは驚くべきもので、背中を見送った誰もが感心の声をあげていた。

「すごいな～」

「さすが都の飛脚だ」

水蓮も、その脚に拍手を送るように手を叩く。

すると日隅軍の兵士たちの顔が、いっせいに水蓮のほうを向いた。

水蓮は多くの視線を受けとめてから、ゆっくりと口を開く。

「さて、お待たせした。日隅のみなさん、どうぞ対岐城のなかで休んでいってください。今はちょうど城郭内の桜が見頃なのだ」

次にあがったのは、戦からはほど遠い歓声だった。

(三)

数日前まで籠城戦が行われていたなど、まるで嘘のようだ。

水蓮はそんなことを考えながら、自らの寝所でひとり、萩から送られた文(ふみ)を眺めていた。  
(まるで朱華姫が対岐(つき)にやってくる前に、戻ったようだな)

壺奥(いつ)の動向はまだ気になるものの、水蓮の周辺は平穩そのもので、そんなことさえ思う。  
だが、その頃とは明らかに違うのは――

「あれ？ 水蓮さま、またこんな時間まで起きていらっしゃるんですか？」

半分呆れを含んだ櫂の音が、襖の向こうから聞こえてきた。

(そう、櫂がこうしてここにいる以上、すべてはまこと)

そしてまだ、なにも終わってはいないのだ。

「おぬしのほうこそ、いつも遅いではないか。入れ」

「失礼いたします」

いつものように丁寧な所作で襖を開け、櫂が入ってくる。

(――なんだ？)

しかしその表情がいつもとは違うのを、水蓮は見逃さなかった。

「櫂？」

「僕は明日の準備をしていたんですよ。行く前に話そうと思っていましたが、ちょうどいい。今のうちに  
言ってしまうす」

衝立を越えることにもすっかり慣れた櫂は、戸惑う様子もなく水蓮の眼前までやってくる。

『明日の準備』とはなんだ？ なにをする気だっ？」

思わず強い口調になってしまった水蓮に、櫂は小さな笑みをひとつ見せると、その場に正座した。

「梓さんの無事はわかったんです、次は姫さまでしょう？ 僕、やっぱり心配ですから、壺奥まで様子を見  
にいきます」

それは予想できていた答えではあったが、許すわけにはいかなかった。

「駄目だ！ 許可できんっ。おぬしにとっては迷惑な話かもしれぬが、私は朱華姫と約束をしたのだ。なに  
があっても必ずおぬしを守ると。危険とわかっている場所に、みすみす行かせるわけにはいかぬ！」

珍しく激昂する水蓮に対し、櫂も覚悟していたのだろう、言葉は穏やかだった。

「それについては、心配には及びません。危険のない方法で向かいますし、姫さまの無事を確認するだけで、  
無理に連れ帰ろうとはしませんから。それをやると、きっと姫さまもすごく怒るでしょうし……」

櫂にとっては、目の前で声を荒げている水蓮よりも、朱華のほうの方が恐ろしいらしい。

「なんだ？ 危険のない方法とは。そんなことが可能なのか？」

無茶なことを仕掛けてきたのは壺奥側だが、向こうでも藩境の警戒を強めていることだろう。そのなか  
を疑われずに抜けるということは、籠城戦だったために顔を見られていないとはいえ、難しいのではない  
だろうか。

しかし、心配する水蓮をよそに、櫂の瞳には自信の色が見える。

「姫さまがその方法を教えてくださったんですよ！」

「朱華姫が……？」

「兵士のなかに女性がひとりで入っていくなんて、通常ならば怪しすぎて仕方がないことはありません  
か。しかし、姫さまは斬られることなく大将のもとまで辿り着き、さらには受け入れられました。なぜだ

と思います？」

「それは――朱華姫が都上(とがみ)の姫君だから、だろう？」

「確かにそうですけど、そんなのは実際誰にでも自称できるんですよ」

そこまで言われて、水蓮も気づいた。

「そうか……都色の着物か！」

櫂は満足そうに頷く。

「そうです。姫さまがあの着物を着ていたから、誰も手を出さなかった。心の内では疑っていたかもしれませんが、表向きは、ですね。そこで僕も、都から対岐に来るときに着ていた着物を着ていこうと思ったんですよ」

「なるほどな。確かに、おぬしを城郭内で捕まえたとき、あの着物からすぐに都の者だとわかった。朱華姫の着物ほど特徴的なものではないが、生地からしてこの辺では見られないものだったからな」

水蓮が納得の声をあげると、櫂はぱあっと顔を明るくした。

「でしょうっ？ 壱奥側が、姫さまを都の姫だと思って一応でも受け入れているのならば、都からの使者を装っていけば会わせてもらえるのではないかと考えたんです。壱奥に入るときも、対岐との藩境をそのまま越えていくのではなく、北の土前(とぜん)にまわりこんでから入ろうかと」

「ああ、それなら向こうも信じるかもしれんな。だが、壱師の意思を破り突然戦を仕掛けてきたようなやつらだぞ。いつ気が変わるか――」

「それはおそらく、大丈夫です。これはあくまで僕の予想ですけど、壱奥側は姫さまを『使える駒』だとも思っているのではないかと」

その櫂の容赦ない言葉に、目を丸くしたのは水蓮だ。

「おぬし、よくもそんなことが言えるな……」

「ぼ、僕だって言いたくて言っているわけではありませんよ!? でも、そうとしか考えられないから――壱奥の本当の目的はまだ見えませんが、壱師さまになんらかの訴えをしたがっているのは確かかと。とすれば、その娘である姫さまには、なにかと利用価値があると思うんです」

「人質にしてもいいし、取り次ぎを頼んでもいい、か？」

「そうです。すぐに殺さないということは、そういうことでしょうか？」

櫂は淡々と言葉を紡ぐが、水蓮にはそれが信じられなかった。

(朱華姫が五十二番目の姫君として目の前に現れた、あのときと同じだな)

櫂のなかで朱華への愛しさが余るあまり、ひどく落ちついて見えるのだ。

もし梓が今の朱華と同じ立場だったとしたら、自分はこれほど冷静に思考を巡らすことができるだろうか。

――水蓮には、あまり自信が持てなかった。

それだけに、櫂の芯の強さに賭けてみたいとも思う。

「おぬしの話はわかった。だが……」

その一方で、やはり譲れない思いもあった。

「私はまだ、おぬしを守るために、なにひとつもできていない。梓のために身の危険を冒してまで都へ戻ってくれた朱華姫とは、あまりにも不釣りあいだ。ここでおぬしを簡単に送り出してしまつては、余計に――」

「大丈夫ですよ！」

弱気な水蓮の言葉を遮って、櫂は力強く告げる。

「水蓮さまはもうわかっていらっしゃるでしょうけど、僕は誰よりも姫さまが好きです！ ですから、姫さ

まが哀しむようなことはしたくありませんっ。水蓮さまが約束を破った結果、姫さまが傷つくというのなら、僕は全力で自分を守ります！　どうか壱奥に行かせてください!!」

最後には、深々と頭をさげてきた。

その必死な姿に、水蓮は強く胸を打たれる。

(たとえば私が、梓にこれくらい強く訴えていたならば――朱華姫と櫻の力を借りずとも、梓を城郭に呼ぶことはできたのかもしれない)

そう考えれば、ふたりに無用な負担を強いてしまっている自分が櫻をとめるのは、おかしいのではないかという気がした。もしここで櫻が壱奥に行くことを許し、その結果櫻が怪我をして朱華との約束が破られたとしても。

(悪いのは、私だ)

蔑まれて当然。それこそ土下座してでも、詫びればいい。

そのような覚悟を、最初から持っていればいい。

しばしの逡巡のあと、水蓮はそんな結論に達した。

「――いいだろう、櫻。私と朱華姫の約束を、おぬしに託すことにする」

「あっ、ありがとうございます!!」

櫻は一度あげた頭を、再びさげる。あまりに勢いをつけたせいで、畳にひたいを打ちつけた。

水蓮はそれを見て笑いながら、

「そのかわり、忘れるな。もしおぬしになにかあったら、私との約束がどうのこうの以前に、朱華姫は全力で哀しむだろう。必ず、彼女に笑顔を見せて帰ってきてくれ」

「お任せください！」

(四)

---

翌朝櫻が旅立つと、今度こそ水蓮はひとりきりになった。

水蓮御殿の縁側(すのこ)に腰かけ、細めた目で咲き誇る桜の花々を見あげる。

(桜の花が咲いたら、婚儀を挙げよう——か)

その約束も、まだしばらくは叶えられそうになかった。

待つことしかできない己の身が、ひどく恨めしい。

(私はこのままでよいのか……?)

ひらひらと落ちる花びらを追いながら、水蓮は自問を繰り返していた。

(私だけが、なにもしていないのではないか?)

藩主だから。

藩民や城郭を守る責任があるから。

(——そう理由をつけて、私はいつも待っていた)

城郭の周りに水堀をつくらせたのも、命令を出しただけであって、水蓮自身が手をかけたわけではない。梓のこともそう、自分の手には負えなくて、風向きが変わるのを待っていた。同じ十八だからと昔の壱師と自分を比べてみても、打ちのめされるだけで行動には活かせない。他藩との交流も相手からの接触待ちで、藩民の意見を聞くことさえも文(ふみ)を待つだけだった。

(籠城は正しい選択だったろう。だが、城郭にこもっているあいだ、もっと他のこともできたのではないか?)

考えはじめればきりがない。

それでも考えなければいけないと思ったのは、その藩民たちからの文の内容が、変わりはじめていたからだ。

(最初はあるなにも、好意的であったのに)

水蓮がわがまま姫を演じさせても朱華を受け入れていた者たちが、今回の壱奥(いつ)の襲撃によほど強い衝撃を受けたのか、一八〇度意見が変わってしまっていた。

(すべて、私のせいだ)

壱奥がなぜ対岐を攻めてきたのか、それは水蓮にもまだわからない。だが、朱華のせいではないことだけは確かに思えた。冷静に考えられるようになった今だからこそ、気づけた。

(朱華がまだ対岐での地位を確立しないうちを狙って攻めたのかもしれないとも、思っていたが)

そこまで壱師の娘を警戒するのであれば、もっと早い段階に——朱華が対岐にやってくる前に、襲っておけばよかったのだ。それをしなかったということはつまり、壱師の娘の存在が問題なのではなかったということになる。

(次に考えるべきは、位置の問題)

壱奥が接している藩は、北にある四十八番目の藩・土前(とぜん)と、西の対岐(つき)のふたつだけ。東と南は海に面していた。それでも海からまわりこめば、土前の北にある四十四番目の藩・淡岐(あわき)や、対岐のさらに西にある日隅(ひずみ)を襲うことも不可能ではなかつただろう。

しかし壱奥は、対岐を狙った。それはなぜか?

(対岐の藩主である私が、最も頼りなく見えたからではないか?)

水蓮はまだ他の藩主と会ったことはなかったが、噂ならばそれなりに聞こえてくる。それはどこの藩でも同じことだろう。まして、相手を攻めようなどと思ったら、より詳しく調べていたはずだ。

(その結果私に白羽の矢を立てたとしても、おかしくはないだろうな)

悔しさと恥ずかしさに、水蓮の口もとは自然と歪んだ。

まだ年若く、経験の乏しい藩主——そんな建前は、父の跡を継いだ時点で捨てねばならなかったのに。

(都上もそれを期待して、私が藩主であることを許してくれたのだろうに)

自分の脚で立っている振りをして、陰ではそれに寄りかかっていたのだ。

そして今は、朱華に寄りかかっている。

水蓮にはそういう自覚があった。

(頭だけでも、口だけでもいけない)

動かなければ。

人の心を動かすためには、自分から動かねばならないのだと。

行動力の塊のような朱華や樺を見て、水蓮はいつの間にか感化されていた。

「——楊(やなぎ)！ 近くにいたらこちらへ」

視線を桜から動かさないまま水蓮が呼ぶと、すぐに「なにかご用でしょうか？」と聞こえる。そしてなんと、水蓮が見ていた桜の幹の陰から、楊が現れた。

「っ……!? い、いつからそこにいたのだ？」

水蓮がその場で声をあげたのは、楊は必ず自分をひとりにはしないとわかってのことだったが、現れた場所はさすがに予想外だった。

驚きを隠せない水蓮の様子を見て、その場で片膝を折った楊は目尻にしわを寄せる。

「だいぶ前からおりましたが、水蓮さまがもの思いにふけておられるご様子でしたので、この隙に観察日記をと……」

「——一応訊くが、なんの観察日記だ？」

「それはもちろん、水蓮さまのございますよ。わたくしには、水蓮さまのご成長を先主さまにご報告するという役目もありますので」

「……………」

(たまになにかを書いているとは思っていたが、まさかそんなものとは)

先主というのは、前藩主だった水蓮の父のことである。水蓮自身はまだそんな段階ではないと、父の墓に報告などしたことはなかったが、知らないあいだに筒抜けだったようだ。

水蓮は照れ隠しに鼻の頭を掻きながら、言葉を紡ぐ。

「私は植物ではないのだがな……まあいい。それならば、今日のことも盛大に書いてくれ」

「今日のこと、ですか？」

不思議そうに首を傾げた楊に、水蓮は大きく頷いた。

「ああ。これからみなで花見をしようと思うのだ。成り行きで日隅のかたがたに先に見せてしまったが、いつもならば城下町の人々にまず見てもらっていただろう？」

すると楊は、ぎょっと目を見開く。

「そ、それはそうですが、壱奥軍が引いたばかりの今の状況では、少々危険ではありませぬか？ まだ近くに残ってこちらの出方を窺っている者が、いるかもしれませぬぞ」

いつもなら、その楊の進言に従っていたかもしれない。だが今日の水蓮は、ひと味違う。

「ならばこちら、きちんと見張ればいいだけのことだ」

きっぱりと言い切った水蓮は、不安げな表情の楊をまっすぐに見据えて続けた。

「なあ楊。藩主になってからの私は、愚直に安全なことばかりを選びすぎたのかもしれぬ。安全であることは確かに大事なことではあるが、それゆえに失われるものもまた大きいのだと、知っていたのに気づかな

い振りをしていたのだ」

「水蓮さま……」

楊の表情が、驚きから他の色へと変わってゆく。

水蓮はその色の行く先を確かめるために、さらに言葉を繋いだ。

「私は今、少しばかり危険でも、みなを集めたい。この美しい桜をともに眺め、私の話に耳を貸してほしいと思う。もう、待つばかりは、嫌なのだ。たとえその結果、みなが私から離れていったとしても――」

水蓮の決意は固い。

楊にもそれがわかったのか、きりりと表情を戻して応えた。

「かしこまりました、水蓮さま。すぐに城郭を開放する準備をいたします！」

だが戻しきれずに、こぼれているのはおそらく――嬉しさだ。長く傍にいる水蓮だからこそ、そうとわかった。自然と、言葉が漏れていた。

「ありがとう、楊」

(なかなか変わることでできない私を、齒がゆい思いで見っていたことだろうに)

それでもあたたかい眼差しで見守りつづけてくれたからこそ、水蓮は藩主としてなんとかやってこられたのだ。

そんな水蓮の不意打ちのような言葉に、珍しく顔を赤らめた楊は、

「と、とんでもございませぬっ。では行ってまいります!!」

よほど照れているのか、逃げるようにしてその場から離れていった。

(そういえば、面と向かって礼を言ったのは、これが初めてかもしれぬな)

あまりに身近な存在すぎて、そのような機会もなかったのだ。これからはもっと礼を尽くそうと、心に決めて水蓮は立ちあがる。自らも働くために。

(五)

それから二時間後には、城郭のなかには藩民たちでいっぱいになった。

城郭を解放するといっても、さすがに天閣のある内角(うちかく)は無理であるため、二の角から外角(そとかく)までを解放した。桜の木は城郭全体にまんべんなく植えてあるので、どこで見ても同じようにきれいだ。

(ここに梓がいたなら、もっと美しく見えたであろうに)

自らが遠ざけた、その弱さが、今は情けなく思える。

二の角を歩く水蓮は、楽しそうにはしゃぐ人々の様子を見てまわりながら、そんなことを考えていた。

(そうだ、たとえ少々の危険を伴ってでも、選ばねばならなかったのは『それ』も同じこと)

もし梓が対岐(つき)城に残り、その結果壱奥(いつ)との繋がりを疑われたとしても、自分が全身全霊をかけて守れば――梓が傍にいたなら、それも可能だったのではないかとそう思うのだ。だが実際の水蓮は、気弱な心でまず梓を遠ざけた。梓自身がどうしたいのかすら、訊きもせずに。

(いちばんわがままだったのは、間違いなく私だ)

そのために巻きこんでしまった人々の想いも、約束も、体面も守れず、他になにを守れるというのか――。

歩く一歩一歩に想いをこめながら、水蓮は近くの櫓へと足を踏み入れた。そこは普段食糧を備蓄している櫓であったが、先日の籠城の際に半分ほど使っていたため、なかはいつもよりがらんとしていた。奥にある狭い階段をのぼって二階に行くと、見張りをしていた城兵が驚いた様子で椅子から立ちあがる。

「す、水蓮さまっ!? どういたしました? このような場所にっ」

水蓮は手で座るようにと促しながら、櫓から少し突き出た物見台に近づいていった。

「少しのあいだ、この場を貸してくれ」

一言そう断ると、近づいた桜の花と眼下にいる人々を見やる。

(ずいぶんと、近いな)

水蓮が好んでよくいた天閣の最上階とは違い、遠見筒など使わなくとも人々の表情や息づかいがよくわかる距離だった。逆にいえば、下にいる相手からも水蓮がよく見える距離だ。

その声が、よく届く距離なのだ。

「――ようこそ、対岐城へ」

水蓮が凜と張った声音で告げると、がやがやとしていた周囲はあっという間に静まりかえり、人々はいっせいに顔をあげた。そして櫓の周りに集まってくる。

そのたくさんの視線をたったひとりで受けとめ、ごくりと息を呑みこんだ水蓮は、次に穏やかな声音を心がけて続けた。

「今日はみなにどうしても伝えたいことがあり、急遽城郭を開放することにした。花見を心ゆくまで楽しむ前に、どうか私の話を聞いてほしい」

それには、「一体なんだ?」と首を傾げる者や、もったいぶった言いまわしに笑う者など、さまざまな反応があった。

水蓮はそれらが収まるのを待ってから、一字一句丁寧に紡いでいく。

「朱華姫は、間違いなく都上の『五十一番目の姫君』だ」

ありったけの誠意をこめて。

「『五十二番目の姫君』として壱奥軍についてゆくのを見かけた者もいるだろうが、それは朱華姫が私の作戦に乗ってくれたから」

たとえそれが真実でなくても。

「なぜ壱奥軍が突然攻めてきたのか、私にもいまだわからぬ」

情けないことでも。

「朱華姫は今、それを探ろうとしている」

そう信じる気持ちが。

「そのためにたったひとりで、壱奥軍のなかに飛びこんだのだ」

伝えようとする思いが。

「ここにいる誰よりも——私なんぞよりもはるかに、勇気のある姫なのだ！」

自らを動かす。

「だからどうか、朱華姫のことを疑わないでほしい」

人を動かす。

「私は朱華姫のおかげで、自分の愚かさに気づくことができた。今後も、たくさんのことに気づかされてゆくことだろう」

水蓮は一步前を出て、木製の柵に手をついた。

「間違いなく、対岐にとって必要な人だ。だから——」

次の言葉を探して、息を吸った水蓮。

だが、それに続けたのは水蓮ではなかった。

「——朱華さまを疑うくらいなら、わたしを疑ってください！」

不意に響いたのは、水蓮にとって懐かしい声音。

「朱華さまは、対岐を売るようなおかたではありませんっ。わたしがお傍に居られたのはたった一週間ほどのことですが、それでもよくわかります！ 朱華さまは、とてもあたたかい心を持ったおかたなのです!!」

「梓っ……!?!」

櫓の周囲に集まっていた人々のいちばん奥に、その姿はあった。

(なぜここに!?!)

朱華に無理を言ってまで都に連れていってもらったはずの梓が、自分でいちばん恐れていたはずのことを、口にしている。金色の髪の毛を隠しもせず、碧い瞳を潤ませて、懸命に訴えている。

「どうせ疑うなら、わたしを——みんなとは違う色のわたしを疑ってください……！」

悲痛な叫びだった。

誰も近づけないほど。

誰も声をかけられないほど。

それでも梓は、凛々しく立っていた。

「梓っ！」

水蓮は愛しい者の名を呼ぶと、階段をくだるのさえもどかしく、ひょいと手前の柵を跳び越える。当然その先には同じ高さの地面などなく、あちこちから悲鳴があがった。

(これくらいの高さなら、大丈夫だ)

水蓮とて、いつもいつも座り仕事ばかりをしているわけではない。いずれは水蓮自身が大将となって戦場(いくさば)に出ることも考えられるのだ、きちんと身体を鍛えてはいた。だからこそ迷いなく飛び降りることができたのだ。

(——そう、私は遠くにすぎた)

このくらいの高さなら、たったひとつの勇気でいつでも近づくことができたのに——。

「水蓮さま……!?!」

地面に強く足をついた水蓮が走り出す前に、心配したのだろう梓が駆け寄ってくる。  
周囲にいた人々は、呆然とした様子でふたりを見守っていた。  
――しっかりと、抱きあうふたりを。

(六)

なぜ戻ってきたのかと尋ねた水蓮に、笑顔の梓は詰まることなく答えた。

「わたし、考えたのです。ひとりだけなにもせずに、ただ待っているだけでいいのかと。なにかひとつくらい、わたしでも役に立てることがあるかもしれないのに。——いいえっ、必ず役立って見せると、そう誓って戻ってまいりました」

それを聞いた水蓮は、心から驚いたものだった。

(私と、同じだ)

境遇も性格も違うのに、ふたりは同じことを思い、動き出していた。

(ただ待っているのは、もう嫌だと)

それが都の力なのか、朱華と櫻が特別なのかはわからないが、身分に甘んじることなく動く姿を見せつけられたから。憧れ、そしていつしか勇気づけられていた。

「櫻さんが前に仰っていましたよね。『全力で素直になることに決めた』と。わたしも、そうありたいと思ったのです。ずっと我慢をしていたのは、わたしも同じ。ですが本当は、ただ傍にいただけでよかったのだと。それだけで他の事象に負けにくい強い力になれるのだと——そう信じる想いが、最も大切だったのではありませんか？」

強い瞳で告げた梓に、水蓮はますます惹きつけられたのだった。

(こらえきれずについ人前で梓を抱きしめてしまったゆえ、今頃は噂の的になっていることだろう。朱華姫が戻ってきたら、改めてみなにきちんと説明しなければ、な)

おそらく婚儀どころではなくなるはずだ。

そう予想しつつも、水蓮の胸中はどこか晴れやかだった。周囲に嘘をつきつづけることは、水蓮自身が予想していたよりもずっとつらかったのだ。それに、壱師に事情を綴った文(ふみ)を送っていた以上、いずれみんなにも話さねばならないことはわかっていた。

しかしだからといって、すぐに開きなおって梓を傍に置くほど身勝手にもなれず、水蓮は以前と同様に梓と距離をおきつつも、あとのふたりが帰ってくるのを待った。

そして二日後の明けがた、戻ってきたのは——櫻ひとりだった。

「先に言っておきますと、姫さまはご無事でしたよ！ やっぱり僕らの予想どおり、姫さま自身の意思で壱奥軍に合流したそうです。まだ壱奥の真相には辿り着けていないようですが、悔しがって地団駄を踏むくらいにはお元気そうでした」

水蓮の顔を見るなりそう語った櫻の青い着物は、あちこち破れてぼろぼろだ。

「それはさいわいだったが……おぬしのほうは大丈夫なのか？ ずいぶんと攻撃されたように見えるぞ」

水蓮御殿の大広間に迎え入れながら水蓮が尋ねると、

「僕なら平気です！ たいした怪我ではありません。壱奥城のなかまでは騙せたんですが、帰りに姫さまから『お土産』を持たされたことに途中で気づかれ、ちょっとばかり追いかけてまわされてしまったんですよ」

櫻はそうけろりと語ったが、一対多数ならば相当に大変だったはずだ。

「よくぞ無事に戻ってこられたな」

心から感心した声をあげた水蓮に、櫻は照れたように頭の後ろを掻く。

「——やっぱり、『僕ひとりの力で』と言ったら不自然ですよ？ 実は、姫さまについていていた鷹雄に、助けられたんです」

「鷹雄？ もしや、都上(とがみ)のご子息のうちのひとりか？」

櫛が以前語っていた、国中をまわっている者たちだろうか、水蓮はかなり真面目に問いかけた。

しかし櫛は、なぜか笑い出す。

「いいえ！ さすがにそんな人が傍についていたなら、もっと早い段階で姫さまを助けてくれるでしょう。なにしろ、家族ですからね」

「む、言われてみればそうだな」

「鷹雄は、姫さまが飼っている鷹の名前なんですよ。まあ名づけたのは僕ですけど」

「鷹？ ……そういえば、朱華姫が来てから城郭の上空で見かけるようになったな。あの鷹か」

水蓮が記憶のなかを探りながら問うと、櫛はこくりと頷いた。

「鷹雄が壱奥(いつ)の兵士たちを攪乱してくれたおかげで、無事にこれを持って帰ることができました」

そこまで告げた櫛は、腰に巻いていた紫色の風呂敷を外しはじめる。

(先ほど言っていた、朱華姫の土産というやつか?)

一体なにが出てくるのだろうと、期待して待っているあいだに――

「櫛さんが戻られたというのは本当ですか!?!」

勢いよく大広間に飛びこんできたのは、梓だった。いつもならば絶対にそんなことはしないが、よほど急いで駆けつけてきたのだろう。梓は朱華がいないあいだ、他の侍女たちと同じように城郭全体の管理を手伝っていたため、情報が伝わるのも少し遅いのだ。

風呂敷を床に置いてごそごそとやっていた櫛は、ぱっと顔をあげると、手になにかを持ったまま梓に近づいた。

「梓さん！ はい、僕は無事に戻ってきましたよ。これ、姫さまからの預かりものです！」

そしてなぜか、水蓮ではなく梓のほうに、それを手渡す。

「おい、櫛っ？」

水蓮は慌てて声をかけたが、梓はそれ以上に戸惑っているようだった。ずっしりと重そうなかなりの厚さのある書物を、不思議な顔で見つめている。

「梓さんならきっと、どちらも読めるんじゃないかと思って……」

櫛はそう言いながら、書物を梓に持たせたままなかを開いた。

その瞬間、梓の碧い瞳が大きく見開かれる。

「これ、語典ですか？ 確かに読めます。奏和語はもちろんですが、その隣にある亀李亞(カメリア)語も、全部は無理ですけど大体わかりますよ」

「亀李亞語？ つまり、梓の母国語ということか」

水蓮があいの手を入れると、櫛は大きく頷いた。

「そうです。実は、壱奥軍の大將をしていた男――レオというらしいですが、彼も亀李亞の出だそうなんですよ」

「なんだって……？」

髪や瞳の色が一致していたことから、もしやと思ってはいた。

(だが、偶然なのか?)

胸がざわめく水蓮の横で、梓が小さく「あ」と声をあげる。

「では朱華さまは、そのかたと会話をするために、この語典を持っていらっしやったのですね」

「ええ、そのようです。本来の壱奥藩主である眞柏(しんぱく)さんの兄・黄柏(おうぱく)さんが書いたものらしいですが――」

そうして櫛は、朱華から聞いてきた壱奥の現状――現在眞柏が表向きは病氣療養中であること、その際に黄柏がレオを使って好き放題やっていること、レオは奏和語がほとんどわからないため黄柏に利用され

ているのだということを、ふたりに話した。

「なんだその、『表向きは』というのは？」

水蓮が気になったくだりを問うと、櫛はにやりと口角をあげる。

「姫さまはどうやら、黄柏さんが眞柏さんを暗殺したのではないかと、疑っているようなんです」

「――なるほどな」

壱師は藩民たちから支持される者を藩主を選ぶ。だが、当然ながら必ずしもすべての人がその藩主を受け入れるわけではないのだ。他人ばかりか家族でさえも、それを疎ましく思うことはあるのだろう。

(兄弟ならば、幼い頃から比べられて育ち、嫌気が差していたのかもしれない)

あくまですべて勝手な推測であるが、それが本当ならば対岐に攻めこんだ理由にも想像がつく。

(おおかた、自分のほうが藩主に相応しい人間なのだと、立派に藩民たちを率いていけると、都上に見せつけてやりたかったのだろうな)

対岐を攻め落とすことが目的ではなかったからこそ、日隅の援軍が来たときすぐに撤退した。つじつまは合っている。

「つまり、黄柏どのをとめるには、黄柏どのが眞柏どのを暗殺したという証拠が必要なのか？」

水蓮が確認すると、櫛は「そういうことです」と答えたあと続けた。

「ですが姫さまは、それにはまだ時間がかかるかもしれないと仰っていました。それで僕にこの語典を預けたんです。みんながレオさんを怖がっているのは、彼の本心がわからないからではないかと」

「それはあるでしょうね。わたしだってこんな外見ですが、自分の言葉できちんと思いを伝えることができるようになったから、なんとかみなさんに受け入れてもらえたのです。そのかただって、ちゃんと言葉さえわかれば、きっと――」

胸の前で両手を握りこんで告げた梓に、櫛は深く頷く。その瞳には、やる気の炎が見えた。

「ですからっ、みんなでこの語典をできる限りたくさん書き写しましょう！ これは亀李亞語の発音順になっているそうですが、奏和語の発音順に並べ替えれば我々でも使いやすいと、姫さまが仰っていましたよ。さあ、今すぐ!!」

(一)

両手首に絡まった縄が、ぎりぎりと締めつけてくる感覚が痛い。しかも、その縄を引っ張っているのは自分の身体の重さであったから、朱華はおいそれと身動きもできなかった。

(暗い……ここは、牢?)

黄柏にひどく殴られ意識を失っているあいだに、連れてこられたようだった。

痛む頭をを起こして辺りを見まわすと、目の前には鉄の格子が見える。壁は石を積んで補強してあるのか、背中に当たるとごつごつした感触が冷たくて、熱を持っている肌には少しだけ気持ちよかった。

明かりは格子の両側にあるふたつの蠟燭だけで、他のものは暗くてほとんど見えない。

(一一櫓、無事に対岐(つき)まで戻れたかな)

薄目でぼんやりと遠い灯を眺め、朱華は久々に見た愛しい人の顔を思い浮かべた。

壺奥(いつ)までやってきたのは完全に朱華の独断で、櫓たちはその思惑など知らないはずだった。それなのにまさか、あんな形で追ってくるなど、誰が予想できただろうか。

(水蓮ったら、自分が櫓を守ると言っていたのに、櫓をひとりで来させるなんて!)

朱華はそう腹を立てながらも、半分は感心していた。その覚悟に。

(それだけ櫓と一一多分あたしを、信じてくれてるということだから)

自分はその期待に応えられたらだろうか?

櫓は?

考えて、そんな場合ではないのに、ふっと口もとを緩めた。

(……あの子、結構元気そうだったのが、ちょっと悔しいわ。あれでも我慢してたのかなあ?)

朱華の前では素直になると、そう宣言していた櫓。しかしさすがに、この状況では素直になるのも厳しかったらう。不審に思われるような態度を、取るわけにはいかないからだ。

すぐ近くにいても、触れられないことがもどかしかった。苦しかった。いつもの朱華なら逆に、触れられることを怒っていたはずなのに。

(離れるたびに、わがままになっていくみたい)

櫓はきっとそれをわかっていて、手に負えなくなると困るから、律儀に追ってきてくれるのだろう。

朱華は勝手にそう納得して、ひとり顔を赤らめた。

こんな目に遭わされているのに、櫓のことを考えるだけであたたかくなれるのだから、不思議なものだ。身体の痛みよりもずっと、心は正直だった。

正直に、不安も訴えてくる。

(櫓、壺奥城からは出られたと思うんだけど一一)

朱華が櫓に例の語典を渡したということが黄柏にばれたのは、櫓と別れて少し経ったあとのこと。どうやら黄柏はレオの語典も取りあげようとしたらしく、そのときにレオが語典を持っていないことに気づき、朱華のところに来たようだった。

(でも、レオが告げ口をしたわけではないんだわ)

「なぜ渡したのか」と、「おまえの目的はなんだ」と、朱華が黄柏に殴られているあいだ、レオはじっとその様子を眺めていた。そんなレオを、朱華も見返していた。そこに浮かんでいたのは驚愕の色で、決して罪悪感ではなかったのだ。

(レオが言ったせいであたしが殴られてたら、レオはきっと傷つくはずなもの)

短い単語ばかりの会話でも、朱華にはレオの人間性がよく伝わっていた。普通ならば、言葉の通じない

者に「話をしよう」と一日中追いかけてまわされたら嫌がることだろう。相手が話す言葉のひとつひとつを、語典で引いていくのもかなり手間がかかることだ。それでもなぜかレオはとても協力的で、何日経っても朱華を遠ざけようとはしなかった。逆に、自分も奏和語を覚えようとしていたくらいなのだ。

(本当は、レオ自身も気づいてるのかもしれない)

自分の言葉が、黄柏によってねじ曲げられていた可能性。

周囲の言葉が、黄柏によってねじ曲げられている可能性。

朱華の偽りのない言葉を聞くことによって、レオのなかでもなにか変化があったのならば、それは朱華にとっても嬉しいことだった。

(あたしは単純に、周りの人たちがレオの言葉を理解できたらいいと思ってたけど、レオが頑張ってくれるなら逆もできるんだ)

そうすればもう誰も、レオを恐れなくて済む。

梓という存在を受け入れた対岐の人々のように、壺奥の人々もレオを受け入れられるだろう。

(もちろんあたしたちだって――ああ、そうだわっ)

そこで朱華は、レオと梓が家族であるかもしれないという、レオ自身知るよしもないもうひとつの可能性を思い出した。

(ふたりを会わせてみたいわね)

たとえ家族でなかったとしても、ふたりが同胞であることに間違いはなく、おそらく会話も通じるのだ。そうすれば梓から、胡散臭い黄柏の訳よりも遥かに信頼できる訳を聞けるだろう。

ここは一度、黄柏の真意を探ることは諦めて、対岐に戻ってみるのもいいかもしれない。

俄然やる気になって、思わず身体を動かした朱華は、

「う……っ」

手首の鈍い痛みに顔を歪める羽目になった。

――朱華がそんな状態で過ごしたのは、一体何日間のことであっただろうか。

常時暗いため朝も夜もわからず、ときおり訪れては殴りつけてくる黄柏だけが、朱華にとって時間を計れるものだった。

(櫂を先に帰したの、失敗だったかな?)

さすがの朱華も心細くて、弱気になりはじめる。

(このままじゃ、役目を果たせないわ……)

早く戻らなくてはいけないと、わかっている。なにか打つ手を考えねばと。

だが、焦る朱華を嘲笑うかのように、意識が朦朧とする時間だけが増えていった。

それでもやがて――黄柏の他にもうひとり、朱華の時間を動かす者が現れる。

「ウマティ・アコン？」

突然耳に飛びこんできた声音に、朱華の心は深い水の底から引っ張りあげられた。

「――レオ……？ レオ、そこにいるのっ？」

あれだけ聞いてもまだ慣れない亀李亞(カメラリア)語に、朱華は必死に言葉を返す。

しかし、今は互いに言葉がわからないのだ。たとえここに語典があったとしても、この暗さで読むのは大変だろう。

すうと格子の横から現れた姿を、小さな火が映し出す。レオは、怖いくらいに無表情だった。

(レオ……?)

そのとき咄嗟に朱華の脳裏に思い浮かんだのは、黄柏が以前口にしていた言葉。

『わしならばいつでもレオに襲わせることができること、ゆめゆめ忘れるな』

ぞくりと、全身が震えた。吊られた手首はますます痛んだ。

裾がはだけたままの足もとを直したいと思っても、たったそれだけの自由すら、今の朱華にはなかった。どこから持ってきたのか格子の鍵を開け、レオが静かになかへと入ってくる。そして一步一步朱華に近づくにつれ、明かりから遠ざかるため、やがて表情も読めなくなった。

(レオのことを、信じたい)

そういう気持ちがあっても、怖さは拭えない。

だが怖がっていることを、レオに悟られたくはない。

言葉がない今、レオはそれで傷つくかもしれない。

せめて震えないようにと、朱華は目をつむり、歯を食いしばって、手脚に力をこめた。

――やがて、少し緩められていた胸もとに、レオの手がすべりこんでくる。

それは感触でわかった。

「レオ……！」

名を呼んだ瞬間、そこに隠していた懐刀を抜き取られたことも、感触でわかった。

(えっ!?)

戸惑う朱華に構わず、レオは無言で朱華の上に覆いかぶさると、手首を吊りあげている縄を切ってゆく。朱華からは暗くてよく見えなかったが、おそらく朱華の懐刀を使っているのだろう。

(レオ――もしかして、最初あたしに抱きついたときから、懐刀を持ってるって気づいてた?)

朱華がそんな考えに至った頃には、朱華の両手は完全に自由になっていた。だが、しばらく役目を怠けていた朱華の脚は、自身の体重さえ支えきれずにふらついてしまう。

「わっ」

「イアヌバ！」

咄嗟にレオが腕を伸ばしてくれたおかげで、なんとか倒れずに済んだ。

「あ、ありがとう」

朱華が二重の意味をこめて礼を告げると、さすがにそれは伝わったのだろう。朱華の肩に触れているレオの手に、ぎゅっと力がこもる。

「レオ……？」

それからレオは、暗がりのなかで朱華の右手になにかの紙を押しつけた。

「逃ゲロ」

短い奏和語。

そして今度は左手に――なじみのある感触が渡される。

(あたしの懐刀！)

そう理解したときには、朱華の身体はレオの腕から引き離され、背中を押されていた。まるで「早く出る」と言わんばかりに。

「レオ、あたしに逃げてほしいのっ？」

後ろを振り向いて確認したくても、レオが強い力で押してくるため、足を動かさなければ転んでしまう。

(そう……きっとそうなんだわ)

そのためにレオは、たったひとつの言葉を覚えてきたのだろう。

朱華は受け取った紙と懐刀を胸もとにしまいこみながら、格子に近づいた。そしてレオが入るために開けっぱなしにしていたところから、外に出る。小さな明かりを頼りに奥を見ると、細い階段が上へと続いているようだった。

再び、とんと背中を押される。

朱華が数歩前を出てから振り返ると、今度こそちゃんとレオの顔が見えた。

どこか淋しそうにも見える、眉尻のさがった顔が。

「――あとで必ず、あなたを助けにくるから！」

告げた朱華の言葉を、レオがどれくらい理解できていたのかはわからない。しかし目を大きく見開くと、レオは深く頷いたのだった。

(二)

それから朱華は、徐々に明るくなってゆく空の下、五時間ほどで壱奥(いつ)と対岐(つき)との藩境を越えた。

一度は壱奥の城兵に見つかりそうになったものの、朱華の様子を見守ってくれていたらしい鷹雄の機転に助けられ、うまく壱奥城から抜け出すことができたのだ。そのときに馬を一頭借りることができたのも、大きかった。

(あとでちゃんと返しにくるからね！)

馬上から振り落とされないよう手綱を強く握りながら、朱華は心のなかで呟く。

そう、朱華がレオに告げた言葉は、まったくもって嘘ではなかった。朱華は本当に、いずれ助けにくるつもりでいた。自分を追ってきた櫛に語典を託したのも、そのための布石だったのだ。

(櫛、ちゃんとみんなに説明できたかな?)

櫛の安全をいちばんに考え、話はほんの短い時間しかできなかったが、必要なことはすべて伝えていた。亀李亞語を訳すための語典をたくさん複製して、レオを孤立させない環境をつくろうと。亀李亞語を今すぐに理解することはできなくても、理解しよう、理解したいという欲求が生まれるだけで、周囲の見方は一味方は、変わってくるはずだ。

朱華の役目は、そのきっかけをつくること。今はそれだけで精一杯だった。

(それでも、なにもしないよりはずっといい！)

上空には鷹雄を引き連れ、朱華が乗った馬は風を切るように大地を駆け抜ける。都へ向かったときと違い男装していなかったうえに、あちこちぼろぼろの着物だったため、道中朱華を見かけた人々は一様に目を丸くしていた。

朱華はそんな人々を見て、都にいた頃のことを思い出す。都でもやはり、積極的に身体を動かそうとする朱華は、好奇の的だった。朱華自身、まったくそれが気にならなかったのは、『櫛との約束を守るため』という大きな目標があったからだ。

(今もあるよ、大きな目標)

五十一番目の娘として五十一番目の藩にやってきて、藩主である水蓮と恋仲になることはできなかったが、それでも今、対岐を守りたいと思っている。ここが自分の居場所だと、戻りたいと思えている。新しい絆と、守りたい約束がある。

住むようになってたった数週間の朱華でも、ここにきてよかったと感じる相性のよさが、対岐にはあった。あるいはそれこそが、壱師の目による選択の結果なのかもしれない。

朱華が対岐に入ってさらに五時間後、すっかり高くなった太陽に照らされた視界の隅に、ひときわ高い天閣の頭が見えてきた。

(やっと戻ってこられた……！)

今度こそ対岐城に入れると、胸を撫でおろす朱華。

――だが、城下町のなかを進んでいくうち、またしても嫌な違和感に気づいてしまう。

町に人がいないのだ。まるで、壱奥軍がやってきていたときのよう。

(もしかして、またなにか問題が起きてる!?)

次から次へ、一体なんだというのだろう。

朱華はひとり腹を立てながらも、おとなしく馬から降り、ゆっくりと城郭のほうへと近づいてゆく。自分の脚で歩くのは、まだあちこち殴られた痣が痛むためつらかったが、そうも言っていられなかった。

すると聞こえてくるのは、騒がしい人々の声。それも籠城のときと同じだ。  
(どこか他の藩まで攻めてきた？ そこまで、父上の影響力は落ちてるというの……?)  
対岐に戻ることができて嬉しいはずなのに、心のなかは途端に不安で埋めつくされた。  
一步一步、踏み出す足も震える。  
――その震えをとめたのは、朱華の耳によくなじむ声音だった。

「姫さまーっ!!」

呼ばれて前方に目を凝らすと、桔橋(はねばし)を渡って近づいてくる人の影が見える。  
それが誰かなど、考えるまでもなかった。  
引いていた馬の手綱を放し、朱華も無意識に走り出す。

「櫂……！」

(あたしだって、いつも素直でいたかった！)

本当は、いつでもこの腕のなかにいたかった。  
そんな思いを抱きながら飛びこんだ先は、仮初めの楽園だ。  
朱華はそれとわかっていて、久々の感触を貪った。

「櫂……無事でよかった……」

「それはこっちの台詞です、姫さま！ そんなにぼろぼろになって……でも、本当によくご無事で帰ってきてくださいましたっ。もう少し遅かったら、今度こそ迎えにいらしたところでしたよ……！」

着物を通していても、抱きしめる櫂の腕の熱さが恥ずかしいほどに伝わってくる。たくさんの痣に触れられる痛みすら、愛しいもののように思えた。

(想いは着物をすり抜けるのかしら?)

咄嗟にそんなことを考えた朱華は、櫂の腕以上に熱くなった顔をその胸もとにうずめる。

「――あのね、レオと鷹雄が助けてくれたの」

「あ！ 鷹雄には僕も助けられましたよ。そのおかげで無事に戻ってこられたんです。もちろん、姫さまから預かった語典もちゃんと持ってきました！ 今みんなで手分けして、語典を書き写しているところなんです。対岐にあるものだけでは足りなくて、他の藩からも紙や墨を分けていただいて……今、城郭のなかは大騒ぎですよ！」

そこまで聞いて、朱華はやっと悟った。顔をあげて櫂の顔を見やると、問いかける。

「もしかして、城下町の人たちもみんな城郭のなかにいるの？」

期待が恥ずかしさを超え、赤面していたこともきれいに忘れてしまった。  
対する櫂も朱華の顔をまっすぐに見返して、満面の笑みで頷く。

「ええ、そうなんです」

答えながら、自分の腕にかけていた桜色の着物を広げ、朱華の肩の上からかぶせた。

「みんな作業をしながらも、姫さまを――待っているんですよ！」

そして朱華の手を取ると、櫂はそのまま桔橋のほうへと走り始める。

(えっ？ なに？ また攻められたんじゃないのはよかったけど……)

「あたしを待ってるって、どういうことっ!？」

一緒に走りながら朱華が問いかけても、櫂の背中は何にも答えない。

(少なくとも、他のみんなから舌奥側についたと疑われてるわけではないみたいね)

もしそうならきっと、櫂は哀しそうな顔をしていたことだろう。舌奥軍についていったときから、朱華はそのことを心配していたから、少し安心できた。

桔橋を渡って、面手門から城郭のなかに飛びこむ。すると確かに、かなり多くの人々が地面に座りこん

でなにやら作業をしているのが見えた。

「みなさん！ 姫さまがお戻りになりましたよー!!」

櫂が大声で叫んだ瞬間に、それらの顔がいっせいに朱華のほうを向く。

(う、うわっ)

そのあまりの迫力に、朱華は思わずその場で一步後ずさった。

「朱華姫っ、お帰りなさいませ〜!!」

妙に揃って発せられた声には、飛ばされそうな錯覚に陥ったくらいだ。櫂がまだ手を繋いでくれていたおかげで、朱華も心をとどめることができた。なにか言わなくちゃと必死に考えてから、ゆっくりと紡ぐ。

「あ、あの――ただいま、戻りました」

(あ！ 扇で顔を隠すの忘れてた！)

そう気づいたところでもう遅いから、せめて笑顔だけは頑張った。

周囲からは盛大な拍手がわき起こる。それは実に奇妙な空間であった。

(な、なんなのよ一体っ)

全力で戸惑う朱華のもとに、今度は――

「朱華姫！」

「朱華さま！」

駆け寄ってきたのは、水蓮と梓だ。

(――ん？ 梓っ?)

「なんで梓がここにいるの!?!」

朱華が必死に都まで連れていったはずの梓だ、驚くのも当然のことだった。

梓はそんな反応をされることを覚悟していたのか、まるで怯まず朱華の袖に触れてくる。

「ごめんなさい！ 同じ女性である朱華さまでも、自ら動いて頑張っているのに、自分だけ逃げて待っていてもいいのかと、どうしても我慢できなくなってしまう……」

「梓……」

(水蓮から離れるときは我慢できても、実際に離れてしまったら我慢できなかった?)

一度吸った甘い汁の味は、そう簡単に忘れられるものではない。味わえない時間が増えれば増えるほど、もっと欲しくなる――。

朱華は自分が舌奥にいたときのことを思い出して、そう理解した。おそらく間違いではないだろう。そしてそれならば、朱華に梓を責められるわけがない。

梓の背中に腕をまわして、優しく抱きしめた。

「――謝るのはあたしのほうよ、梓。みんなに心配かけてまで舌奥に行ってみたけど、肝心の黄柏の真意は最後まで読めなかったの」

「だが、予想はついただろう？」

朱華を庇うように、言葉を繋いだのは水蓮だ。

「それだけでも状況はずいぶん違うはずだ。当面は、レオどのをどうにかすればよいことがわかっているのだからな。そのための手段も得て、こうして準備を進められているのは、すべてそなたのおかげだ」

そこまで告げると、水蓮は一步下がってその場に膝をついた。

(え……?)

そして迷うことなく、頭(こうべ)を垂れる。

「対岐を代表して言おう。まことに感謝する、朱華姫」

それに合わせて、いつの間にか同じように頭をさげていた人々が続いた。

「ありがとうございました!!」

「――っ」

先ほどは戸惑うばかりだった朱華の胸に、ほんのりとあたたかなものがこみあげてくる。それは、櫂と触れあったときとはまた違う種類の熱だ。

(あたしのしたことは、無駄じゃなかったんだ……!)

それが認められたようで、嬉しかった。

――実際には朱華自身が心配していたとおり、藩民たちから『裏切り』を疑われていたのだと聞かされたのは、水蓮御殿の大広間まで戻ったあとのこと。

(どうりでみんな、言動が大袈裟だったはずだわ)

朱華はそう心から納得した。だが、それでも嫌な気がしなかったのは、みんなが心底悪かったと思っているからこそそういう言動になるのだと、わかっているからだ。

だから朱華は、

「どうか赦してやってほしい。みな今では、そなたのことを心から信頼しているのだ」

水蓮にそう告げられたときも、少しも迷わなかった。

「もちろんよ、水蓮。もしみんなが、あたしの代わりに梓を疑うようだったら、絶対に赦さなかったでしょうけどね」

むしろくりとひと刺しすると、傍にいた櫂がぷっと吹き出す。

「姫さまのその姿が、目に浮かぶようです」

「勝手に想像しないでちょうだいっ！」

睨みを利かせて文句を言ってから、朱華はもう一度部屋のなかをぐるり見まわした。

大広間というだけあって、八十畳以上もある床のほとんどが、おびただしい量の紙で覆われているさまは、圧巻の一言だ。訊くまでもなく、書き写した語典の墨を乾かしているのだろう。

(こんなの見ちゃったら、赦すしかないじゃない)

朱華を信じていなければ、そもそも手伝うはずがないのだから。

「作業はだいぶ進んでいる。すでに写しおわった語典が、二十冊ほどあるのだ。それに――私も結構覚えてきたぞ」

後ろに立った水蓮がそんなことを告げたから、朱華は「えっ？」と振り返る。

「『覚えてきた』というのは、もしかして亀李亞語を!？」

水蓮は神妙な顔で頷く。

「ああ。櫂から聞いたが、レオどのは今現在壱奥の藩主代わりなのだろう？ それなら、藩主同士会って話がしたいと言えば、向こうも乗ってくるかもしれぬと思ってな、梓から言葉を習っていたのだ。私はこのところ、日隅(ひずみ)や阿佐(あさ)の藩主とも文(ふみ)のやりとりをしている。それを引きあいに出せば、都上に自らの存在感を示したいと思っているであろう黄柏どのも、無視はできぬはずだ」

(なるほどね)

水蓮是水蓮で、自分の役目を必死に考えていたらしい。会って話すということはかなり危険を伴う行為ではあるが、レオと直接会話できるならば話は別だ。それはレオ自身の本心を知る手がかりにもなる。そして――

「それなら水蓮、その場に梓も一緒に連れて行ってあげてよ」

そう、梓とレオを引きあわせることもできるのだ。

しかし朱華の意図がわからない水蓮は、隠すことなく眉間にしわをつくる。

「通訳をさせる気か？ さすがに危険すぎる！」

その反応に、朱華も眉を寄せた。

「確かに危険かもしれないけど、その価値はあるのよ？　そもそもレオが奏和に来た目的は、生き別れた家族を捜すためなの」

「なんだって……？」

驚きの声をあげる水蓮の後ろで、梓も目を丸くしている。

朱華はそんな梓に近寄っていくと、光を拡散する柔らかな髪にそっと触れた。

「亀李亞の人たちはみんな同じ色を持つてるのかとか、きょうだいでは色は同じなのかとか、細かいことはよくわからないけど——こうして近くで見ても、梓とレオの色は同じに見えるわ。一度会っておく価値はあるはずよ。違ったとしてもそれこそ通訳はできるし、それにもし本当にふたりが家族だったなら、レオも納得して亀李亞に帰ってくれるかもしれない」

(結果的にそれが、レオを助けることにも繋がるの)

朱華はもう一度水蓮を見やって、強い目で訴えた。梓を危険に晒したくない水蓮の気持ちもよくわかるが、レオと梓を引きあわせることができそうな機会は、他にないだろう。自分を助けてくれたレオのためにも、頷いてほしかった。

(——あ、そうだわっ)

そこで朱華は、レオが悪い人ではないことを表す証拠を思い出す。自分の胸もとに手を差し入れ、布地と布地のあいだから一枚の紙を取り出した。

「ねえ梓、これを読んでくれない？」

梓に手渡すと、紙に目を落とした梓ははっと息を呑んだ。

その紙が文であることは、朱華も馬上で一度確認したから知っていた。だが、すべて亀李亞語で書かれたものであったため、まったく読めなかったのだ。

(あのときはレオも、黄柏から語典を借りて翻訳するような余裕がなかったんだわ)

だからこうして文にして持たせたのだろうと、朱華は予想していた。つまり、この文のなかにはレオが自分を助けた理由が書かれているはず、と。

「なんなのだ？　それは」

訝しげに問いかけた水蓮に、朱華は胸を張って答える。

「地下牢に捕まってたあたしをレオが助けてくれたときに、くれたの。さあ読んで、梓！」

朱華が促すと、梓は少し戸惑ったような表情を浮かべながらも、奏和語で読みはじめた。文中に難しい言葉が使われていたのか、読みながら何度かつかえたが、大体こんな内容だった。

『おまえが胸に小刀を隠していると気づいたとき、おまえも俺と一緒に、なにかの覚悟を持ってここに来たのだとわかった。だからなるべく手伝ってやろうと思ったのだが、そのせいで黄柏に目をつけられてしまい、すまなかった』

(全然レオのせいなんかじゃないのに)

そんなふうには捉えられていたことが、朱華には少し哀しい。

『おまえが黄柏に殴られたときも、本当は助けたかった。しかし、あそこで俺がとめに入ったら、俺自身も拘束されてしまうかもしれないと感じた。それほどに、あのときの黄柏は様子がいつもと違って見えたのだ』

黄柏に従っていたレオでさえそう感じたというのだから、よほどのことだろう。

(きっと、あたしに出し抜かれたのが悔しくて、ぼろが出たんだわ)

恐ろしい形相をしていた黄柏と、その奥にいたレオの驚いた表情を思い出し、朱華の胸はじくじくと痛む。

『俺にはおまえの目的はわからない。だが、ずっとここには危険だと、それだけはわかっていて。いずれおまえを逃がすために、俺は捕まるわけにはいかなかったのだ。――黄柏をとめてやれなくて、本当にすまない。黄柏につけられた傷が、どうか早く治りますように』

朱華の身を案じる真摯な言葉に、水蓮は「ほう」と感心したように目を細めた。対して隣の櫂は、怒りをこらえるようにぶるぶると震えている。

「ひ、姫さま？ この人になにかされてやいないでしょうね!？」

『『なにか』ってなによ？ 別にたいしたことは……』

(ちょっと抱きしめられたり、胸もとを触られたりしたくらいよ)

朱華が後半を口に出せなかったのは、すでに青筋を立てている櫂に気づいたからだ。

案の定櫂はすぐに食いついてきて、

「口ごもるあたりがあやしいですよ！ 姫さま、正直に仰ってください――」

水蓮の腕に制され、途中で言葉を切った。

「水蓮……？」

小さく名を呼んだ朱華に、水蓮はこくりと頷く。

「そなたの言いたいことはわかった。黄柏どのはともかく、レオどのは信頼に足る人物らしいな。文のなかに見えるレオどのは覚悟が、『家族を捜すため黄柏どのに従うこと』だとするならば、レオどの自身も好きで今の黄柏どのにつきあっているわけではないのだろう」

「でしょ？ そう思うでしょ？ あたし、このところずっとレオと一緒にだったけど、言葉は通じなくても心根のいい人だということは、ちゃんと伝わってきたの」

胸に手を当てた朱華の指先には、懐刀の感触があった。たったこれだけで自分の覚悟を見抜き、助けようとしてくれたレオが、悪い人であるはずがない。そう思う。

「会いたいという希望の文も、黄柏じゃなくてレオに送れば、きっとレオがうまくやってくれるはずよ！」

最後にはこぶしをつくって、朱華は叫んだ。

それに対し、面白くなさそうに口を挟むのはやはり櫂だ。

「しかし姫さま、黄柏さんを通さずに文を送ることなど、可能なんでしょうか？」

まるで「できないほうがいい」と言わんばかりの口ぶりに、朱華は苦笑する。

「そんなに怒らないでよ、櫂。レオとは本当になにもないから。ただあたしがレオを黄柏から助けたいだけなの。いい？ あたしやあんたが鷹雄に助けられたように、レオも助けてもらうのよ」

「なるほど、鷹の脚につけて飛ばすのか」

先に納得した水蓮が口を開くと、横から梓も乗ってくる。

「では、わたしが亀李亞語で文を書きますね！ あと、お会いするときも水蓮さまについてゆきますっ」

「梓っ!？」

その宣言がよほど意外だったのだろう、水蓮は大きく目を見開いて隣を見やった。

梓は笑顔でその視線を受けとめると、少し興奮した様子で告げる。

「たとえ危険でも、行きたいのです！ ――わたし、亀李亞にいた頃はずっと同じ部屋に隔離され、ただひたすらにいろんな書物を読まされていました。その部屋には毎日いろんな人がやってきましたが、誰もわたしが本当に知りたいことは教えてくれなかった……！」

「それって――」

言いかけた朱華を遮って、梓はゆっくりと頷いた。

「自分がどうしてそんな境遇におかれているのか。なぜ部屋から出られないのか。――そう、どの人が家族であるのかさえ、知ることができませんでした」

「なんと……!？」

その話は水蓮も初耳だったのか、小さく呟いた声には驚きが混じっていた。

(そっか。梓の芯の強さはきっと、奏和で育まれたものだけではないのね)

母国では部屋に閉じこめられ、やっと外に出られたと思ったら人攫いの仕業だったなど、梓が水蓮に話せなかった気持ちもよくわかる。

そして今、「行きたい」と願う気持ちも。

「こんな、自分の出自すらわからないわたしでも、なにか役に立てるといふのなら、ぜひ行きたいのですっ。それでもし本当に、そのレオさんというかたが家族だとわかれば、わたしも嬉しいですし……どうか連れて行ってくださいませ、水蓮さま！」

その、嬉しさと淋しさの入り交じった複雑な表情には、誰も異を唱えられなかった。

(三)

レオがうまく誘導したのか、はたまた黄柏(おうばく)が自ら行くと言い出したのかはわからないが、壺奥(いつ)からは『可』の返事が来た。そこで水蓮が選んだ場所は、対岐(つき)と壺奥の藩境近くにある小さな茶屋だ。誘ったのが対岐側だったということで、対岐寄りの場所になった。

(旅人向けの茶屋、かぁ。梓を連れて都に戻ったときを思い出すわ)

それからまだ二週間ほどしか経っていないのに、朱華にはもう懐かしく感じられた。あのときは、萩以外のもうひとりの存在が気になって、なかなか茶屋に近づけなかったのだった。萩が手招きをしていると、梓が気づいてくれなければ、朱華はいつまでも他に誰か隠れていないかと警戒していたことだろう。

(――そう、たとえばこんなふうに、ね)

考えながら、朱華はひとり口もとを歪めて笑う。

今現在朱華がいる場所は、集合場所である茶屋の近くにある茂みだ。そこに隠れて、櫂とともに身を低くしていた。今回ふたりが命じられたのは、見張り役。というのも、会談の参加者は、対岐側から水蓮と梓、壺奥側からレオと黄柏ということにしてあるため、同席ができないのだった。また、こちらがあまりたくさん守人を引き連れていては、向こうも警戒するだろうということで、楊ひとりが少し離れた位置で待機していた。

「何事もなく、無事に終わるといいんですけどね……」

茶屋の前、赤い布の敷かれた床机に四人が揃っている様子を見て、櫂がぼつりと呟いた。

それを拾った朱華は、櫂を励ますように強い口調で告げる。

「大丈夫よ。あの四人のなかで、敵なのはきっと黄柏だけなもの！」

しかしそれは、櫂には逆効果だったようだ。

不意に着物の袖を引かれ、朱華が振り返ると、そこには櫂の真剣な顔があった。

「姫さま、あの人のことを、あまり見つめないでくださいよ」

などと言いつつも、櫂自身は朱華をじっと見つめてきて、そんな場合ではないのに朱華の体温は変わってゆく。

(櫂ったら、まだレオのことを気にしてるのね)

そうと気づいていても、自分のなかにあるレオを助けたいという気持ちをうまく説明できない朱華は、ごまかすしかなかった。

「なに言ってるの！ あたしが見てるのは、梓だからっ」

無理に身体の向きを戻し、再び四人のほうを見やる。

そんな朱華を、今度は後ろから強く抱きしめる櫂。

「姫さま――どうか、僕だけを見ていてください」

耳もとで囁かれた言葉が、その部位をさぁっと赤くする。

「だ、だからっ、今はそんな場合じゃ――」

その腕から逃れようと、朱華が身をよじったときだった。

(……あれっ?)

ぐると動いた視界のなかに、不穏な切っ先を捉える。

(今、なにか嫌なものが見えなかった?)

櫂を腕で制しつつ、茶屋ではなく辺りの様子を注意深く見まわすと、その正体に気づいた。

気づけた――朱華は咄嗟に茂みから飛び出した。

(きらりと光った、あれは矢の先……！)

少し離れた別の茂みから、誰かが弓矢で茶屋を狙っている。

それだけわかれば、朱華には充分だった。

(守らなきゃ！)

そのために、自分は今ここにいるのだから。

必死に四人のもとへと駆け寄り、そして――矢は放たれた。

(狙いは……梓!?)

いちばん手前であった方向からそう予想した朱華は、覆いかぶさるようにして梓に飛びかかってゆく。

「梓っ、伏せて!!」

「え……？」

梓が驚いたように振り返ったのと、朱華の左肩に鈍い痛みが走ったのは、ほぼ同時のことだった。

「い――っ」

朱華はそのまま赤い布の上に倒れこむ。

「朱華さまっ!?!」

「――！ 楊っ、犯人がそちらへ向かったぞ!!」

すでに泣きそうな声になっているのは梓、すぐに状況を把握して指示を出したのは水蓮だ。

そして、

「おやおや朱華姫、こんな場所でお会いするとは、奇遇じゃな」

「ハネズ！ アクブオィジアドゥっ!?!」

さして驚いたふうもなく告げたのは黄柏、朱華に近寄ろうとして黄柏にとめられたのはレオだった。

(黄柏のこの反応……もしかして、矢を放たせたのは――)

「く……っ」

考えたいのに、左肩の痛みがどんどん増幅していて、朱華の思考はまったくまとまらない。じくりじくりと侵食するように刺激してくるものは、もしかして毒だろうか。

(せめて、矢だけでも……っ)

朱華はなんとか身をよじると、右手で左肩に刺さった矢を掴んで引き抜いた。矢を射た犯人も朱華の登場に驚いたせいなのか、あまり深く刺さっていなかったのがさいわいだ。

「突然矢が飛んでくるなど、対岐とは実に恐ろしい場所じゃな。これ以上の長居は無用。こちらの用も済んだことじゃし、帰るぞレオ！」

降ってきた黄柏の勝手な発言に、朱華はぜいぜいと息を吐きながらも顔をあげる。すると、目が合ったのは黄柏ではなく、大きな身なりに似合わず心配そうに眉を八の字にしたレオだった。

(レオ……)

それでもレオは、黄柏に逆らわず腕を引かれてゆく。

(助け…たいのに……)

手を伸ばせば、すぐ届く位置にいるのに。

見送るしかできない自分に、左肩の傷以上に胸が痛かった。

最初から赤い布地をさらに赤く染めながら、朱華は瞳からも雫を落とす。

「朱華さま!?! 痛みますかっ?」

それに反応した梓の声が、おそらく水蓮の目を覚ませせたのだろう。

「……っ、すぐに黄柏どのを追って――」

「駄目、水…蓮。対岐内で、攻撃なんかしたら…問題に、なるから……っ」

身動きしながら朱華がとめると、水蓮は苛立ったように朱華を見おろす。

「だがっ、そなたとて見たらろう!? あの反応は……」

「わかってる、けど、駄目！」

なおも必死に訴える朱華に、水蓮はやっと冷静を取り戻したようだ。

朱華の左肩にできた傷口と、傍に落ちている矢を見やり、さっと顔をあげる。

「なにをしている櫂！ 早くこちらへ来いっ」

水蓮が声をかけたのは、先ほどまで朱華たちが潜んでいた茂みのほうだった。つまり櫂は、そこから動いていないらしい。

(櫂……?)

朱華が痛みをこらえて顔を向けると、櫂はまっ青な顔をして立ち尽くしていた。

「矢尻に毒が塗ってあったかもしれん。すぐに吸い出さねば手遅れになるぞ！ おぬしがやらぬなら私がやるが、それでもいいのっ？」

水蓮がそこまで告げると、はっと瞳に色を戻して飛びあがる櫂。

「だ、駄目です！ やりますっ、僕がやります!!」

(四)

一体どれくらいのあいだ眠っていたのだろう。

朱華が目を覚ましたとき、視界の先にある天井は暗かった。だが、見慣れた散りゆく桜の帳が見えたから、自分の寝所にいるのだと安心する。

(――ああ、そっか。あたし、対岐(つき)城に戻る前に気を失っちゃったんだ)

左肩の傷は……と、布団のなかで少し動かしてみたら、鈍く痛んだ。熱があるのか、身体全体にもだるさを感じる。しばらくは、馬に乗ったりすることもできないだろう。それでも朱華は、自分がしたことについてまったく後悔はしていなかった。

(やっぱり、レオと梓を会わせてよかった)

そして、梓を守ることができてよかったと、心から思うのだ。

水蓮の話によると、レオは梓をひと目見るなり、「母とそっくりだ」と言っただけらしい。そして、梓の記憶のなかにもレオの面影は残っており、梓がレオの家族――妹であるのはもはや疑いようがなかった。しかも、レオの妹の名前はアズーシャというそうで、梓がつけられた奏和名とかなり近いのだ。

(レオが、家族構成やその名前を事前に教えてくれなかったのは、きっと騙されるのを警戒してたから、なんだらうな)

それは朱華に対してではなく、おそらく黄柏(おうばく)に対してだ。それらを知ることができれば、条件にあてはまる者を連れてきて、「こいつがおまえの家族だ」とまったくの他人を家族に仕立てあげること、そう難しいことではないだろう。まして、長く会っていない家族を捜しているのだから、なおさらだ。(つまりレオは、最初から黄柏がそういう人かもしれないとわかってて、それでも奏和についてきたってことよね……)

それこそが、朱華への文(ふみ)のなかで語っていたレオの覚悟なのだと、朱華は考えた。

そんな思考のなか、ふと視界の隅でなにかが動いたような気がして、顔を横にしたら――

「あれっ？ 鷹雄……？」

枕もとに置かれた行燈の横に、ちょこんと鷹雄がとまっていた。しかし、朱華と目が合った途端に、ばさばさと羽を揺らしながら――帳を揺らしながら戸口のほうへと駆けてゆく。どうやら襖が開きっぱなしになっているようだ。

(鷹雄が走っているところ、初めて見た気がする)

どうしたのだろうかとその行方を目で追っていると、入れ替わりに寝所のなかへと入ってきたのは水蓮だった。

「驚いたか？ そなたが起きたら知らせてくれるようにと、鷹雄に頼んでおいたのだ。まことに賢い鷹だな。さすが都上からの贈りものだ」

そう口にしなから帳をくぐってくる水蓮の後ろから、朱華は目を離せない。

「水蓮、ひとり？ 櫻と梓は？」

無事に対岐城へ戻っているのか――またふたりきりで会ってやしないかと、こんなときなのに気になって尋ねたら、水蓮は眉を寄せた。

「なんだ？ 見舞いが私ひとりでは不満か？」

「そ、そういうわけじゃないけど……あの、ふたりきりだとやっぱり誤解されるわよ？」

朱華はごまかすように――茶化すように答える。

すると、水蓮の顔からすうと柔らかさが消えた。

(え？ なに……？)

神妙な面持ちで朱華の枕もとに座ると、言葉を選ぶようにゆっくりと語り出す。

「今、梓と櫻も一緒にいる。誤解もなにもあるものか。――櫻がな、どうしても黄柏どのを討つと言って聞かぬのだ。今にも飛び出していきそうなところを、梓がなんとかとめている状態だ」

「な……っ」

息を呑み、身体を起こそうとした朱華だったが、痛みでそれも叶わなかった。

「無理をするな」

水蓮は乱れた布団を丁寧に直しながら続ける。

「そなたを射た犯人は楊が追っていったのだが、途中で見失ったという。だが、吉奥の方面に消えたのは確からしい。おまけに、黄柏どのの思わせぶりな態度があっただろう？ 愛しい姫を傷つけられた櫻が、怒るのも当然だ」

淡々と語る水蓮の様子に、朱華は違和感を覚える。

(なに？ なにを言ってるの？)

激高したときの水蓮ならばともかく、冷静な今の水蓮ならば、当然櫻をとめてくれると思ったからだ。しかし今の発言は、どう聞いても櫻の肩を持つ内容で――

「水蓮……？」

考えを問う視線で見あげたら、水蓮はこくりと首を動かした。

「だからといって、さすがにひとりで行かせるわけにはいかぬ。私もついてゆくつもりだ」

「駄目よそんなの！ 藩主たるあなたを、そんな危険な場所には行かせられないわっ。櫻をここに連れてきて！ あたしが説得するから!!」

朱華が強く叫んでも、水蓮はまるで動じない。

「多少危険が伴ってでも、大切な人を守るためにやらなければならぬこともあると、教えてくれたのはそなたと櫻だ。ましてそなたは、約束どおり梓を守ってくれた。狙われていたのは私なのか梓なのか、それさえもわからぬのに、そなたは守ってくれたのだ。その恩に報いたい」

すべて最初から決められていた台詞であったかのように。

「今度こそ必ず、私が櫻を守ろう」

真摯な言葉は、朱華の胸を強く打った。

「水蓮……」

(それがあなたの覚悟なの？)

言葉にならない朱華の問いに答えるのは、水蓮の手。布団のなかから朱華の右手を引き出すと、両手でしっかりと握りしめる。

「それに、対岐にはもう、いざとなったら藩を任せられるそなたがいるのだ。私が少しくらい無茶をすることも、みな許してくれるに違いない」

もし本当に許可を取ろうとしたら、誰も首を縦に振るはずがないのにそんなふう言いきった水蓮を見あげて、朱華はつい笑ってしまった。

「なあに？ その妙な自信は。あたしはまだ、あなたほど信頼されてないと思うけど」

「そんなことはない。私は、梓が城郭内で受け入れられたのも、そなたのおかげだと思っている。そなたが梓と仲良くやっていたから――そなたを疑わぬと決めたとき、梓もまたその対象から外れることができたのだ」

水蓮は至極真面目な顔でそう告げたが、朱華には正直よくわからない。ひとつ息を吐くと、

「……いいわ、あたしはもう、とめない。でも、黄柏を討つのは駄目よっ。どうか捕らえるだけにしてちょ

うだい？ 審判は父上に任せたほうがいいわ。そうでなければ、樗の胸に余計なしこりが残ってしまうもの」

せめてもの願いを紡ぐ。

「あと、絶対に無事で戻ってきて！ そうじゃなかったら許さないわよ？ 末代まで崇ってあげるから！」

今度は朱華が真面目な顔で告げたのに、水蓮に笑われてしまった。

(五)

---

水蓮が朱華の寢所をあとにしてから、少し経った頃のことだ。

襖は再び開かれ、意外な人物が顔を出す。

「――！ 梓っ？」

朱華に仕える侍女である梓は、本来であれば朱華が呼ばない限り、無断で寢所に立ち入ったりはしないのだ。

それを当人もわかっているのか、近づいてきた梓の瞳はすでに水で濡れていた。

その哀しげな色に、朱華ははっと気づく。

(梓、もしかして水蓮とあたしの話を聞いてた……？)

おそらくそうなのだろう。

倒れこむようにして朱華の傍に座った梓は、まるで示しあわせたかのように、布団のなかから朱華の右手を引き出した。

「梓……」

それに頬をすり寄せて、祈るように両手で包みこむ。

(水蓮が心配なのね)

その気持ちは朱華にだってよくわかるのだ。なにせ、櫻も一緒に行くのだから。

しかし――

「とめないの？」

答えをわかっている朱華が問うと、案の定梓はぶんぶんときれいな髪を揺らした。光と一緒に涙も飛散する。

「とめられません！ だって朱華さまは、何度もわたしを助けてくださいましたっ。水蓮さまはわたしの代わりにその恩を果たそうとしているのだと、自信を持って言えるのです！ そんな水蓮さまを、どうしてとめられましょうか……！」

その言葉は、今までの梓にはなかった自信に満ちていた。

確かに愛されている、と。

身分や色を超えてはっきりと告げられる強さが、そこにはあった。

(最初に出会った頃は、水蓮に対する遠慮から生まれた強さだったのに)

知らないあいだに、みんな前進していた。

櫻も、水蓮も、梓も。

(きっと、その成長を感じられるあたし自身も)

どうにかこうにか、同じ場所に立てているのだろう。

「――よく、頑張ったね」

心をこめて口にすると、朱華は痛む左肩を無視して、残っていた左手を梓の手の上に重ねた。

すると梓の瞳から、さらに想いが溢れ出る。

「朱華さまぁ……わたし、せめて全身全霊をかけて朱華さまにお仕えしますから……！」

朱華の視界も、つられて歪んだ。

「ありがとう梓。早く怪我を治して、みんなを安心させてあげないと、ね」

口にしながら、朱華は思う。

(素直さは、伝染するのかもしれない)

今なら釋に、「愛してる」と言える気がした一一。

(一)

朱華の寢所をあとにした水蓮は、一度政務所まで戻ろうと、板張りの廊下を軋ませながら足早に歩いていた。そこにおいてきた梓と櫂のことが、やはり心配だったのだ。

(櫂が梓を振り切って出ていくということは、まずないだろうがな)

以前であれば、朱華への愛しさゆえに冷静を保っていた櫂も、今回ばかりはそうもいかないらしい。

(――そう、今回ばかりは、私が櫂でもきつと同じことをしただろうな)

歩きながら水蓮は、ひとり口もとを緩めた――そのとき、視界のなかにちょうど櫂の姿を捉え、足をとめる。

廊下の途中、庭園へと出られるようになっていっている石の階段に腰かけた櫂は、月明かりの下で散りゆく桜を見あげていた。その姿は、先ほどまで「吉奥(いつ)にゆく！」と騒いでいた櫂とは別人のようだった。

「少しは落ちついたか？ 櫂」

水蓮が声をかけながら近づいていくと、びくりと肩を震わせた櫂が、探るような視線を水蓮に向ける。そして口もからは、

「――水蓮さまが僕についてきてくださるのは、梓さんのためなんですよね？」

そんな問いが飛び出した。

瞬間的に、水蓮は理解する。自分も行くなどと、櫂にはまだ伝えていなかったからだ。

「盗み聞きか？ ずいぶんと悪趣味だな」

「すっ、すみません！ どうしても気になってしまって……梓さんと一緒に覗いてしまいましたっ！」

櫂は段差から脚を引いて板の上に正座すると、勢いよく頭をさげた。

(なるほどな)

『ふたりきりだとやっぱり誤解されるわよ？』

そう笑っていた朱華の言葉は、あながち間違いではなかったようだ。櫂はどうやら、水蓮が朱華のためにそれを選んだのではないかと、疑っているらしかった。

水蓮はぼんと櫂の肩に手を置いてから、自分も櫂の横に座りこむ。

「その梓はどうした？」

「ひ、姫さまに話があると言って、寢所へ向かいました」

「そうか」

それから水蓮は、先ほど櫂がしていたように、石段に脚を載せ庭園のほうを見た。

庭園の中央には小さな池があり、その池に月を映して見るのが、水蓮の最もお気に入りの風景だった。しかし今は、散った桜の花びらが水面にたくさん浮いており、見あげなければ月の姿を見ることはできない。目をつむれば、いくらでも思い返すことができるのに。

(わかっているはずのことを不安がるなど、まるで櫂のようではないか)

そんなことを考えて、水蓮は「くく」と小さく笑った。

「水蓮さま……？」

怒るところか突然笑い出した水蓮を不思議に思っているのか、櫂は上半身をまだ前に倒したまま顔だけあげる。

それを横目で見やった水蓮は、おもむろに口を開いた。

「櫂。おぬしは、朱華姫の想いを信じておらぬのか？」

「へっ？ お、想い……ですか？」

「朱華姫は確かに、自分の本心を素直に口に出すような姫ではないかもしれぬが、それでも私にさえはっきりとわかることなのだぞ？」

告げたら、櫂の頬がさっと朱色に染まる。それを隠すように、再び顔を下に向けた。

「ぼ、僕自身も、姫さまが僕のことを気に入ってくださっているのは、当然わかっておりますよ!? しかしですねっ、その感情の名を、果たして姫さま自身がはっきりとわかっているのかといえば、ちょっと疑問ではないでしょうか？」

その反応には、これまで櫂のことをわりと買っていた水蓮でも、いささか腹が立った。

手を伸ばして櫂の頭に置くと、そのまま下に押しやる。

――ごつんと、鈍い音がした。櫂のひたいと床板がぶつかったのだ。畳よりは遥かに痛そうな音だった。

「な、なにをするんですかっ!？」

水蓮の突然の行動に、ひたいを抑えながら飛び起きた櫂は、後退して少し距離を取る。

だがその距離を詰めるのは、水蓮の鋭い視線だ。

「おぬしは一体、朱華姫のなにを見てきたのだ？ 朱華姫がたったひとりでこの対岐(つき)にやってきたその日、実父たる都上の言いつけを破ってまで選んだものは、なんだった？ 私にはあれが、朱華姫のいちばん素直な告白であったと思うがな」

痛みからか櫂の瞳に浮かんでいた水が、すうと引いてゆく。目が、大きく開かれてゆく。

それを確かめながら、水蓮はなおも言葉を紡いだ。

「朱華姫が必死になって梓を守ってくれるのも、裏を返せばおぬしを守りたいがためなのだ。だのにおぬしときたら、自分の思いばかりを押しつけ、朱華姫の想いをまるで信じていない」

「そ、そんなことは……っ」

「ないと言うならば！ レオどのにせよ、私にせよ、朱華姫の傍に誰が来たところで、同じことだろう？ 変に嫉妬したり疑ったりせずに、ただ朱華姫の想いを信じていればよいだけではないか！」

つい気持ちがこもりすぎて、大きな声になってしまった。

だがそれが、櫂に対しては有効だったようだ。

尻もちをついたような体勢になっていた櫂は、さっと正座に戻ると、再び丁寧に頭をさげる。

「――まったくもって、水蓮さまの仰るとおりですっ。嫌な思いをさせてしまって、申しわけありませんでした！」

今度は勢いがつきすぎて、ごんっと先ほどよりも大きな音がした。賢いくせに、学習能力はあまりないらしい。

「っ……」

それでも必死に痛みをこらえている櫂の姿を見て、水蓮は「はは」と笑いながらも冷静さを取り戻す。

「……まあな、おぬしの気持ちがわからぬわけでもないのだ。都にいた頃は、おぬし以外の男が朱華姫に近づいたことなどなかったのだろうか？」

「当然です！ 僕が必死に、誰も近づかせないようにしておりましたからっ!!」

両手にこぶしをつくって、櫂は力いっぱい答えた。

だが水蓮にとってみれば、それが櫂の失策に思えたのだ。

「そのせいで、免疫がないのだよ。おぬしも――朱華姫もな」

「あー……」

(だからこそ櫂は朱華姫を信じきれず、だからこそ朱華姫は素直になれない)

急激な環境の変化が、ふたりを余計ちぐはぐにしまったのだろう。

「――そう…なのかもしれません」

櫂はしゅんと眉尻をさげて、水蓮の言葉を素直に受け入れる。

そういう櫂だからこそ、水蓮はやはり櫂を嫌いにはなれなかった。

(私たち四人は、結局のところ似た者同士だからな)

今櫂に告げた言葉は、すべて水蓮自身にも返ってくる。

相手の想いを信じろと。

たとえ言葉が足りなくとも、想いの欠片を拾い集めて、自分で組み立てればいい。

水蓮と梓も、朱華と櫂も、決して対等な立場ではなかったから一言言葉を超えられるものが、必要だったのだ。それに気づくことが。

水蓮はもう一度月を見あげてから、池の水面を見やった。そしておもむろに立ちあがると、櫂に向かって言い放つ。

「明朝、出立するぞ」

ぱっと顔をあげた櫂の目に、もう迷いはなかった。

「はい！ 僕は姫さまのためにっ」

つられて水蓮も、そのあとに続ける。

「私は、梓のために――」

(二)

---

(事前に文(ふみ)で知らせておけば、レオどのも協力してくれるかもしれぬな)

そう考えた水蓮は、その夜寝る前に、梓に頼んで亀李亞(カメラリア)語の文を書いてもらった。それを鷹雄の脚に括りつけ、一度は成功した方法を試みる。

「鷹雄、いいか？ 梓さんと同じ髪の色をした、レオさんという人に渡すんだぞ？」

自分の腕にとまった鷹雄に何度も言い聞かせてから、櫻はその腕を振りあげて鷹雄を放した。

(あれで理解できているのか?)

その様子を見守っていた水蓮にとっては不思議で仕方がないが、朱華も同じ方法で鷹雄を操っていたのだから、おそらく大丈夫なのだろう。

鷹雄は夜空をぐるりと旋回したあと、壱奥の方角へと向かって飛んでいった。

その姿が見えなくなるまで見送ってから、水蓮はいつもより早い眠りにつく。

――翌朝は、壱奥へと向かう準備で大忙しだった。

そう、水蓮はなにも、櫻とふたりだけで壱奥に行こうとしていたわけではなかったのだ。

「水蓮さま、馬車の用意が調いました！」

寝所で刀の手入れをしていた水蓮のもとに、襖の向こうから楊の声が届く。

水蓮は刀身を拭く手をぴたりとめると、

「積み荷は？」

「はい、今櫻さんが確認して――あ、こちらに来ましたよ」

楊が言いおえた途端に、「失礼いたします！」と威勢のいい声が聞こえ襖が開いた。

「水蓮さまっ、現在までに完成している語典五十冊、すべて積みおわりました！」

汗だくになった櫻が、それでも笑顔を見せながら入ってくる。

「紙って、束ねるとあんなにも重くなるんですね。運ぶのに結構体力がいりました」

どうやら櫻は、普段あまり書物を読まないらしい。

水蓮は口もとだけで笑うと、刀を鞘へと戻してから立ちあがる。

「今からそんなに疲れていて大丈夫か？ 自慢の槍の腕が鈍るのではないか」

「そちらは散々鍛えておりますから、平気です！ 水蓮さまこそ、刀を振る姿など見たことがありませんけれど、大丈夫なんですか？ それ、いつもあそこに飾ってあったものですよ」

告げる櫻の視線が向かった先は、寝所の上座にある床の間であった。壁からはひと組の刀掛けが飛び出しているが、そこに刀は置かれていない。櫻の言うとおりに、そこにあったものを今水蓮が手にしているからだ。

(やはり抜け目がないな、櫻)

意外とよく見ているものだと感心しながら、水蓮は襖のほうへと歩き出す。

「心配ない。寝る前に手入れをしたり、振りを確かめたりするのは、いつものことだ」

「あっ、もしかして水蓮さまがいつも遅くまで起きていたのって……」

本当はそれだけではないのだが、櫻が期待の眼差しを向けてきたので、水蓮は頷いてやった。

「藩主たるもの、常に不測の事態に備えておかねばな」

すると案の定櫻は、ますます瞳を輝かせて口に出す。

「さすがです水蓮さまっ！」

「おだてなくてよい。それより、さっさと行くぞ」

「はい！」

そうしてふたりはすぐに面手門へと向かい、それぞれに用意されていた馬に跨った。そのまま桔橋(はねばし)を渡っていくと、先に待機していた馬車が見える。

(桔橋はその特性上、あまり頑丈ではないからな)

櫂が語典の重さを訴えていたのは、なにも大袈裟だったわけではないのだ。分厚い語典を五十冊も積んだ馬車が通ったら、桔橋が壊れてしまう可能性があった。そこで少しずつ運びこみ、向こう岸で馬車に積んだのだった。

ではなぜそうまでして語典を運ぶのかといえば、壱奥に向かう目的が黄柏を捕らえるためだけではないからだ。レオに対する誤解を解くためにも、壱奥の人々に亀李亞語を教えることは急務であった。なにせ壱奥は、奏和の最南東に位置していることもあり、外国船が入って来やすい。そのとき言葉が通じなければ、また似たようなことが起こってしまう可能性があった。

(今はまだ五十冊だが、対岐城内ではさらに作業が進んでいる)

一度は壱奥軍に襲われ恐怖を味わった城下町の人々も、水蓮の説得に応じ手伝ってくれているのだ。その頑張りや、少しも無駄にはしたくなかった。

水蓮は強い意思を持って、出立の合図を告げる。

「――さあ、行くぞ！」

馬に乗った水蓮と櫂を先頭に、語典を乗せた馬車と、数人の守人たちの馬が続いた。

馬だけならば十時間ほどで着ける距離だが、重い荷物を載せた馬車が同行しているため、そうもいかない。それでも道中はつつがなく進み、もうすぐ壱奥との藩境が見えてくるところで、東の空に変化が見えた。

(む？ あれは……)

空を飛ぶなにかが、近づいてきていたのだ。

「あ！ 鷹雄ですっ。おーい！」

櫂もそれに気づいて、馬の脚をとめると大きく手を振った。

すぐに反応して、鷹雄が低く降りてくる。その脚には、放したときと同じように白い紙がくくられていた。

「レオどのが返事をくれたのだろうか？」

「待ってくださいね、今取ります」

自分の左腕に鷹をとめると、櫂は器用に右手だけで文を外す。その中身を見ることなく水蓮に手渡したのは、おそらく亀李亞語で書かれていることを予想したからだろう。

水蓮は口もとに苦笑を浮かべながら、馬を近づけてそれを受け取った。くるくると巻くようにして折ってある紙を開いていくと、見覚えのある癖の文字が現れる。

(――え？)

当然だ。それは梓の字だったのだから。

「どういうことだ……？」

鷹雄の脚につけられていた文は、変わっていなかった。同じものがつけられたままになっていただけなのだ。それはつまり、レオには届いていないことを意味していた。

「なにが書いてあったんです？ 水蓮さま」

動きをとめた水蓮に、首を傾げた櫂が声をかける。

水蓮は櫂に文面を見せると、

「これは梓に書いてもらった文そのままだ。もしや、鷹雄がレオどのを見つけられなかったのではないか？」

「えっ!? そ、それって――」

賢い樗は、それだけでも水蓮の言わんとしたこと気づいたらしい。まっ青な顔で、遠慮がちに先を続ける。

「――レオさんまで、どこかに捕まっているということですか？」

「可能性がないわけではないだろう。レオどのも、茶屋での茶番を目の当たりにしているからな」

(そう、考えれば考えるほど、あのとき狙われたのは梓である可能性が高いのだ)

心のなかで、水蓮はつけ足した。

あのとき――水蓮と梓、そして黄柏とレオが藩境近くの茶屋で会談をしたとき。偶然同席した梓が、レオの本当の家族であったことに、黄柏は心から驚いていたようだった。

(それもそうだろう、これまでレオどのを操っていた口実がなくなるのだからな)

水蓮たちにしてみれば、それは願ったり叶ったりの展開であったのだが、黄柏にとっては邪魔なものではなかったと考えられるのだ。

(だから黄柏どの、当初は私を狙わせる予定だった矢を、梓に向けて放たせたのか?)

対岐が梓を殺したのだと思わせることができれば、レオは完全に壱奥の味方になるはずだと、黄柏は思っていたのかもしれない。それが水蓮の予想だった。

(だがもし、その意図にレオどのが気づいていたのだとしたら――)

当然黄柏を責めることだろう。レオは朱華を気に入っていたようだから、なおさらだ。その結果黄柏に捕らえられ、殺されてしまうことも、十分に考えられた。――そう、黄柏の弟である眞柏と同じように。

水蓮は樗の目をまっすぐに見やると、意思を確認するように告げる。

「――目的が、もうひとつ増えたな」

「ええ! レオさんを助けられたら、梓さんも姫さまも喜んでくれるはずですよ」

はっきりとそう、樗は応えた。

(昨夜の会話で、ちゃんと吹っ切れたようだな)

レオを助けるのは嫌がるだろうかと一瞬だけ心配していた水蓮は、ほっと胸を撫でおろす。

その後すぐに藩境へとさしかかると、当然ながら壱奥側の兵士にとめられた。

「な、何者だ! その馬車の中身はなんだ!? まさか武器ではないだろうな??」

そんな問いかけに水蓮が思い出したのは、朱華から聞いていた話だった。

(壱奥の兵士たちは、対岐からの報復を恐れていると言っていたな)

藩境を警備している彼らは特に、そうなったときのことを考え、警戒を強めているのだろう。

水蓮は冷静に言葉を選び取り、口を開く。

「私は対岐の藩主・水蓮と申す。最初に言うておくが、報復に来たのではない。どうか安心してほしい」

水蓮自らがあえてその二文字を出すと、寄ってきた兵士たちはびくりと肩を震わせた。

「対岐を襲ったのはあなたがたの意思ではないと、話に聞いている。我々はむしろ、あなたがたの手助けをしたいと思い、こうしてやってきたのだ」

今度は互いに顔を見あわせ、戸惑いの表情を見せる兵士たち。まだ水蓮の意図がわからないのだろう。

すうと息を吸い、先を続ける。

「実はな、壱奥の人々に亀李亞語を教えてほしいと、現在壱奥の藩主を代行しているレオどのから、秘密裏に頼まれた。対岐には亀李亞語ができる者がいるのでね、我々は今回の戦がレオどのの判断でもなかったことを知っている。だからこそ、レオどのの願いを聞き入れることにしたのだ」

嘘の言葉でも、先をこじ開けるために、自信を持って紡いだ。

「ほら、馬車の積み荷を見てくれ。すべて対岐で書き写した亀李亞語の語典だ。これを壱奥の人々に渡した

い。特に壱奥城で働いている城兵たちに、な。――通ってもよいだろうか？」

他藩の藩主である水蓮の言葉を、どの程度信じてもらえるのか、水蓮自身にもわからなかった。それでも根気よく、兵士たちの顔をひとりひとり見ていくと、少しずつの変化が見える。

やがて、ひとりの兵士が決心したように口を開いた。

「――正直に申しますと、壱奥の兵士としては、あなたさまのお話をすべて信じるわけにはいきません。ですが、亀李亞語を知りたい気持ちはあるのです。レオさまのお言葉がわからないのは、我々も常々困っておりましたから」

その口火を逃がすまいと、水蓮はすぐに言葉を繋ぐ。

「そう、レオどのが決して恐ろしい男ではないことに、みな薄々気づいているのだろう？ 言葉がわかれば、すべて解決する。私は壱奥と隣りあう藩の主(あるじ)として、これからの壱奥と友好的関係を築くためにも、その手伝いをしたいと申し出ているのだ」

きっぱりと言い切った水蓮に、兵士たちがいっせいに目を丸くした。逆のことを言われるのではないかと思っていた彼らにとっては、寝耳に水の話だったのだろう。

気がつくやうに、水蓮の前には道ができていた。兵士たちは両側に分かれ、期待をこめた目で水蓮を見あげている。誰も戦など望んでいない、できれば仲良くしたいと、訴える目でもあった。

そこで水蓮は、後ろの馬車から語典を一冊持ってこさせると、先ほど発言した兵士に渡し、「私は、壱奥の人々の勤勉さに期待している。ぜひみなが亀李亞語を使えるようになり、奏和と異国を結ぶ玄関口として活躍してほしいのだ。――都上もきっと、それを期待していることだろう」

次いで励ましの言葉をかけると、その兵士の顔にぼっと光が灯る。

「あ、ありがとうございます……！ 一生懸命勉強いたしますっ！」

水蓮の言葉がよほど嬉しかったようだった。

(あまりこのような言葉をかけられたことがないのだろうな)

他藩の藩主に期待されたり、都上に期待されたりと、一介の兵士にはまず縁のないことだ。――もっとも、都上の期待は水蓮が勝手にでっちあげたものだが。

(そう考えるしかないだろう。現に都上は、まだまったく動きを見せていないのだから)

水蓮が壱師への文(ふみ)を送ったのは、対岐城に日隅(ひずみ)軍が到着したのと同じ日のこと。つまり、十日以上も前のことなのだ。もうとっくに壱師のもとに着いているはずであったし、なにか返事があったもおかしくはなかった。――しかし、現在までにはなんの動きもない。だからこそ水蓮や朱華も、まだ自由に動けてはいるのだが、向こうの出方がわからない以上少々不安ではあった。

(今は、都上が信じてくれているであろう自分たちを、信じるしかない)

櫂に目配せをして、ふたりで頷きあい、再び馬を走らせ始める。

黄柏を捕らえた先に、一体なにが待っているのか。

壱師は、水蓮や朱華や黄柏に、どんな審判をくださのか。

先はなにも見えなかったが、壱奥城を目指す思いは変わらなかった。

(守りたいものがある)

朱華との約束。

そして梓。

対岐の人々。

さらには、壱奥の人々。

(いちばんわがままだったのは、やはり私なのだ)

改めてそう思う。

危険を避けてそれらを守ろうとしていた。守れると思っていた。

水蓮は、無知だった。

それを自覚した――今は違う。

(私はもう、逃げない)

隠れない。

今度こそ立ち向かっていこうと、水蓮は手綱を強く握った。

(三)

---

一行が壱奥(いつ)の城下町まで辿り着くと、辺りは閑散としていた。

(これが城下町なのか……?)

水蓮がそう疑いたくなるほど、活気のない町であった。町並み自体は対岐とよく似ているものの、この静けさは対岐では考えられない光景だ。

「まるで、僕らが籠城していたときの城下町のようなですね」

水蓮の隣に馬をつけた櫂が、そんなことを言う。

「なるほど、確かに近いな」

水蓮は納得の声をあげた。

水蓮と櫂は籠城をしていたのだから、そのときの城下町に実際にはおりにない。しかし、天閣の最上階にある高い窓からよく見張っていたため、その様子を知っているのだった。

(だが、だとすればこの城下町の人々は、私たちを対岐軍だと認識しているのか?)

次に浮かんだ疑問に、自分で即答する水蓮。

(――いや、そんなはずはない。こんな少人数の一行を見て、軍と思うものか)

だいいち、軍ならば堂々と藩紋のついた旗を掲げて入ってくるものだ。壱奥の町民たちとて当然その知識があるだろうから、なにも掲げていない水蓮たちを軍と勘違いするわけがなかった。

(とすれば、他に考えられることは――)

「どうやら壱奥の城下町は、普段からこうであるらしいな」

水蓮が出した答えに、櫂は目を丸くする。

「普段から、ですか？ それって……やはりレオさんのせいなんですか?」

なにか原因があるに違いないと、すぐに思い至ったようだった。

(驚きながらも鋭いところはさすがだな)

水蓮は感心しながらも、ひょいと馬から飛び降りる。

「町民に直接話を聞いてみよう。櫂、おぬしの槍は目立つからここで待っている。楊、私に語典を」

後ろを振り返った水蓮が指示を出すと、その行動を読んでいたのだろうか、楊の手にはすでに一冊の語典があった。

水蓮は苦笑しながらもそれを受け取り、近くの平屋に近づいてゆく。先ほどから窓のあたりでなにかがちらちらと動いていたから、なかに人がいるのは確実だ。

戸口に立って、木製の戸を軽く叩いてやる。

「もし！ 私は都上の命令に従い、対岐より亀李亞語を広めるためにやってきた水蓮と申す。よければ、少し話を聞いてもらえないだろうか?」

相手にはっきりと聞こえるように、一字一句慎重に告げた。警戒されているのは当然なのだ、辛抱強く待つ。

するとやがて、ほんの少しだけ戸が開いた。そこから女性の目が見える。

「亀李亞語というのは、あのレオとかいう人が使っている言葉ですか……?」

それは単純な疑問ではなく、どこか責める色を含んだ問いかけだった。

(なんだ?)

気になった水蓮も、相手を警戒しながら答える。

「そう、言葉がわからねば困るだろう？ 相手の本心を知ることができないのだから」

「本心——」

一部を繰り返した女性は、また少し、戸の隙間を広くした。おかげで女性の顔がしっかり見えるようになると、やつれたように窪んだ目と顔色の悪さが気にかかる。

「——確かに、あの人の本心は違うところにあるのかもしれませんが」

それでも女性は、きっぱりと口にした。強い意思を感じさせる言いかただった。

「レオどのをよく見かけるのか？」

水蓮が問うと、こくりと頷く女性。

「日に一度は、みんなを脅しながら城下町をまわっておりましたよ。黄柏さまはいつも楽しそうで、あの人はいつもつらそうでしたけど……」

（脅しながら？）

思いがけない言葉に、水蓮の眉間にはしわが寄る。

「それはどういうことだ？ レオどのが言ったことを、黄柏どのが訳して話しているのか？」

「はい。あの人は大国の王子で、少しでも逆らうとそこの軍が飛んでくる——と」

「な……っ」

水蓮は思わず息を呑んだ。

（レオどのと長時間話をしたはずの朱華姫も、そんなことは言っていなかった）

水蓮自身が直接会ったときも、主に家族のことを話していた。レオと梓は亀李亞語を使っていたため、完全に聞き取れたわけではないが、そういう単語ばかりが聞こえていたのだ。

しかし——

（黄柏どのがなぜレオどのを選んだのか、私とて気になってはいたのだが、な）

抜け目のなさそうな黄柏のことだ、『見た目』や『家族を捜している』といった利用しやすい事情とは別に、なにかあるのではないかと勘ぐりたくなる部分があった。それに、レオがもし本当に大国の——亀李亞の王子だというならば、ずっと隔離されていたという梓の話も頷ける。亀李亞の情勢など詳しいことはわからないが、王女たる梓が鍵を握る存在だったのだとすれば、過保護に育てられたことにも納得できるのだ。

（これはあとで、レオどのに確認してみなければならないな）

そう考える水蓮の胸中に、やがて静かにわきあがってきたのは怒りだった。

（それにしても、自藩の民を脅して従わせるなど、なんということを……！）

レオが亀李亞の王子だという話は、黄柏の大法螺であることも充分に考えられる。だが、すでに信じてしまっている藩民がいる時点でもはや、それが本当であろうが嘘であろうが、黄柏の罪であることには違いない。

（これまで、黄柏どこのことを憎い憎いとは思っても、これほどではなかったが——）

今、同じく藩民の上に立つ者として、水蓮は心から黄柏のことが赦せなかった。

そんな強い感情を隠すように、手にしていた語典を強く握りしめる。

「——心配ない。黄柏どこの言っていることは、すべて嘘だ。レオどこの口からそんな言葉が出るはずもない。まして、亀李亞の軍が奏和に攻めてくるなど、絵空事としか思えん話だ」

「えっ!? ほ、本当ですか……？」

すっかり信じ切っていたのか、女性は大きな声をあげた。

（冷静に考えれば、わかることなのだがな）

レオの実際の身分がどうであれ、本当に自国の軍を動かせるほどの権力を持った人間であるならば、そもそも『壺奥の仮藩主』程度で満足しているわけがないのだ。それを脅しの切り札に使うつもりで奏和にやってきたのなら、狙うのは最初から壺師の地位になるだろう。

確信を持って、水蓮は続ける。

「レオどのは日頃から、城兵に対してすら穏やかに接していると聞いた。藩民相手ならば、なおさらではないのか？ それでも恐ろしく感じられるのはおそらく、見慣れない外見以上に、言葉が通じぬという理由もあるのだろう。――これを使うといい。最初は難しいかもしれぬが、何度も聴き何度も語典を開くことで、きちんとわかるようになるはずだ」

告げながら語典を差し出すと、女性は受け取る前に一言。

「あの、お代は……？」

「最初に言っただろう？ これは都上の命令に従っていること。都上がすべてを負担する」

そこまで告げてやっと、女性の瞳に明るさが見えた。

「あ、ありがとうございます！ あの人が次にいつ来るのかはわかりませんが、それまでに少しでも勉強しておこうと思います」

何気なく告げられたその言葉が、水蓮は気にかかる。

『次にいつ来るかわからない』とは、なぜだ？ 日に一度は来ているのだろうか？

女性はそこに食いつかれたのが意外だったのか、戸惑った様子で軽く頷いた。

「ええ、一昨日まではそうだったんですけど――昨日は来なかったですし、今日もまだ来ていないんですよ。眞柏さまがご病気になられたときも突然だったので、他の人には言えないですが、ちょっと心配しておりました……」

最後のほうは小声だった。

(なるほどな)

レオが捕らえられているという予想は、どうやら当たりらしい。

水蓮は丁寧に礼を告げると、女性から離れ櫓たちのもとへと戻った。

聞いた情報を櫓と楊に説明し、作戦を立てる。

「レオさんが捕らえられているならば、姫さまが繋がれていたという地下牢が怪しいですね」

「そうだな。なかはずいぶんと暗かったらしい。もしかしたらまだそこに、眞柏どこの遺体もあるのかもしれない」

水蓮と櫓は、互いに顔を見あわせ頷いた。

(それさえ見つけられれば、黄柏どのを捕らえる大義名分になる)

櫓の心に余計な傷をつくる心配もない。

それは朱華と約束したことただだけに、水蓮はどうしても叶えなかった。

「私と櫓で、壱奥城内に忍びこむか。私たちは顔が割れているから、どうせ正面からは無理だ」

「では、楊さんに隙をつくっていただきますか？ 藩境を越えたときのように、壱師さまの命令で語典を届けにきたと偽って――」

「なるほど、悪くないな。城兵たちなら、城下町の人々よりも亀李亞語に興味があるだろう」

水蓮は楊に視線を振ると、「できるか？」と確認する。

すると楊は、

「お任せください。こう見えて、人当たりのよいほうですから」

そうにっこりと笑った。

(「こう見えて」もなにも、楊はどこからどう見ても人当たりのよい人間だがな)

水蓮は口もとに苦笑を浮かべながらも、楊のさらに後ろにいる守人たちにも声をかける。

「おぬしたちも、できる限り武装を解除していくのだ。もしも身の危険を感じたら、語典を防具にでもすればよい。この厚さだ、十分な盾になることだろう」

緊張を解いてやろうと告げた水蓮の言葉に、守人たちはくすりと笑った。

(四)

壱奥(いつ)城の天閣は、白壁が印象的な対岐(つき)城のものとは違い、黒く塗り固められていた。屋根の至るところに三角形の出窓が見え、その縁は金箔で彩られており、かなり豪華に見える。

腰の左に刀を帯びた水蓮と、身の丈よりも少し短い程度の槍を手にした樗は、その高い天閣の頭を臨みながら、壱奥城を取り囲む塀に沿って裏側にまわりこもうとしていた。

(こんなふうには城郭全体を塀で囲っている場合、裏手門(うらてもん)があることが多いからな)

そうでなければ、いざ戦になったときに壱奥城側も困るからだ。対岐城が面手門だけでも平気だったのは、もともと籠城を想定してつくられているためであり、だからこそ堀もあった。しかし壱奥城に堀はなく、塀も特別高いわけではないため、籠城に向いているとは言いがたい。

(城郭内から打って出るときに、出入口がひとつでは話にならないのだ)

そんな経験をしたことのない水蓮でも、それくらいの知識はあった。

やがて城郭の裏側に至ると、裏手門の姿が見えてくる。

水蓮と樗は塀にあいた穴から姿を見られないよう、体勢を低くしたまま素早く近づいた。

時機を計るように耳を澄ませたら、城兵たちの話し声が聞こえてくる。

(楊たちが、なかに入ったようだな)

会話の内容や足音からそう判断して、ふたりは一度目を合わせた。

水蓮が門に近づき、二回叩く。

「――何者だ？」

なかから鋭い声がした。

「今、面手門に対岐の者が来ているだろう？ あれは対岐からの刺客だ！ 私はそれを伝えにきた。すぐに開けてくれっ」

水蓮がわざと切羽詰まった声を出すと、門の向こうの相手はすっかり信用したらしい。

「なんだって!? わかった、今開ける！」

すぐがちゃがちゃと音がしはじめた。

そして、門が開いた瞬間に――

「う……っ!？」

樗の鋭い槍先が、門を開いてくれた城兵のみぞおちの辺りを捉えていた。といっても、槍頭ではなく槍尻のほうで突いたため、血は出ていない。

そのまま前のめりに倒れこんだ城兵の身体を支え、水蓮は傍にあった巨木の陰へと引きずりこむ。それから素早く周囲に視線を配ると、予定どおり他の城兵の姿は見えなかった。みんな楊たちのほうに行っているのだろう。

(さて、地下牢はどこだ?)

水蓮が城兵を地面に寝かせながら、もう一度辺りを見まわしたとき、

「水蓮さま、あれ！」

小さく叫んだ樗の聲に、空を見あげる。少し離れた位置に、鷹雄が飛んでいた。

(そうか！ 朱華姫が脱出するとき、どこから出てきたのかを鷹雄は見ていたはずだ)

ならば、今鷹雄がいる近くに出入口があるのではないか？

そう考えた水蓮は、樗に「行くぞ！」と声をかけるなり走り出す。

鷹雄が飛んでいたのは、外角(そとかく)西側の隅にあるずいぶんと古そうな井戸の上だった。今は使わ

れていないのか、鉄製の頑丈そうな蓋で閉じられている。

水蓮が指示をするまでもなく、樗が率先してその蓋を外した。そのなかから出てきたのは一一井戸ではなく階段だ。

「こんなところに……？」

予想はしていたものの、水蓮には意外に思えた。

この壱奥城はいくつの角からなるのか、それはわからない。だが、大事なものならば内角(うちかく)に置こうとするのではないかと、そう考えていたからだ。

(最終的には天閣の傍まで行かねばならぬかと、覚悟していたのだがな)

しかし考えてみれば、地下牢を抜け出した朱華が無事に壱奥城から出ることができたのも、出た場所がいちばん外側の角だったからなのだ。そうでなければ、角と角の境目の門をいくつも抜ける必要があり、そう簡単に逃げることはできなかつただろう。

「この場所は、意外と盲点かもしれませんよ。誰も外角にあるなんて思いませんし、角を区切る堀の陰になっていますから、姿を見られにくく出入りも楽でしょう」

樗はそう口にする、腰に提げていた携帯用の小さな行燈を手にする。

「さあ、人が来る前に早く行きますよ！」

そして先に入っていったのは、万が一にでもなかに危険があった場合のことを考えてだろうか。

「ま、待て樗っ」

むしろ水蓮のほうが焦って、そのあとを追いかけた。

(樗になにかがあれば、朱華姫に合わせる顔がない！)

暗く狭い階段を、足早にくだってゆく。大きな足音が立ってしまったが、さいわい見張りはいないらしく、無事に下まで着くことができた。あまりにも暗い、地下牢に。

「誰かいるか！」

「レオさんっ、いたら返事をしてください!!」

水蓮に続いて、樗が小さな行燈を視界の前に差し出して声をかけると、ぎぎと縄のしなる音が聞こえてくる。次いで、

「ア……アデラドゥ？」

声は擦れていたが、間違いなくレオのものだ。

その声が聞こえた方角を頼りに、並んだ鉄格子のなかを照らしてゆく。

(まったく、なんて数だ)

この地下牢がいつから存在していたものなのかはわからないが、土壁で区切られた牢はいくつもあった。その用途など、考えたくもない。どうせろくでもないことに使われていたのだろうと、水蓮は下唇を噛みしめる。

やがて見つけたレオの姿は、かなり痛々しいものだった。両手を縄で吊られており、着物はあちこち汚れたり破れたりしている。むき出しになった腕や胸もとの色が青く見えるのは、灯が弱くて届かないからではないだろう。

「アクブオィジアドゥ？(大丈夫か?)」

水蓮が亀李亞語で声をかけると、レオの首はこくりと動いた。

横にやってきた樗が、格子戸についた鍵穴を行燈で照らす。鍵が外側についていたならば、無理やり壊すこともできただろうが、内側に一一戸と一体になっているものではそうもいかない。

それでもしばらくがちゃがちゃと戸を揺すっていた樗は、

「うーん……先に黄柏を捜して、鍵のありかを訊き出すしかないですね」

やはり無理だったのか、そう口にした。

「ああ、そうだな」

水蓮は頷いてから、レオのほうに視線を向ける。

「イソクス、エタム（少し、待て）。エドタ、ウルク（あとで、来る）」

まだ文法までは覚えきれていないため、単語で繋いだ。

それでもきちんと通じたようで、レオはもう一度頷くと――

「ミギ、トナリ……シンバク」

お返しのように、短い奏和語を紡いできた。

その内容に、水蓮と櫂は目を見開いて再び顔を見合わせる。どちらからともなく、右隣の牢の前へと移動した。

「櫂っ、奥を照らしてみろ！」

「これで限界ですよっ！」

格子の間が狭く、小さな行燈でもなかに入れることができないため、牢の奥まではあまりよく見えなかった。隣にいるレオの状態がよく見えたのは、その大きな体格ゆえだったのだ。

それでもなんとか目を凝らして見てみると、レオと同じように、上から吊り下げられている縄が確認できた。しかし、その縄が縛っていたものはもうそこにないらしく、まっすぐ下に垂れさがっている。

（縄のあいだに、なにか白いものがあるな……それを包んでいるのは布――着物か？）

眞柏の遺体が、白骨化しているのかもしれない。

「っ……」

おそらく亡くなっているだろうと予想はしていても、鳥肌を抑えることはできなかった。

――そのときだ。

「他人の城郭に不法侵入とは、感心しませんな」

突然響いた自分たち以外の声音に、ふたりは揃って両肩を揺らした。

声のした通路の奥を見やると、揺らめく光が見える。慎重に歩いているせいなのか、足音はほとんどしなかった。

「黄柏どの……」

（本命のお出ましか）

水蓮は櫂を後ろに庇いながらも、腰の左に帯びた刀に手をあてた。

「そちらこそ、眞柏どのを殺めたうえ、レオどのを利用して壱奥を操るなど、到底赦されることではないぞ」

水蓮から五歩ほど離れた位置でとまった黄柏は、手にした行燈で自らの顔を照らすと、「はっはっは」と豪快に笑う。

「なにを言っておるのじゃ？ わしは眞柏を殺めてなどおらんし、そやつも罪を犯したからこそ牢に入れたまで。責められるいわれなどないわ」

この期に及んで、しらを切るつもりらしい。

「おまえはっ――」

苛立った櫂が前に出ようとしたところを、水蓮は左手で制した。しかし、水蓮自身の柄を握る右手にもぎりりと力が入っている。

「遺体を放置しておいて、ばれないとでもお思いか？ 見くびるな！ 姿形がわからなくとも、民は主（あるじ）を見分けるぞ。この場所を知る者が黄柏どのしかいないのであれば、疑いようもないことだろう」

力強く言ってやると、さすがの黄柏もぴくりと眉を動かした。

「――ならばわしは、その民の力を借りるまでだ！」

くるりと踵を返し、見た目にそぐわない速さで駆け出す。

「待て……！」

水蓮もすぐに追ったが、行燈を持っているのは後ろの櫓であるため走りづらく、みるみる離されていった。

「櫓、行燈を貸せっ」

たまらずに櫓からそれを奪った水蓮は、土壁に囲まれた細い通路をひたすら追ってゆく。

「水蓮さま、お気をつけくださいよ！」

そんな櫓の心遣いも、耳にはろくに入らない。

(どうやって捕まえる?)

水蓮の頭のなかには、それでいっぱいだった。

力で強引に捕らえれば、壱奥の人々は不安に思うだろう。次は水蓮に支配されるかもしれないと。かといって、事態をすべて明るみに出してから捕まえようとする、時間がかかりすぎるのだ。

(いちばんよいのは、やはり黄柏どの自身がみなの前で罪を認めることだ)

なんとかして黄柏からその言葉を引き出さなければ、水蓮たちの負けということになる。

それだけは、どうしても避けたかった。

「黄柏どの……！」

黄柏の背中はまだ見えなかったが、水蓮は叫んだ。

さいわい通路は一本道であったため、迷うことはなかった。ひたすら進んでいくと、やがて入り口と同じように細い階段が見えてくる。黄柏が出たあと、蓋はされていないようで、四角く切り取られた光があった。

軽く上を見やり、そのままのぼっていかうとした水蓮の腕を、櫓が引く。

「お待ちください！ 首を出した瞬間に、刈られるかもしれませんよ!? 僕が先に――」

想像力が逞しいのだろうか、そう告げた櫓の顔は青白かった。

そんな櫓を目にして、水蓮も少し落ちつく。

「――大丈夫だ。私はおぬしが思っているよりも冷静だよ、櫓」

「え……？」

「上では誰も刀を構えてなどいない。なぜなら黄柏どの、この地下牢が兵士たちにばれては困るからだ」

眞柏の遺体があるうえ、黄柏が人を操る力としていたレオが繋がれているのだから、当然だ。

だが、興奮していた櫓は、そこまで頭がまわっていなかったらしい。「あ！」と感心の声をあげる。

「では、そこを開けっ放しにしていったのも……？」

「ああ。我々を殺めるためではなく、上におびき寄せるためだ。そのあとに考えられることも、たかが知れている。自分の手は汚さず、民――つまり兵士たちに捕らえさせるつもりだろう」

先ほど黄柏が口にしていた『民の力を借りる』という言葉から推測すると、そうなるのだ。

「だからこそ、先頭は私のほうがよい。曲がりなりにも対岐の藩主だ、壱奥の城兵たちも耳を貸してくれるかもしれぬ」

揺れる灯を間に挟んで、水蓮はまっすぐに櫓を見据えた。

櫓の顔色は、だいぶ回復している。そしてこくりと、頷いた。

「――わかりました。ですが、もし水蓮さまを攻撃してくるような輩がおりましたら、遠慮なく反撃させていただきます！」

頼もしい言葉に、水蓮も頷き返す。

「ああ、頼んだぞ。では行こう！」

そうしてふたりは、暗く狭い階段をのぼっていった。

辿り着いた先は、小さな部屋だ。床の間の台が階段の蓋になっていたようで、すぐ傍の壁にはいかにも価値がありそうな掛け軸がかかっていた。

案の定、人の姿はない。

(黄柏どのはどこだ?)

なにか手がかりを残してはいないかと、水蓮は狭い部屋のなかを見まわす。すると、右側の襖が少し開いており、「こちらにおいで」と誘っているかのようだった。おまけに、かすかに人の声まで聞こえている。

水蓮は足早にその襖へと近づくと、勢いよく開けた。先は外に面した板張りの廊下で、目の前には二階建ての櫓が見える。

その物見台に、黄柏がいた。

「黄柏どの！」

水蓮が名を呼び近づいていくと、黄柏は手にしていた棒を振りあげる。その棒が次に至る場所は、突き出た屋根から吊られた半鐘であった。

「みなもの者！ 侵入者がおるぞっ。対岐の間諜じゃ！ すぐに捕らえい！」

かん、かん、と強く叩きながら、黄柏は水蓮が予想していたとおりのことを口にした。

それに反応して、面手門のほうへと行っていたであろう城兵たちが、ぞろぞろと集まってくる。当然みんな、武器を手にしていた。だが心なしか、表情が暗いようだ。

(ん……？ どうした?)

櫓が言ったように、突然襲われることも想定していた水蓮は、少し拍子抜けした。城兵たちは集まってくるだけで、一定の距離以上に近寄ってはこなかったのだ。おかげであつという間に、ふたりを中心にした円ができあがる。

「――水蓮さま」

小さく名を呼んだ櫓に水蓮が振り返ると、櫓はなぜか槍を地面の上に置いていた。

「理由はわかりませんが、城兵たちは怯えているようです。一度武器を置きましょうよ」

そこまで告げてから、水蓮の耳もとに口を近づけて続ける。

「いざとなったら僕がちゃんと拾いますから、ご安心ください」

(まったく、それはこちらの台詞なのだがな)

水蓮は苦笑しながらも、応えの代わりに自分の刀を腰から外した。そして、櫓の槍の隣に並べて置く。

それを見た黄柏は、さらに激しく半鐘を打ち鳴らした。

「さあ！ ほらっ、さっさと捕らえるのじゃ！ どうしたおまえたちっ？」

しかしやはり、城兵たちは動かない。やがてそのうちの誰かが、当然の疑問を投げかけた。

「黄柏さま！ レオさまはどうなさったのです!? こんなときこそ、レオさまの出番ではありませんか！」

みんな同じことを考えていたのか、ふたりを取り囲む円全体から「そうだそうだ」と声があがった。

(なるほどな)

レオの姿が見えなくなったことに対して、城兵たちは不安がっているのだ。黄柏はレオを使って城兵たちを脅していたが、実のところレオ自身がなにかをしているわけではないということは、朱華も言っていたことだ。水蓮が城下町で話を聞いた折にも、レオのことを気にかけていた人がいたように、城兵たちもいつしか本気でレオを頼りにしていたのかもしれない。

そんな問いが出てくることなど予想していなかったのか、櫓の上の黄柏は明らかにうろたえているようだった。

「あ、あやつは体調を崩して寝ておるだけじゃ！」

「それでは眞柏さまと同じではありませんか。本当なのですか!？」

「レオさまが寝こんでいると言うならば、ぜひ見舞わせてください！」

「そうだ！ いつも前に立ってもらえばかりでなく、我々もレオさまを支えねば……！」

次々と返る言葉を打ち消すように、黄柏の半鐘を鳴らす手はとまらない。狂ったように腕を振りおろし、叫んだ。

「うるさいうるさい！ 説明はそやつらを捕らえたらたっぷりとしてやる、さっさと捕らえんかっ！」

あまりのやかましさに、その場にいた誰もが自分の耳を塞ぐ。

――しかし、ただひとりだけ、他と違う動きをする者がいた。

(え……?)

櫓だ。

素早く屈みこんだ櫓は、さっと自分の槍を拾いあげると、

「行けえ！」

実に素早い動作で、その槍を投げてやったのだ。狙いは黄柏――ではなく、半鐘を吊っている縄だった。見事に命中した縄はちぎれ、驚いてよけていた黄柏の足もとに半鐘が転がる。そのときもかなり大きな音がしたが、ずっと鳴らされるよりは遥かにましであった。

周囲の城兵たちからは、その投擲のすばらしさに賞賛の拍手が送られる。櫓はそれをぺこぺこ頭をさげて受け取っていた。とても敵同士の反応とは思えなかった。

(城兵たちの不満がとうとう爆発した、というところか)

おかげでもう誰も、黄柏の言葉を信じてはいない。

これが好機と、水蓮は声を張りあげる。

「壱奥の城兵であるみなの方、聞いてくれ！ 私は対岐の藩主・水蓮と申す者だ。こちらは守人の櫓」

水蓮が紹介すると、櫓はもう一度、今度は深く頭をさげた。

周囲から、これまででいちばん大きなざわめきが起こる。

水蓮は、対岐城で朱華の誤解を解くため人々に語りかけたことを思い出し、どの藩も民は同じだと痛感した。

(真摯に語りかければ、必ずわかってくれる)

丁寧に話して理解してもらうことこそが、藩主の役目なのだ。

「――私たちは、壱奥に攻めこむためにきたのではない。黄柏どのを捕らえ、レオどのを助けるためにやってきたのだ！」

誰も聴き逃さないように、はっきりとした口調で紡いでゆく。

「レオどのは今、黄柏どのは手により地下牢に繋がれている。嘘だと思えば、外角の西側にある井戸から入ってみればよい。その際にはぜひ、我々が土産に持ってきた語典を携えていってくれ」

そして話してほしいという水蓮の意図を、城兵たちはおそらく正確に受けとめたのだろう。

「あ！ さっき面手門に来てた人たちか」

「俺も一冊もらったぞ」

「行ってみるか……？」

「繋がれてるなら、レオさまだって怖くないしな」

「レオさまはいつも困った顔をなさっているし、本当はなにを言っているのか、ずっと気になっていたんだ」

「行こう！」

「ああっ」

さまざまな声が聞こえ、何人かが円から離れていった。ずっと秘められていたレオの優しさに気づくの

も、時間の問題だろう。

(あとは黄柏どのだな)

水蓮は体勢を立てなおした黄柏を見あげると、最後の脅しをかける。

(そう、脅しとは本来、こうして使うものだ！)

「黄柏どのっ！　今ここで、みなの前で、眞柏どのを殺めたことを正直に認めるのだ！　そうすれば私が責任を持って、おぬしを安全に都まで送り届けよう！」

「なにい……？」

黄柏は顔を歪めて唸る。

その口が反論を始める前に、水蓮はもう一度城兵たちを見やった。

「レオどのが捕らえられている牢の隣に、まだ眞柏どのも捕らえられているようなのだ。だが、牢の鍵は黄柏どのが持っているため、近づいての確認ができぬ状態だ」

それを聞いて、気の早い何人かが再び円から離れてゆく。残った城兵たちは、みんな一様に鋭い視線を黄柏に向けていた。

「さあどうする？　黄柏どの。ここで暗殺を認め、おとなしく地下牢の鍵を出すか。それを拒否して身ぐるみ剥がされるか。おぬしが選べるのは、ふたつにひとつだぞ」

水蓮の強い言葉に、黄柏の瞳は一瞬だけ揺れる。

だが――

「わ、わしは眞柏の兄じゃぞっ？　弟を殺してなどおらぬ！」

「その人の言うことは本当だ！　地下牢にレオさまがいらっしやった……！」

黄柏の言葉と、報告に戻ってきた城兵の言葉が重なり、黄柏の未来は決まった。

「黄柏を捕らえろ！」

「鍵を捜すんだっ」

「眞柏さまを返せー！」

櫓の狭い入り口に、城兵たちが殺到する。

「ひい……っ」

その様子を目の当たりにした黄柏は、顔を引きつらせると二階から飛び降りようとした。しかしすぐに、その下にも城兵たちが集まり、黄柏にもう逃げ場はない。

「は、放せっ！　ぎゃー……！」

間抜けな悲鳴が響き渡った。

これでやっと一件落着だ。

「まったく、最後まで往生際の悪い人でしたね……」

櫓はのんきにそう言いながらも、地面に置いていた水蓮の刀を拾いあげ、鞘についた土を払った。そして持ち主に差し伸べる。

「それにしてもすごいですね！　水蓮さま。結局、誰の血も流すことなく終わってしまいましたよ？」

受け取った水蓮はそれを腰に戻すと、小さく笑った。

「おぬしのほうこそ、たいした腕ではないか。あの距離であれほど重い槍を当てるとはな」

「そりゃあ必死でしたからね」

照れたように鼻の頭を搔く櫓に、真顔に戻った水蓮が告げる。

「――私も、必死だったよ」

「え……？」

櫓はきょとんと、動きをとめた。

(そう、これを言っておかねばな)

水蓮の役目は、櫓の身を守るだけではない。やはりその心も、できる限り守ってやりたかった。朱華が安心して櫓と会えるように、しておいてやりたかった。

それがせめてもの、恩返しになればいい。

「朱華姫から、おぬしに黄柏どのを斬らせるなど言われていたからな。最初から黄柏どのを討つつもりはなかったが、これほどまでにうまくいくとは、私自身も意外なくらいだ」

「えっ？ 姫さまがそんなことを……？」

「言っただろう？ おぬしが想像しているよりも、朱華姫はおぬしのことを案じている」

「そっ、それは水蓮さまも同じでしょう!? ひとりで先に突っこんでいったりしたら、梓さんが哀しみます！」

まっ赤になった櫓が反論しているうちに、城兵のひとりがふたりの傍までやってくる。

「あ、あの……水蓮さま、でしたよね。レオさまが呼んでいらっしゃるようなのですが」

「ああ、わかった。今行こう」

水蓮はそう頷いてから、櫓の上にいる城兵たちに声をかける。

「なあ、そこの者たち！ 黄柏どのを縄で縛ったら、地下牢まで連れてきてくれぬか？」

「了解です!!」

何人かの威勢のいい声が重なり、水蓮と櫓は顔を合わせて苦笑したのだった。

(一)

水蓮と椋は、捕らえた黄柏とレオを連れて、対岐(つき)への帰途に着いた。レオには吉奥(いつ)で休んでいたほうがよいのではと提案したのだが、椋と朱華に会いたいからと断られたのだ。

(まあ、ふたりとも心配しているだろうからな)

椋のために、可能であればレオを連れて帰りたいと思っていた水蓮にとっては、本人が自分から無理をしてくれるのはありがたいことだった。――とは言っても、体調に不安があることには違いないため、吉奥の藩内までは水蓮も同じ馬車に乗った。

行きは語典を大量に積んでいた馬車も、すべて吉奥城に置いてきたので帰りは軽い。中央に手脚を縛った状態の黄柏を横たえ、その両側にそれぞれ水蓮とレオが座っていた。レオはやはり疲労が激しいのか、座ったまま目を閉じて寝入っているようだ。

(――訊くならば、今か)

実は水蓮には、馬車に乗りこんだ理由がもうひとつあった。それを切り出してみる。

「なあ、黄柏どの。おぬしにひとつ訊きたいことがあるのだが」

まるで世間話をするかのように穏やかな声音で語りかけると、俯せになっていた黄柏は身動きをして水蓮を見あげた。

「……なんじゃ」

不満そうな響きではあったが、応えがあっただけよしとして、水蓮は先を続ける。

「吉奥の城下町に住む女性が、レオどのは亀李亞(カメリア)の王子だという話をしていたのだ。それはまことか、おぬしは知っているか？」

それをまず黄柏に確認したのは、まだ反抗する意思があるのかを確認する意味もあった。もともとは黄柏自身が言っていたことだと触れなかったのも、そのためだ。

すると黄柏は、「ふん」と鼻を鳴らしたあとに、

「こやつが亀李亞の王子であるのは、間違いのない事実じゃ」

思いのほかあっさり、そう告げた。

「なんと……！」

少しは覚悟をしていた水蓮も、息を呑む。それは、椋が亀李亞の王女である事実を示すことにもなるからだ。

そんな水蓮の素直な反応が面白かったのか、黄柏は「くく」と笑うともう一度口を開いた。

「――正確には、王子であった、じゃがな」

その後黄柏がぽつぽつと語ったのは、レオと椋、そしてふたりの母親の哀しい末路であった。

亀李亞では、王位は王の子に継がれるのが通例で、継承順位は単純に年齢順だという。『王の子』であるならば、嫡子・庶子の区別はなく、また男女の区別もないらしい。

そんな状況のなか、レオと椋はともに同じ母親から生まれた王の庶子で、王位継承権においては第一位と第二位という微妙な立場にあったそう。亀李亞国内では、以前から「嫡子のみ順位をつけるべし」という動きがあり、ふたりの存在を歓迎しない人々が多くいたという。

(それでふたりの母親は、レオどのをわざと矢面に立たせ、椋を隠したのか)

だが結局は、先に攫われてしまったのは椋で――

「相手の要求どおり王位継承権を捨て、こやつは城を出たが、妹はとっくに売り払われたあとじゃった。それを母親に伝えようと城に戻ってみれば、なんとその姿まで消えておったという。それからこやつは、ずっ

とふたりを捜しておったのじゃ」

「酷い話だな……」

今現在世襲制を採っていない奏和ではありえない現実に、水蓮の価値観は揺らいだ。

ふと正面に目をやると、レオの安らかな寝顔が見える。「とても悪い人には見えない」と朱華が言っていたとおり、その無垢な表情には少しの暗さも見えなかった。逆に明るいのは、髪や瞳の色だけではないのだ。

「レオどのは、とんでもない男だったのだな」

しみじみと口にした水蓮を、しかし黄柏がきっぱりと否定する。

「いいや、まだじゃ」

「まだ？」

「わしはこやつに、偉大な存在になってほしかったのじゃ。弟や、都上さえ超えるほど偉大な——それこそとんでもない男に、な。じゃから奏和に連れてきた」

黄柏はそこで一度言葉を切ると、すっと目を細めて続けた。

「おぬしはこやつを、そこまで引っ張りあげてやることができるか？」

「……どういう意味だ？」

「わしは知っておる。こやつの母親は、最初からこやつを捨て駒にするつもりだったのじゃ。そのために妹を隔離し、教育を施し、ときが来たら一位になるよう画策しておったのじゃろう」

それはつまり、いずれはレオを追放する——あるいは殺すつもりだったということだ。

「な……っ!？」

言葉を失う水蓮を余所に、黄柏は意外なほどの饒舌さで語りつづける。

「わしが亀李亞でこやつと接触したのは、当然下心があったゆえじゃった。それでも、話を聞いてゆくうちにだんだんとかawaiiそうになってな……わしはこやつに、自分を重ね合わせておったのかもしれない。わしとて、『兄』であるのに——そのように振る舞うことを強要されておったのに、その実期待されておったのは常に『弟』のほうであったからのう」

それが誰のためなのか——当人が語らなければ、答えは永遠にわからなかったであろう。

「レオに対岐を襲わせたのは、都上にその存在を気づかせるため。こやつを『傀儡にされた哀れな異国人』と思わせることが、わしの目的じゃった。さすれば都上は、こやつに手を差し伸べる以外に道はないからの。都上にもその程度の優しさがあることは、わしとてわかっておる」

穏やかに、微笑みさえ浮かべて、黄柏は締めくくる。

「わしの勝ちじゃな、若き対岐の藩主よ。わしは目的を果たした。あとは好きにするがいい」

「黄柏どの……」

(レオどのは笑顔に誰よりも助けられていたのは、黄柏どのだったのか)

レオ自身もそれを薄々感じていたからこそ、黄柏から離れられなかったのだろう。

どんなに期待されても、それ以上にはなれない。最初から、自分の前にもっと素晴らしい人がいる。そう気づいた瞬間わきあがる、絶望にも似た感情を、水蓮も知っていた。だが、その水蓮も、レオも黄柏も、似たようなものを抱えていたはずなのに、選んだ道はまったく違うのだ。辿り着いた先は。

(それを変えたのは、おそらく——絆だ)

梓に絆を見出していた水蓮は、離れていても強くあれた。

家族に絆を見出していたレオは、捜しつづけるために強くなれた。

だがきっと、黄柏には誰もいなかった。

(それでも、最後の最後にレオどのはと出会って、少しは変わったのかもしれない)

どんな理由があれ、黄柏がしたことは決して赦されることではない。ただ、それらが私欲のためだけに行われたことではないのだと、わかっただけでも水蓮の心は軽くなっていた。

「――水蓮さまっ、もうすぐ藩境でございます。馬に乗られますか？」

不意に外から声が聞こえ、水蓮は「ああ、今出る」と返事をしたあと、黄柏を見おろす。

「安心するがいい、黄柏どの。レオどののことは、悪いようにはせぬ。なにせ、私の義兄になるおかただからな」

「な、なにいつ!？」

身体をよじって驚いたその反応に笑いながら、用事を済ませた水蓮は馬車を降りた。

レオや梓の境遇には驚いたが、だからといって気持ちが変わるわけもない。水蓮が愛しているのは今の梓であり、過去の不幸をわざわざ掘り返す必要もないだろう。少なくともレオが梓に話すまでは、自分からはなにも言わないようにしようと、水蓮は心に決めた。

(――ああ、早く会いたいものだな)

馬に乗り換え藩境を越えた頃には、手を振る梓の幻影が見えるほどそう思っていた。

櫓に散々朱華の想いを訴えていたからだろうか。

梓に対する自分の想いはきちんと伝わっていたのか、会ってそれを確かめたかった。

水蓮の耳に、今度は幻聴まで飛びこんでくる。

「水蓮さまー！」

(え……?)

――違う。

それが幻聴ではないと気づいたのは、後ろを駆けていた櫓が大きな声をあげたからだ。

「梓さん！ ……あれっ？ 姫さままで!? 無理をしてはいけませんよ～っ！」

どうやらふたりの帰りを待ちきれず、藩境近くにある例の茶屋まで来ていたらしい。

水蓮たちが馬から降りると、すぐに梓が駆け寄ってくる。朱華はまだ傷が痛むのか、茶屋の前の床机に座ったままふたりに笑顔を向けていた。

「よくご無事で……！」

すでに涙目になっている梓を、水蓮は力いっぱい抱きしめてやる。しばらく、そうしていた。

「す――水蓮さまっ？」

やがて耐えかねたのか梓が名を呼ぶと、その耳もとに囁く。

「よい土産があるぞ、梓」

「え？」

それからやっ腕を緩めて、朱色に染まった梓の顔を見た。にっこりと笑いかけてから、後ろを振り返る。

「誰か、彼を起こしてやってくれ」

最後尾でとまった馬車の方向に告げると、素早く歩み寄ったのは楊だった。ほどなくして、馬車の窓からレオがひょいと顔を出す。まだ眠そうな顔をしていたが、こちらに顔を向けた途端、碧色の瞳を大きくした。

「あ……！」

同じ瞳を返した梓は小さく声をあげると、今度は馬車のほうに駆け寄ってゆく。

水蓮はその嬉しそうな後ろ姿を見送ってから、もう一度茶屋のほうを見やった。

すると、櫓はちゃっかりと朱華の隣に座りこんでおり、必死になにかを語りかけている。朱華の顔色が異常に赤かったので、水蓮には大体話の予想がついた。

(いろいろあったが、おかげでそれぞれの絆は深まったような気がするな)

水蓮はそうしみじみと回想する。

相手の、これまで見たことのなかった一面を見られた。

強さを知った。

さらなる愛しさを、感じた。

すべて、朱華が対岐にやってきたからこそその結果だ。

(そう――私と朱華姫の絆も)

壱師が望むように、家族にはなれないが、それでも水蓮はかけがえのない絆を感じていた。

互いに愛する者を守りあったことは、恋愛でも家族愛でもない新しい絆を生むのだと、初めて知ることができたのだ。

「――都上は、どんな判断をくだされるでしょうね」

不意にかけられた声に横を向くと、いつの間にか楊が傍に居た。

「それは、黄柏どのに対してか？ それとも、私や朱華姫に対して？」

水蓮が問うと、楊は目を細めて控えめに笑う。

「すべて――そう、すべてに対してでございますよ、水蓮さま」

その意味深な表情に、水蓮は肩をすくめた。

「さっぱりわからないな」

(だがきっと、悪いようにはならないだろう)

水蓮はそう信じている。

自分のもとに朱華を送ってくれた壱師ならば、最善の判断をしてくれるだろうと――。

(二)

その者は、対岐城でみんなの帰りを待っていた。

『壱師』の要請に従い、都からやって参りました、柏(かしわ)と申します」

面手門で朱華たちを出迎え、物腰穏やかに告げた青年。そこにあった顔は――  
「あーっ!？」

大きな声をあげ、堂々と指を差したのは朱華だった。

「あ、あ、あなたっ、都城の守人じゃない！」

そう、朱華が対岐へと向かうときについてきた守人であり、梓を都へと連れていったときに茶屋で会った守人でもあった。

「お久しぶりです、朱華。やっと名乗れて、嬉しく思いますよ」

余裕のある笑顔でにっこりと笑うさまは、ちょっと落ちつきがない感じのいつもの様子とはまるで違っていた。あれは演技だったのだろうか。

(父上のことを呼び捨てにしたってことは、やっぱり息子なのよね!?)

つまり、朱華とは腹違いの兄妹ということになる。普段は守人の振りをしていて、実はずっと朱華のことを見守っていたのかもしれない。

その手に握られた白い紙を見つけ、いよいよ自分の身勝手な行動が裁かれるときなのだと、朱華は気を引き締めた。壱師の教えを破っただけでなく、無断で『五十二番目の娘』を名乗った罪も増えていたから、怖さがないわけではない。それでも、隣に櫂が居てくれる分心強かった。

本来ならば客人(まろうど)は、水蓮御殿の大広間にてもてなすところだが、まだ語典を書き写した紙が多数散乱しているため、みんなで庭園を臨む縁側(すのこ)へと移動した。

桜の花びらが舞い散るなか、柏によって壱師からの文(ふみ)が読みあげられる。

『朱華についての釈明が書かれた水蓮どのの文は、確かに受け取った。ゆえに我は、成り行きを見守っていたしだいだ』

(え……?)

思いがけない書き出しに、朱華は左隣に立っている水蓮の横顔を見あげた。

(あたしのために父上宛ての文を書いてただなんて、知らなかったわ……)

胸の奥がじんわりと熱くなる。

そのせいでどれほどの覚悟を消費したのか、よくわかるだけに嬉しかった。

水蓮は、約束を守る以上のことをしてくれていた。

(あたし、五十一番目の娘でよかった!)

心からそう、思えたのだ。

感動する朱華をよそに、壱師の言葉は続いてゆく。

『此度のことで、おそらく壱奥の藩主は不在となっていることだろう』

壱師の鋭い読みは、滅多に外れない。

『よって、次代の藩主が正式に決まるまで、一時的に仮藩主となっていたレオどのに、そのまま任を託すこととする』

その言葉には、みんながいっせいにレオのほうを向いた。だが当のレオは、言葉がわからないためきょとんとした表情をつくっている。横から梓が説明をして、やっと目を丸くした。

「エロ・アグ・アマモノス? イイ・アコンっ?」

「ええと、『自分がそのままって、いいのか?』と言っています」

今度は逆に、素早くレオの言葉を翻訳する梓。

その連携のよさがおかしかったのか、柏は口もとをほんの少しだけ緩めた。

「もちろん。レオどのは、自ら藩民に手をあげたり、脅したりしたことはない、きちんと記録されています。それゆえに、ご自分で思っているよりも、みなから嫌われてはいないのですよ。互いに意思の疎通ができるようになれば、それこそそのまま藩主となることも夢ではないでしょう。壱師もそれを期待しているのか、『壱奥の人々が亀李亞語をある程度習得するまでは、梓どのが通訳をするように』と、書き添えています」

「え?」

声をあげた梓に構わず、柏はすぐに続ける。

『『その際、水蓮どのが同行するのは構わない』とも』

「えっ!?!」

次にひととき大きな声を出したのは、やはり水蓮だった。

(父上ったら、相変わらずめちゃくちゃ言うわね……)

そして相変わらず、その発言を読みきくことは難しい。それを代弁する柏の表情も、余計な感情は伝えないようよく訓練されている感じがした。穏やかではあるが、目つきは鋭いのだ。

『『いまだ家族にはなっていないにもかかわらず、水蓮どのと朱華を結ぶ強い絆は、しかと見させてもらった。今後もその絆が保たれるのであれば、婚姻は強制しないものとする。ただし、水蓮どのが対岐にいないあいだは、朱華が責任を持って対岐を守るように。また、水蓮どのが許すのであれば、その後も対岐にいることを許可しよう』』

いちばん聞きたかった言葉の含まれた内容に、自然と水蓮のほうを見やった朱華。

水蓮はその視線を受けとめてから、深く頷く。

(じゃああたし、これからもずっと対岐にいいの!?)

思わずぱあっと顔を明るくした朱華だったが、

『『——もちろん、櫻と一緒にな』』

またもつけ加えられた言葉に、今度は全力で赤面した。

(や、やっぱり最初から、全部お見通しだったんだ!)

その思惑どおりなのはわからないが、朱華と櫻、そして水蓮と梓の想いは認められ、かつ壱奥を正常な状態へと戻すことができた。これは充分すぎるほどの結果ではないだろうか。

(最初に突きつけられた、水蓮の交換条件を呑むのは苦しかったけど)

壱師の教えを破ることにひどく苦悩した朱華のことを、壱師はちゃんとわかってくれていたのだ。そうでなければ、こんな寛大な結論を出すはずがなかった。

(みんな、わかってくれる)

ちゃんと言葉にすれば。

行動で示せば。

想いは必ず伝わるのだと、朱華は強く感じた。

自然と右手が伸び、傍にある櫻の左手に触れる。

その途端、櫻が朱華の手を捕まえたから、朱華の心にあたたかい涙が滲んだ。

「——壱師からの文は、以上です」

柏は目の前に広げていた紙を閉じると、ついと水蓮のほうを見やる。

「水蓮どのは、あなたの刀が血で濡れていないこと、壱師はさぞお喜びになることでしょう」

表情を一瞬だけ崩してにこりと笑った顔は、朱華が以前見かけたものと同じだった。まだ若いだけに、笑うと結構かわいいのだ。

「それでは、罪人(つみびと)を引き取らせていただきます。審判の結果は、またあとでお伝えしますので」  
だがすぐに真顔に戻ると、てきぱきと黄柏の状態を確認して連れてゆく。その作業は、あっという間に終わってしまった。

「はぁー……都のかたって、ものすごく有能なのですね。萩さんのところにいたときも、やっぱり感じましたけれど」

その様子を興味深そうに見ていた梓が、心から感心したような声をあげたから、

「それは人によると思うわよ？ ほら、樗みたいなのもいるし」

「姫さまっ！ それじゃあ僕が無能みたいではないですか……！」

「あたしもそこまでは言ってない」

「うう……っ」

いつものふざけたやりとりが、いつも以上に心地いい。

梓もそう感じているのか、楽しそうな顔で笑っていたが、その隣に立つ水蓮の表情はなぜか冴えなかった。

「どうしたの？ 水蓮」

朱華が思わず声をかけると、水蓮は小さく首を傾げる。

「いやー有能なのは結構だが、最後に私に告げた言葉が、一体なにを言いたかったのか……まるで私が誰も斬っていないのを、見ていたような口ぶりであったしな」

「あ！ それなら僕がわかりますよっ」

そこにすかさず割りこんできたのは樗だ。自らの有能ぶりを見せつけるように、口を開いた。

「壱師さまには多くのご子息もいらっしゃると、以前お話しましたよね？」

「あ、ああ。先ほどの柏どのも、そうなのだろう？ ーそれです？」

水蓮が入れたあいの手に、樗の口もとが楽しそうに歪む。

「普通なら、そのうちの誰かを跡継ぎにしようと考えそうなものですが、壱師さまはどうもそうではないようなんです。『自らが仕えるに足る人物を探せ』と、ご子息たちに発破をかけているらしいですから」

「あ、それはあたしも聞いたことあるわ！」

壱師の実の娘である朱華が頷いたことで、信憑性は一気に増した。

「で、ではっ、さっきの柏さんは、水蓮さまを次の都上にしようと、目星をつけたということですか!?!」

珍しく興奮した様子の梓が尋ねると、樗は自信満々に大きく頷いて答える。

「その可能性は高いでしょう！」

その瞬間、御殿の外にまで聞こえそうなほど大きな「えーっ!?!」という声が揃った。

それに驚いて飛びあがったのは、会話の内容がわからないレオだ。

「アン、アドウンアン!? アドゥナティスーオドウ・ネズトゥットウ……」

そこでまた梓が説明をすると、レオは珍しく意地悪な笑顔を浮かべてなにか口にした。

すると、それを聞いた梓が慌てた様子で言い返す。それも亀李亞語だったため、朱華たちには内容がわからなかった。ただ、三人のなかでは最も勉強が進んでいる水蓮だけは、わかる部分もあるのか口もとに苦笑を浮かべている。

しばらく言いあいをしていた梓とレオだったが、やがて梓のほうが根負けしたのか、こちらに向きなおった。

「あの……非常に言いにくいのですが、兄上がどうしても言えというものですから、言いますね！」

そんな前置きのあと、告げられた言葉は――

『それなら水蓮は、さっさと都上になればいい。そして、水蓮の代わりに朱華が壺奥に来れば、一件落着かないか?』

(えっ!?)

朱華が思わずレオの顔をまじまじと見たら、その隙にレオの腕が伸びてきて、朱華の右手首を強く掴んだ。

「わ……っ」

そのまま前に引っ張られ、レオの胸に抱きとめられると、同じように引っ張られたのであろう梓とごく近くで目が合う。反射的に、顔が綻んだ。

そこに飛んでくるのは、『朱華命』の櫂だ。

「レ、レオさん!? なにをしているんですっ、姫さまを放してください! 大体、どこがどう一件落着だと言うんですか!? 問題大ありますよ! 姫さままで壺奥に行ってしまったら、対岐はどうなるんです? むしろ僕は!？」

櫂は涙目になりながらも、レオの腕から朱華を取り戻そうともがいたが、やはりレオの力は相当に強いようだ。朱華とて逃れようと頑張っているのに、その腕はまったく動かない。

「ちょっとレオ! 放してよっ。そういえばあなた、黄柏からあたしのこと、おかしなふうに聞いているんじゃないの? 梓、レオに訊いてみてっ」

「は、はい!」

朱華に従順な梓はすぐに顔の向きを変えると、レオに言葉を伝えてくれる。

そうしてやがて、朱華に届けられた返事は、恐ろしいものだった。

「黄柏さんは、朱華さまのことを兄上の花嫁だと伝えていたそうです……」

「な――」

(だからあのとき、突然抱きしめられたの!?)

おかげでいろいろと納得した。朱華は『五十二番目の姫君』として壺奥に行った身だ、そんな説明をされていても文句は言えない。思いきり、自業自得なのだ。

そして、だからこそ決意する。

「――わかったわ、梓。ありがとう! じゃああたし、頑張って亀李亞語を勉強して、自分でその誤解を解いてみせるから……!」

力強く宣言した朱華の声を、不意に吹いた強い風がさらってゆく。

高く舞いあがる花びら。

高く舞いあがる、それぞれの未来。

先の見えない未来。

(それでも、一步一步進んでいけば)

信じる気持ちを忘れなければ、どんな未来でも必ず切り開ける。

あらかじめ決められている運命すら、変えられる。

(自由に)

もっと、自由に。

誰にでも、幸せを探す権利はあるのだから――。

舞う花びらを追った朱華の視界には、上空を楽しげに飛びまわる鷹雄の姿が映っていた。

(了)